昭和八年七月七日　第三種郵便物認可
昭和八年十一月廿五日印刷納本　毎月一回一日發行
昭和八年十二月　一　日發行

精神分析

昭和八年十二月

第八號

第二・夢の研究號

（詳細內容は卷末「總目錄」中の相當個所を參照ありたし）

東京精神分析學研究所出版部

本研究所關係者名簿（いろは順）

△印雜誌委員　　*印特別誌友　　●印客員

△岩倉具榮
△伊東豐夫
井原錄郎
*池田多助
今福由江
△長谷川誠也
長谷川浩三
●早坂長一郎
*本多了惠
●堀要
*堀濱吉雄
時平佐喜雄
*遠山盛治
千葉廣洋
*林獨歩
*林中松
*和田節雄

川上水夫
●金子準二
●高島平三郎
*田中雅子
△田内長太郎
田内貞喜
*高橋退藏
高崎能樹
*高村光太郎
高水力太郎
武田忠哉
*竹之下學山
*多田玉枝
●塚原政次
*那須章彌
中山太郎
*中西定雄

△長崎文治
永田道彦
●内田勇三郎
●上野陽一
海野十三
△則近保良
小野田幸雄
小柳津邦太
奥村博史
*奥本島田
*太田繁子
△大槻憲二
*大橋正二
*大岡正已
*大山浩
*尾形孝治郎
岡田保雄

●久保良英
矢部八重吉
●山村道雄
*山田一郎
●丸井清泰
△松居桃多郎
松田俊武
●慶大神經科教室
藤木義輔
近藤石象
小山良修
*小林忠藏
小林五郎
小松德
●古澤平作
江戶川亂步
●雨宮保衞

*佐藤政宏
佐藤基
*佐々木龍治
齋藤長利
●木村廉吉
●宮田修
*水野章
*島崎勝次郎
下山善高
霜田靜志
廣井重一
*澁田見勝亮
*平岡貞一
●諸岡存
*森下雨村
*菅村氏
●杉田直樹

夢の研究を奬むる辭

人間と云ふものは、自分のためになる苦いことを云つてくれる者よりも、自分に甘いことを云つてくれる人を好むものである。況んや自分に弱味があつてそれを隱さうとしてゐる人間に於いては、なほさらさうである。學問もまたさうである。ナルチスムスをパラノイアクに煽てる或る種の觀念論の哲學や、理想社會を幻想させ、時として見當違ひの正義觀に思上らせるマルクシズムが喜ばれたのはそのためである。

然るに精神分析は一見全く素氣のない學問である。人々の弱點と本性とに對しては十二分の理解と同情とを持つてはゐるが、少しも相手を甘やかさない。飽迄も峻嚴に、冷酷に、皮肉に、突込んで來る。お世辭を云はない。然し、古人は云つてゐる、靈藥は口に苦し、と。

諸氏は既に靈藥を口にせられた。折角、口にした以上は吐き出さないで、十分に呑込んで貰ひたい。口にしただけで口當りが惡いからとて（「抵抗」して）直ぐに吐出す人が、これまた多い。併し嚙みしめると苦い底に非常に妙味があるし、呑んで滋養になること無類である。この學問の妙味を十分に味解するためには、本を讀んで頭で理解しようとするだけでは斷然駄目である。體驗の裏付がなくては駄目だ。分析者に分析を受けるに越したことはないが、それの出來ない方々は、自分の夢を記述し、それに就いて出來るだけ自由聯想をとつておゝきなさることをお勸めする。始めからこぢつけの分析を無暗に加へることは間違の基だし、吐き出しの因にもなる。分析解釋は分析學を落着いて勉强しつゝボツ〳〵と加へて行くがよろしい。納得の行く範圍だけに止めて、納得の行かぬところは未解決のまゝにそつとしておくがよろしい。然らば、漸次に斯學の妙諦に達するであらう。

夢と心靈現象（フロイド）

Traum und Okkultismus (1933),——S. Freud.

大槻憲二譯

私が夢と心靈現象との關係をお話しすると云ふ事を聞かれても、諸君はまさか驚かないであらう。併し夢は實際、神祕の世界への入口であると屢々考へられてゐるし、今日でもまだ多くの人々は心靈的な現象と見做してゐるのだ。我々は夢を科學的に研究して來た者ではあるが、それでも夢には多少神祕的なところがあると云ふことを否むものではない。神祕とか、心靈とか云ふ言葉の意味は何であるか。これ等は誠に曖昧な概念で、これを劃然と定義することは私にも出來ない。たゞ一般的な不確實なやり方で、我々萬人はそれがどう云ふものであるかを承知してゐるだけである。それは科學に依つて確立せられた明々白々たる世界——嚴然たる法則に依つて支配されてゐる世界——の彼方にある世界である。

心靈現象を認める人達は、『人々が學校で學ぶ知識では思ひも寄らぬやうな事柄が、天地の間に』現實として存在してゐるのだと主張する。ところで我々は學校の先生方のやうに偏狭にはなりたくないと思つてゐる。我々は人々が成程と思はせてくれさへするならば、何でも受容れたいと思つてゐる。

我々は科學の他のあらゆる對象に對すると同樣、この神祕現象に對しても、まづ果してそのやうな現象が存在するかどうかを見極めてかゝり、實際さう云ふ事實が存在することは疑ふ餘地がないと分つた時に、始めてそれの說明を如何にして下すかに努力すべきである。併しさう云ふ見極めをつけやうと決心しても、そこに知的、心理的、歷史的、

三つの方面からの困難の存するのを否むことが出來ない。かう云ふことは他の方面の研究ではないことである。

まづ知的方面の困難とはどう云ふことか。分り易い比喩を以て語つて見よう。地球の内部はどうなつてゐるかと云ふことが問題になつてゐると假定しよう。御存知の通り、我々には、地球の内部に就いて確なことは何も分つてゐない。我々はそこに重い金屬が赤熱狀態になつてゐると想像してゐる。ところが或る人は、地球の内部は炭酸を含有した液體、卽ち一種のソーダ水であると主張するかも知れない。併しそれはどうも本當とは思へない、我々の萬人の期待とは違つてゐる、金屬說を樹てるに至つた我々の知識の據り所を全然沒却してゐる。併しさう云ふ說はどうあつても考へられないと云ふわけではない。ソーダ水說を成程と思はせるやうな證明を誰かゞ與へてくれるならば、我々は何の抵抗をも示すことなくそれを受容れるのである。ところがまた更に第三の人があつて、彼は地核はジャムで出來てゐると大眞面目に論ずるのである。かう云ふ說に對しては我々の態度は違つて來る。ジャムは自然界には存在しない、それは人間が料理場で作り出すものである。それにまた、ジャムが存在し得るためには、まづそれより前に果樹とそれから生ずる果實とが存在してゐなくてはならない。併し我々は果物や料理法がどうして地球の内奥に這入つて行つたか分らないのである。このやうに知性的に反問して行く結果は、實際地核はそのやうなジャムで出來てゐるのかどうかを調べやうとする代りに、さう云ふ說に我々は興味を失つて來るであらう。さうして一體さう云ふ途方もない事を考へ出すのはどう云ふ人間であるかを問題にするであらう。少くとも我々は、彼がそれを如何にして知つたかを尋ねるであらう。ジャム說の主唱者は憤然として、我々が下らない學問上の先入見からして彼の主張を客觀的に尊重することをしないのだと慨嘆する。併しそんな事を云つても何の役にも立たない。先入見、必ずしも常に惡いとは限らない、先入見は多くの場合に正しいし、適切であり、無駄な骨折りを省くことが出來るものだ、と云ふことを我々は知つてゐる。先入的とはつまり、他の、立派に根據のある判斷に準據しての類推的結論に外ならないのだ。

心靈說的主張の多くは、我々にはどうもこのジャム說の類のやうに思はれるのだ。それで我々としてはそんなものは頭から拒否しても當然であるやうに信ぜられる。併しこれはそれほど單純ではない。私がとり上げたやうな比較は

何物をも證明してはゐない。一般に比較と云ふことは何物をも證明するものではない。抑々その比較がどれほど適當してゐるかゞ疑問である。で、始めから輕蔑的な心組みを持つてゐるので、そのやうな比較が決定されたのだと云ふことを人々はよく理解してゐる。先入見は多くの場合に適切であり、正當であるが、併し間違つたり有害である場合もある。さうしてどの場合が正しく、どの場合が正しくないかはなか〳〵人々に分らない。學問の歴史に於いてもあまりに我々が判斷に早まつてはならないものだと、自ら戒しめるやうな場合が隨分にある。今日では我々が隕石と名付けてゐる石が天上から地球に落下して來たものであると云ふ說や、貝殼の化石のある山上の岩は、元は海底を形成してゐたのだとの說は、永い間甚だ馬鹿げた說だとされてゐた。精神分析學が無意識心理の存在を主張して擡頭した時には、やはりかう云つた風に一蹴されたのであつた。それ故に我々分析者は、何か新しい說を拒否するに知性の力に賴ることには非常に用心深くあらねばならない、尤な理由を有つのだ。で、我々はそれを受容れないか、懷疑するか、確認しないかで、それ以上には出でないと云ふことを告白せざるを得ない。

心靈現象說を承認し得ざる第二の理由として、私は心理的契機を擧げた。と云ふのはつまり、人間と云ふものが槪して輕信的であり、不可思議を信ずる傾向があると云ふ意味である。人生の行路が非常に峻嚴になつた抑々の始めから、思想の法則の苛酷と單調とに對して、また現實を試驗しなければならないと云ふ必要に對して反抗したい心持が起つて來たのである。理性は我々から多くの快樂を奪ふものとして、我々はこれを敵視するやうになつた。時々は理性をぬきにしてナンセンスの誘惑に身を任せることが如何に愉快なるものであるかを、人々は發見したのである。學童は言葉を逆轉させて喜び、專門學者は學的會合の後に自分の活動を諧謔し、眞面目な人間も機智と洒落とを享樂する。『人間の最上の力たる理性と學問』とに對するもつと重大な敵視はなほその機會を覗つてゐる。心靈的療法の事實らしいものが、現實的醫療や自然療術家の方が『學問をした』醫者よりも優れてゐると思つてゐる。卽ち人々は秘術の方則や常道を打破するものだと受け入れられる限りに於いて、彼等は心靈的方法を歡迎するのである。彼等は批判力を眠らせ、知覺を惑はし、都合の惡い事は總てこれを拒否するのである。人間にかゝる心理傾向あることを知つ

てゐる者は誰しも、心靈術的文獻中に報告せられてゐる多くの事物を割引して見るのは尤な次第である。

第三の理由を私は歷史的と名付けた。かく名付けることに依つて注意を促したいと思ふことは、心靈現象の世界には元來何等新しいことが起つてはゐるのではなく、（我々が昔時から、昔の本から、讀み知つてをり、さうして制御し難い空想や傾向的な幻想の所產として——人間の無智の程度がなほ甚だしく、科學的精神はまだ幼稚であつた時代の所產として——淸算して了つたと信じてゐるところの）あらゆる徵象や不思議や豫言や靈魂現象が新たに擡頭してゐるのだと云ふことである。心靈術家が報告して今日でもなほ起つてゐると云ふところの事柄を本當として受容れるならば、我々はやはり昔の物の本に書いてあることも本當として受容れなければならない。そこで我々は考へるのであるが、民衆の傳統や神聖な書物の內にはさう云つた荒唐無稽な話が滿ち充ちてゐるし、また宗敎はそのやうな異常な、不可思議な出來事に依つて人々の信仰を繫ぎ、その超人間的な力の證明をそれ等の出來事の內に見出てゐるのである。それ故に我々は、心靈術的興味が元來宗敎であつて、心靈現象探究の運動の秘かなる動機は、科學思想の進步に依つて危殆に瀕した宗敎に助け舟を出さうとするにあるのではないかとの疑ひを避けることが困難になつて來る。さうしてそのやうな動機を一つでも認識すると、我々の不信は大きくなり、所謂心靈現象探究への我々の反撥が愈々甚だしくなつて來るのである。

併しながらかゝる反撥は遂に克服されなければならない。心靈探究者たちの擧げてゐる事柄が果して眞實であるか否かゞ問題であるのだ。それはやはり實地觀察に依つて決定せらるべき事柄でなければならない。根本に於いて我々は心靈現象探究者たちに對して感謝しなければならない。昔時からの不思議の話は、今日の我々には調べて見ようがない。さう云ふ話は證明がつかないと我々は考へるにもせよ、それ等は一生懸命に否認すべきでないことは容認せざるを得ない。併し現在我々の眼前に起つてゐることで我々の反對し得べき事柄に就いては、我々はやはり確實な判斷を下すことが出來る筈である。さう云ふ不可思議は今日は起らないとの確信を得たならば、昔時には起つたのだがと云ふやうな抗議には我々は恐れなくなるのである。さう云ふ確信が得られゝば、他の說明も遙に容易になつて來る。

このやうに我々は、我々の方の考察は姑く別問題としておいて、心靈的現象の探究者に從つてその觀察に伍して見ることにする。

殘念なことに我々はまづ、我々の本當の意圖には非常に不都合な事情にぶつかるのである。我々の判斷の根據となるべき觀察が、我々の感官的知覺を不確實ならしめ、我々の注意力を弱める如き條件の下に於いて、卽ち暗の中や、微かな赤光の中や、永い間の空しき期待の後に、得られるのである。我々の不信な、つまり批判的な、心的態度が既に、期待せられてゐる事柄の發生を妨げることになるのだ、と云ふのである。このやうな心的狀態の下に觀察しようなどゝ云ふことは、我々の科學的研究の心的態度から見ると、誠に滑稽なものである。觀察は所謂靈媒（Medien）に就いてなされるのである。その靈媒とは、そこに特別な『感覺的』能力があると信ぜられてゐる人物であるが、併し彼等には特別に優れた精神的又は性格的特質があるわけでもなければ、昔の奇蹟實現者のやうに、偉大な思想や眞劍な意圖を持つてゐるわけでもないのだ。それどころか、彼等の神秘力を信じてゐる人達からさへも甚だ信賴されてはゐないのだ。彼等の多くは、既に欺瞞師として假面を剝がれてゐるのだ。だから、それ以外の連中もやはり御多分に洩れず、欺瞞師であると分る日は遠くはあるまいと云ひたくなるのだ。彼等の爲すことは、子供の惡戲か手品使ひかのやうな風に感じられる。併し、この靈媒の働きには、何か別の助勢が使用されてゐると云ふやうな事はなかつた。何か別の力の原體がそこに近付くやうなことはないやうにせられてあつた。勿論、人々は、手品師がその藝當に依つて、何も這入つてをらぬシルクハットから鳩を出して見せるからとて、手品師が鳩のよりよき飼育法を心得てゐると人々はは期待しないであらう。何とか客觀的な試驗をやつて見たいと思つて心靈術の實驗の座に列して見るが、併し暫時にして倦怠し、そこで爾々の氣分になつてをれと强要せられることが不快になり、そこを去つて遂にやはり元の默阿彌で、何の學ぶところもなく前の先入見に立ち戻ると云ふ人があるが、その心持は私にもよく分る。さう云ふ人に對しては、心靈現象探究者たちはかう云ふであらう、それは正しい態度ではない、心靈現象を探究しようと思ふならば、その現象は爾々であらねばならぬとか、爾々の條件の下に起るべきだと云ふやうな注文を出してはならぬと。

一體に氣持を引締めたり、注意を集めたりすることによつて、靈媒の不信に對する警戒としようとすることは、却つて禁ぜられてあるらしいのだ。遺憾ながら、このやうにして、心靈現象探究者の觀察に容易に近付いて行つて確證し得べき近代的の技法は駄目となるのだ。心靈現象の研究は特殊な困難な業務となり、他の仕事と並行して從ふことの出來ないものとなる。で、それを專攻する研究者が結論に到達するまでは、人々は懷疑しつゝ、自分自身の想像に任せておくより外はないことになるのである。

どう云ふ想像をするかと云ふに、まづ、心靈現象に於いてはまだ認識せられざる事實の實際の核心（それを欺瞞と空想力とを以て幾重にも取卷き被ひ匿してゐるのだ）が問題になつてゐるらしいのだ。併しながら如何にしてこの核心に近付いて、問題を解決すべきか。こゝに於いて我々の助けとなると思はれるのは夢である。何となれば、夢に依つて我々は、雜然たる一切の中から超感官的感應（テレパティー Telepathie）の問題を把り出すことが出來るからである。

御存知の通り、テレパティーとは、一定の時に起つた或る出來事が、空間的に遠く離れてゐる他の人間の意識に、普通に我々の用ふる報告の方法を借りずして、同時に上ると云ふことなんである。暗默の間に豫想せられてあることは、かゝる出來事の起る人物に對して、その報告の受信者たる他の人物が、感情的に非常に强い興味を寄せてゐると云ふことである。卽ち、例へば、Aなる人物が災難に會ふか死んだりすると、Bなる人物（Aに極親しい母とか娘とか愛人とか）がほゞ同時に、視覺的に或は聽覺的に、それを知覺すると云ふことである。聽覺的に知覺する場合には、報告が宛も電話か何かでのやうに諒解せられるのであるが、併し心理的な無線電信と云ふやうなわけではないのである。そのやうな過程が如何に眞實らしくないかを、私は諸君の前に强調する事はせぬ。また人々はこれ等の報告の大部分を相當の理由に依つて拒否することも出來よう。併しさう容易に拒否出來ない報告も多少は殘るのである。ところで私はこれ等の報告を『事實だと云はれてゐるところの』と用心深く條件を付けておいたが、こゝで、自分のお話の目的のために故意にこの條件つきの言葉を取去つて、私がこれ等を遠隔感應的現象の客觀的現實性を信じてゐ

るかの如くに話を進めて行くことを、まづ諸君にお許し願つておきたい。

私は元來、諸君にお話することは少しゝかないのだ。たゞ一つ眞實らしくない事實があるだけだ。私は同時に諸君の期待を制限するためにかう云つておきたい、即ち夢は根抵に於いて遠隔感應（テレパティー）とはあまり關係のないものであると：：。テレパティーは夢の本質に新たな光明を投ずるものでもなければ、また夢のためにテレパティーの現實性が直接的の證據を供せられたわけでもない。テレパティー的現象はまた夢にのみ關係してゐるわけではない。それは覺醒狀態の間にも起るものである。夢とテレパティーとの關係を論ずる唯一の根據は、睡眠狀態が遠隔感應的の通信を受容れるべく特別に適合してゐるやうに思はれる點に存する。そこで人々は所謂遠隔感應的の夢を受容れて、それを分析して見ると、この遠隔感應的の通信が或る他の晝間の記憶殘物と同じ役割を果してゐることが分る。さうして、晝間の記憶殘物と同樣に、夢の仕事のために變化せられ、夢の仕事の傾向へと奉仕せしめられてゐることを人々は確信するのである。

さう云ふ遠隔感應的の夢の分析をして居ると、私にまで非常に面白く思はれるあまり、つまらぬことではありながら、この講義の出發點をせざるを得なかつたところの事柄が生じ來るのである。私が一九二二年にこの對象に關する最初の報告を試みた時には、私の持合せてゐた觀察はたつた一つであつた。それ以後、私はそれに類似する多くの他の觀察をなし得たが、併し私はこゝでやはり最初の實例を問題にすることにしたい。何故ならば、その實例が最も話し易いし、またその方が諸君に分り易くもあるだらうから：：。

明かに知識階級者で、自分の振込では何等『心靈現象探究者的臭味のない』或る人間が、私のところへ或る重要な（と彼に思へる）夢を報告して來た。彼の娘は既に結婚してゐて、遠く離れて生活してゐたが、十二月の中ば頃に最初の分娩をする筈になつてゐた。この娘は彼の殊の外の愛娘で、娘の方でも父親つ娘であつた。ところが彼は十一月十六日の夜、十七日の朝にかけて、彼の夫人が双生兒を生んだと夢見たのである。それに續いてなほ細々したことで說明のつきかねることが澤山にあつたが、それ等についてはこゝでは報告を省いておく。夢の中で彼のために双生兒

を生んだ妻君は、彼の第二番目の夫人で、彼の愛娘にとつては繼母であつた。彼はこの夫人から子供の生れることを願望してゐなかつた。彼女は正しく子供を敎育出來るやうな柄でないことに見限りをつけてゐたし、また夢の當時に於ては彼女との性的交渉は永い間絶えてゐた。何故彼がこの夢を私に報告する氣になつたかと云ふに、それはこの夢の顯在內容が私の夢の說に矛盾する（自分の生ませたく欲せざる妻から子供が生れること）ためではなく、さりとて自分の欲せざることが起きることを怖れてゞもなかつた。何故ならば、彼はこんな事が起きる筈はないと云つてゐたほどだから……。彼をしてこの夢を私に報告せしめたものは、彼が十一月十八日の早朝、娘から双生兒が生れたとの報告を受取つたことであつた。電報はその前日に打つたのだ。出產は十六日の夜から十七日にかけてあつたのだ。丁度彼が夫人の双生兒分娩の夢を見たのと同じ頃合であつた。そこで夢の本人は私に尋ねるのである、夢と事實との符合をこれでも偶然的であると私が敢て云ふかと。併し夢の本人とても、これが遠隔感應的の夢であるとは云はないのだ。何となれば、夢と事實との間の相違は、分娩者の相違（さうしてこれが本質的なことゝ彼には思へた）にあつたからだ。併し、彼の云つて來た事の中で、特に氣の付かれた事は、彼が本當の遠隔感應的の夢に就いて不思議に思つてゐないらしいことである。娘はその出產の苦しみの中で慥に『特に彼（父）の事を思つてゐた』と彼は云つてゐる。

こゝまで云へば諸君は慥に、この夢をもう說明し得るであらう、さうして私が何故にこの夢を諸君にお話したかをも理解し得るであらうと、私は信ずる。夫たるものが二番目の妻君に滿足しなかつたならば、彼は寧ろ最初の結婚に依つて得た自分の娘のやうな女を得たいと思ふかも知れない。これは勿論、無意識にとつて『如何にして……？』と云ふ懸案となつてゐる。その時、夜になつて、娘は双生兒を生み落したとの遠隔感應の便りが屆く。夢の仕事はこの便りを案配し、無意識の願望をこの便りの中に織り混ぜる。かくてその願望のために娘は後妻の代りに置かれ、かくて願望を被ひ匿し便りを變形せしめる、をかしな、顯在的な夢は生ずる。で我々は云はなければならない。これこそは遠隔感應的の夢であつて、夢の解釋に依つて始めてこの事實は發見された（もしこの解釋法を用ゐなかつたならば到底發見されなかつたであらう）のであると……。

併し誤解はしないで頂きたい！　以上のやうな事があるにしても、夢の解釋は遠隔感應的事實の客觀的眞實に關しては、何事をも語つてゐるのではないと云ふことを…。この事實らしく見える事柄はまた別様の説明を下すことも出來るのである。この男の潜在的な夢の思想が次のやうに動いて行つたとしても、それは如何にもあり得る事である——どうも娘は一ヶ月勘定を間違へてゐたやうな氣がするのだが、もし間違へてゐたとすると、今日あたりは丁度分娩のあるべき晩だ。この前に會つた時には、何か娘の様子から見て、どうも双生兒でも生みさうな風であつた。それに俺の亡妻は馬鹿に子供好きであつたから、双生兒が出來たと知つたらどんなに喜ぶことだらう！（この事は夢の本人の聯想に基いてゐるのであるが、その聯想の事はまだ言及してゐなかつた）。この場合、夢の本人の想像は如何にも尤で相當の根據があるが、これは夢への刺戟の遠隔感應的の便りではないが、結果としてはやはり同じであると思ふ。諸君にもお分りの通り、以上の如き夢の解釋では遠隔感應と云ふ事は客觀的現實性を認むべきかどうかと云ふ問題に關しては、何事をも明かに云つてはゐないのである。この問題を解決するには、この夢の場合のあらゆる關係方面を立入つて調べて見なければならないのだが、併しこの場合も、私の知つてゐる他の心靈現象的の場合と同様、一向私には細かい事が分つてゐないのだ。遠隔感應を假定することに依つてこの問題が遙かに簡單に解決されると承認するにしても、併しそれに依つて大して得るところはないのだ。最も簡單な説明が常に最も正しいとは云へない。眞理は甚だ屢々、さう簡單ではない。で、人々はそのやうな行き過ぎた假定を下さうと決心する前に、あらゆる警告を禁制して了はうとするのである。

夢と遠隔感應との問題はこれだけにしておく。私としてはもうこれ以上の事は云へない。併し諸君は多分からお氣付きになつてゐるであらう、夢は遠隔感應に就いて何事をも敎へはしないが、夢を解釋して見たり、精神分析的に細工を加へて見たりしたならば、分つて來るであらうと。で、我々はこれから姑く夢を全然離れて、精神分析を利用することに依り、他の心靈的（神祕的）と呼ばれてゐる諸現象を何等かの方途に於いて闡明し得るか否かを調べて見たいと思ふ。例へば、以心傳心（Induktion oder Gedankenübertragung）と云つたやうな現象があるが、これはテレパ

ティーとは非常に似たものであるから、あまり無理をせずとも同じものと見做すことが出來る。或る人物に於いて起る心理的過程、觀念、亢奮狀態、意志衝動などは、たゞ空間を通じて、言葉や標識に依る誰でもが知る通信方法をとらずして、通達することが出來ると云ふのである。もしそのやうな事が起るものとすれば、それは如何にも興味あることであり、實際的にも重要なことであらうと、諸君は思はれることであらう。それに就いてまたからも云はれてゐる、この現象に關しては昔時の不思議を報じてゐる書の中には、殆ど何も言及してゐないと。

患者を分析處置してゐて私の感じたことは、豫言を職業的にしてゐれば、以心傳心に關して（特別の抗議を受けずに）觀察を試み得る好都合な機會が有てると云ふことであつた。その豫言をするのはどう云ふ人間かと云ふに、それは平凡な、或は寧ろ劣等な人間で、彼等は何かの職業に從事してをり、札をひつくり返したり、筆蹟や手筋を調べたり、占星のための算數をしたりしてゐて、その際に來訪者が過去及び現在の運命の細々したことをありのまゝに打明けると、卽ちその人の未來を豫言して聞かせるのである。すると、お客の方は大抵はその豫言で大滿足し、その豫言が後になつて當らなくても大して口惜しいとも思はないのである。私はさう云ふ場合をもつと澤山に知つてゐる。さうしてそれ等を分析的に研究することが出來たから、それの著しい一つの例を直ちに諸君に報告するであらう。併しその場合の細々したことを全部喋舌つて了ふことは、醫者として患者に對して不德義であるから、種々な點を云はないで置かなければならないから、そのためにこの報告の證明力は削減されるであらう。併し事實を歪曲させたり、變裝させたりすることは嚴密に避けておいた。で、これから私が話すのは私のところへ來た或る婦人患者の一人の話であるが、彼女は或る豫言者の許でさう云つた體驗を有つたのであつた。

彼女には男女の同胞が多かつたが、彼女は最年長であつて、異常に强烈な父への愛着を持ちつゝ成長した。若くして結婚し、結婚生活には悉く滿足したが、その幸福の望月に缺けたる唯一のものは子供のないことであつた。その點に於いてその夫は彼女の父の代償とはなり得なかつた。永年の間、彼女は不滿の內に過ごしてゐたが、遂に婦人科の手術を受けると云ふ決心をした時に、夫君は打明けた、責任は自分にあるのだ、自分は結婚前に或る病氣をしたゝめ

に子供を作ることが出來ないことになつてゐるのだと。この絶望を忍んだのが悪く、彼女は神經症となり、明かに試驗の不安に惱むやうになつた。彼女の心持を引立てるために夫君は彼女を商用の序にパリへ連れて行つた。パリで彼女は或る日ホテルの廣場で椅子に腰を下してゐた時に、ホテルの雇人達が忙しさうに立騷いでゐた。彼女はどうしたのかと尋ねたところ、占師が來てゐるのだとの事に、彼女は自分達の部屋へ急いで自分も見て貰つていゝかと相談に行つた。夫君はそんな事はよせと云つたが、併し夫の眼を盜んで占師の部屋に忍び込み、豫言を乞ふた。彼女は二十七歳であつたが、歳よりも遙かに若く見える方で、結婚の指輪を外してゐた。占師は彼女に掌を皿の上におかせた。皿には灰が布いてあつた。占師は灰の上の手形を仔細に檢べて、やがてこれから彼女の身の上にふりかゝつて來るあらゆる苦難の話をし、さうして慰め顔に、やがて結婚して三十二歳になれば二人の子供の母になると確言した。彼女がこの話を私にした時には、彼女は四十三歳であつて一向子供など生みさうな樣子はなかつた。このやうにその豫言は全然的中しなかつたのであるが、その話をする時の彼女の樣子には一向口惜しさうな風はなく、まるで何か樂しい經驗の思出でもあるかのやうに如何にも滿足してゐるやうに見えた。それに就いて容易に確言出來ることは、彼女が歳の三十二と子供の二人と云ふ二つの數字が何を意味してゐるかを少しも感じてゐない、否、抑々何かの意味があるとは感じてゐないと云ふことであつた。

諸君は云はれるであらう、これは如何にも馬鹿げた、わけの分らない話であると。さうして私が何のためにこんな話をしたのかと尋ねられるであらう。私も分析を試みてその豫言の解釋がつかなかつたならば——今やこれが問題解決の契機點となつてゐる——私も諸君と全く同意見となつたであらうが、分析に依つて細部の説明がついたので、動かぬものとなつてゐる。二つの數はつまり、私の患者の母の生活中に關係してゐるところがあるのだ。母親は非常に晩婚で三十を過ぎてゐた。併し晩れてゐたゞけのものを、急いでうまく取戻したと始終その家庭で話の種になつてゐた。最初の二人の子供（私の患者の方が先であつた）は同一暦年内に最小可能の期間を隔てゝ生れた。さうして三十二歳にして彼女は實際に既に二人の子供を持つてゐた。だから私の患者の占師が云つたことは、つまり、貴女はまだ

若いのだから心配しなさるなと云ふ事であつたのだ。貴女のお母さんはやはり子供を持つに長く待たねばならなかつたが、貴女もお母さんと同じ運命を辿ることになり、三十二歳にして二兒を得るであらう。併し母と同じ運命を辿ること、彼女の位置に据り、父に對して母の代りになることは、實は彼女の若い頃の最も強い願望であつたのだ。ところがこの願望が實現されないことになつたので、彼女は惱み始めたのである。豫言はこの願望がやがて實現されるやうに云ふのであつた。彼女がその占師に對してどうして好意を持たずに居られよう。併し、初對面のその占師が彼の許に遇然的に來た客の細々した家庭の經緯を知つてゐる筈はないと諸君は考へられるであらう。全く、知つてゐる筈はないのである。一體、彼はどうしてこれを知り、知ることに依つて二つの數を擧げ、彼女の最も強く深い願望の圖星を指すことが出來たのであらうか。この不思議を說明するには二つの仕方しかないと私は考へる。彼女が私に話したのは本當でないか、卽ちもつと別の話であつたのを彼女が空想的に作りかへたか、或は思想の交付（以心傳心）と云ふことが現實の現象として存在してゐると承認するか、何れかである。何しろ十六年も經つてゐることであるから、彼女が問題のこれ等二つの數を無意識內容から記憶內容に轉移させたと云ふことは、勿論考へられ得ることである。私はかう云ふ想像を下すだけの確かな據所はないが、併し私はその想像を一概に排斥することは出來ないのだ。さうして諸君もまた以心傳心の現實性を信ずるよりはさう云ふ假定の方を信ぜられるであらうと私は考へる。それとも諸君が以心傳心の現實性を信じようとされるならば、この神祕的な事情を發見し、とり出して來たのは分析であつて、分析するまではそれが到底認識し難い狀態にまで歪曲されてゐたのだと云ふことを忘れないで頂きたい。

私の婦人患者の場合の如きたゞ一つだけが問題になつてゐるのであつたならば、人々は何だと云ふ顏付で不問に附して了ふであらう。それほど決定的な轉向を意味する信念をたゞ一つやそこらの觀察に依つて打立てようとは何人も考へまい。併しこれは私にとつて唯一の經驗ではないのだと云ふ私の斷言を信じて頂きたい。私はさう云ふ豫言の數々を集め、その總てからして、豫言者が相手の考へてゐることを、殊にその祕めてゐる願望を表現したに過ぎないのである、で、それ等の豫言を恰も相手の主觀的所產、空想、夢であるかの如くに分析することが正當であると云ふこ

とを感じたのである。勿論、總ての場合に同樣な證明力があるわけではないし、また總ての場合にもつと合理的な說明を下すわけに行かないと論ずることが可能であると云ふわけではないが、併し全體としては、實際に觀念交付（以心傳心）があるものと見る方が本當らしいところが、强く殘つてゐるのである。これは問題がなか〳〵重大であるから、私の實驗した總ての場合をこゝに紹介するのが正當であるが、併しそれをするためには非常に話が長く多岐に亙るし、それに關係して迷惑を人に與へることにもなるから、出來ない。で、私は出來るだけ良心を殺して、次に二三の實例を紹介するであらう。

或る日、高等の學識ある靑年が私を訪ねて來た。彼はも一度試驗を受ければドクトルの學位が得られるところまで行つてゐる學生であつたが、その試驗を濟ますことが出來ないのだ。何となれば、彼自身の嘆ずるところに依ると、彼は一切の興味、注意力、否、秩序的記憶力をさへ喪失して了つてゐるからである。かう云ふ障害ある狀態へのこれまでの成行は直ぐに分つた。彼は非常に苦しい自己克服の行爲をなした後に病氣になつたのだ。彼には一人の女同胞がある。彼女を彼は非常に激しく愛してゐたが、併し常にそれを抑へてゐた。彼女の方でも、彼に對して同樣であつた。我々はどうして結婚してはならないのかと云ふ嘆きを彼等は常に持つてゐた。或る相當の人物がこの婦人に戀した。婦人の方でもこれを受容れたが、兩親がその結婚を承諾しなかつた。困つた揚句、二人は婦人の男同胞に助けを乞うた。で、彼は出來るだけの事をして見ようと云つて兩親に手紙をやり、そのために兩親も動かされて遂に承知した。その婚約中に一つの遇然的な出來事が起つた。それの意味は容易に判知することが出來る。彼は未來の義兄と一緖に案內人も連れずに困難な登山を試み、二人とも道を踏迷ふて再び健全に歸つて來られないほどの危險に陷つた。女同胞の結婚後、間もなく彼は前に云つたやうな精神耄弱狀態に陷つた。

精神分析の效能に依つて勉强が出來るやうになり、彼は私の許を去つて試驗を受けに行つたが、併し彼は同年の秋、暫くの間、試驗を無事に濟ませて後に、また私の許に歸つて來た。その時彼は、夏前に經驗した一つの著しい事件を話した。彼の行つてゐた大學町に女占師が居て、大層流行してゐた。君主の家の皇子樣方もやはり、重大な事を

行ふ前には、必ずそこへ伺ひを立てる習はしになつてゐた。その女占師の占ひの仕方と云ふのは、極めて簡單であつた。彼女はまづ當人の誕生日を云はせる、それだけで他には何も訊かうとしない。名前も聞かうとはしない。やがて彼女は占星術の書物を開き、永い間計數を行つた後に、當人に關する豫言を與へる。私の患者は彼の義兄のためにこの占師の妙術を乞はうと決心し、彼女を訪れて義兄の誕生の日を教へた。彼女は例の計數を行つた後に、かう豫言した。――この人は本年の七月か八月に蝲蛄か牡蠣の中毒で死ぬでせう、と。そこで私の患者は自分の話を結ぶにかう云ふ言葉を以てした。『それは大したものですよ!』

私は始めから不興な氣持で聽いてゐたが、患者がかう云つたので、私は始めて口を利いた。――その豫言のどこがそんなに大したものなんですか? 昨今は既に晩秋となつてゐるが、貴君の義兄はまだ死んではゐないことは、既に貴君が前から云つてゐられる通りである。つまり豫言は的中してゐない。いやその點は成程大したものとは云へないが、と私の患者は答へる、併し注意すべきは次の點です。私の義兄は蝲蛄や牡蠣となると目のない男で、前年の夏――つまり女占師を訪ふ――前に牡蠣に中てられて殆ど死にさうであつたのです。私はこれに就いては何と云ふべきであつたらうか。私はこの高等教育ある人間、その上首尾よく分析で癒つた人間が、這般の消息を觀破し得ないとは何事だと、少しく不機嫌であつたのである。私としては、占師が占星術書を繙いて蝲蛄や牡蠣の中毒を探り出すことが出來ると信ずるよりは寧ろ、私の患者がその愛の競爭者に對する敵愾心(これを抑壓してゐたゝめに彼は當時病氣になつてゐたのだが)を未だ克服してゐなかつたのだ、さうして女占師は端的に彼自身の期待を表現して、さう云ふ戀愛をやめなければ、いつかは身の破滅になるぞとの意を仄めかしたのだと考へたいのである。この話に對しては、私の患者が恐らく私をからかつたのだと説明するより外はないと、私は告白する。併し彼はその當時もそれから以後も、この私の疑ひに根據があるとは思はせなかつた。さうして彼の云つたことは眞面目であつたやうに見えてゐた。

も一つの話。身分のある或る若い男が社交界の一婦人と關係を結んだが、その關係には非常に強迫的なところがあつた。時々彼は悔辱的な嘲笑的な言葉を以て彼女を苦めてゐたので、女は遂に絶望に陥つた。そこまで彼女を惱ます

と、男は氣持が輕くなつて仲直りをし、贈物をした。併し彼は段々女から離れたいと思ふやうになつた。彼女に對して强迫的にひきつけられてゐるのが無氣味になつて來た。彼自身の評判がそのために惡くなつて來ることを感じた。彼は本妻を有つて家庭を固めようと思つた。たゞ彼は自分の力ではその女から離れることが出來なかつたので、彼は精神分析を受けることにした。さきに云つたやうな侮辱を女に加へた場面の後に、（それは既に分析を受けてゐた間の事であるが）、彼は女に自分宛にハガキを寄越させ、そのハガキを、文字に依つて運命を判斷する者に示した。その者はかう云つた。――この文字の筆者は非常な絶望に陷つてゐます。極めて近い内にこの人は自殺するでせう、と。この豫言は的中せず、女は生きてゐる。併し分析に依つて女に對する男の心の羈は解け、完全に女から離れることは出來、今度は或る若い處女に彼は向つて行つた。さうして彼女は彼のためによき妻となつてくれるであらうと期待してゐた。その後、間もなく、彼は一つの夢を見たが、その夢を解釋して見ると、彼はやうやく娘の價値を疑ひ始めてゐることが分つた。今度はまた娘からも彼は手蹟をとり寄せ、それを例の判斷者に示したところ、やはり彼の疑つてゐる通り、これはつまらぬ女であると云ふ判斷が與へられた。かくて彼はその女を妻にしようとの意圖を放棄した。

筆蹟判斷者の意見、殊に前の女に就いて與へた判斷を正しく評價するためには、我々は例の若い男の祕密の生活史を知らなければならない。彼はまだ極若い頃、天性情熱家であつたところから、或る若い併し彼自身よりは年長の娘に狂熱的に惚込んだ。併し女には肘鐵砲を食つたので、自殺をしようと試みたが、その意圖の眞劍であつたことは何人も疑ひ得なかつた。然るに偶然に依つて彼は死を免れ、永い間の靜養の後に恢復した。併しこの思ひ切つた行爲のために相手の女は非常に强い感動を受け、彼に好意を示すやうになつた。男は彼女の愛を得、その時以來密接な關係となり、騎士の如き態度で彼女を遇した。二十年以上經つて二人とも年をとつた時に（勿論、女の方が年長である）、男は女から別れ、獨自の生活を送り、家と家族とを確立したいとの要求を持つやうになつた。この倦怠感と共に彼の心中には、愛人に對しく抱いてゐた復讎慾が起きて來た。彼女が嘗て自分を辱めたが故に自分は自殺しようとしたのであつて見れば、今や彼が彼女を棄てたが故に彼女が死を求めるならば滿足するのである。併し彼の愛情はまだ强く

て、彼は自分のこの願望を自意識するに至らなかつた。また彼女を自殺させるほどの悪い態度を彼女に示すことも出來なかつた。かう云ふ心持に於いて彼は例の社交婦人を云はゞ代用に取上げ、試驗的にこの婦人に於いて復讐慾を滿足させようとし、彼女に對してあらゆる苦痛を與へた。この苦痛を與へることに依つて、彼が愛する妻に對して望んだところの結果（自殺）をその婦人がなすであらうことを期待したのである。復讐が本來妻を目當てにしてゐるものであることは、彼が情事を妻にひた匿しに匿す代りに、却つて彼女を相談相手にしてゐたことに依つて知られる。愛の施與者から愛の被受者に下つてゐたこの哀れな妻は、彼から信用されてゐることに依つて却つて、虐待されてゐる社交婦人よりも恐らく餘計に苦しめられたやうであつた。彼が社交婦人に對して抱いてゐた强迫的な愛情は、さうしてそのために分析をまで受けなければならなくなつた愛情は、勿論、昔の愛人からこの婦人に轉嫁されたものであつた。彼は實は、この昔の戀人から離れたいと思つてゐたのだが、離れ得なかつたのだ。

私は筆蹟判斷者ではない。筆蹟から當人の性格を判知したりする術には多くを期待し得ないし、またこのやうな方法で筆者の未來を豫言出來るとは信じ難い。併し諸君にもお分りの通り、筆蹟學の價値を如何に信じるにもせよ、見落すことの出來ない事實は、その智者が筆者は近日中に死ぬと豫言した場合には自分に尋ねてゐる人間の强い祕かな願望を明かに云ひ表はしてゐるのだと云ふことである。これとやゝ似たやうなことがやはり第二の意見の場合にも起つてゐる。たゞこの場合には無意識の願望は問題とならず、質問者の心中に芽み來りつゝある懷疑と煩はしさとが判斷者の口を通じて明白に語られてゐる。私の患者は分析の助力に依つて、彼が陷つてゐた愛慾網の中から脫し、正當の戀愛選擇をなすことが出來るやうになつた。（未完）

夢研究のノートから

長谷川誠也

『大智度論』の第六卷に、夢についての說明がある。これは『摩訶般若波羅蜜多經』中の文句、
「諸法は幻の如く、焰の如く、水中の月の如く、虛空の如く、響の如く、犍達婆城の如く、夢の如く、影の如く鏡中の像の如く、化の如しと解了す」
と言ふのを解釋してゐる所にあるものだ。この解釋は、旣に多くの夢研究書に引用されてゐるから、今さらこれを紹介する必要もないやうなものだが、念のために全文を揭げよう。
「復た次に夢に五種あり。若しくは身中調はず、若しくは熱氣多ければ則ち夢に火を見、黃なるを見、赤きを見る。若し冷氣多ければ則ち水を見、白きを見る。若し風氣多ければ則ち多く飛ぶことを見、黑きを見る。又復た聞見する所の事を多く思惟し念ふが故に則ち夢を見る。或は天の夢を與へて未來の事を知らしめむと欲するが故に(夢を見る)。是の五種の夢は、皆實事なくして而も妄りに見るなり。」(國譯大藏經に據る)
熱氣、冷氣、風氣の三原因を說く所は、生理的研究である。殘りの二つは、全く心理學的說明であつて、第四の聞見する所の事云々は、記憶を基とするもの、第五の天の夢を與へて云々は、願望の心理を考察してゐるものである。卽ち無意識的過程を天意と見たものだ。最初の三つは、外部から來る刺激か、あるひは體內の狀態の意味か、どちらかは判然としてゐないけれども、この見方から、夢の分析と診斷との關係に及ぶ考方の道の開かれてゐることは明らか

である。さらに、第五の說明から夢判斷の考へに到達することは言ふまでもあるまい。
大論の著者、龍樹菩薩は千部の論師、あるひは八宗の祖師と言はれる人で、生存時代は、西暦紀元後百五十年頃から、同二百五十年頃までの間であるといふことだ。

○

私は本誌の創刊號に、廣訶提婆（大天）のことを書いた。この僧は、或時、夢に不淨を漏らし、弟子に、汚れた衣を洗はせた。弟子は變に思つて訊いた、師は既に煩惱の盡きてゐる羅漢であるのに、しかもこんな事があるのですかと。大天は說明した、漏には二種ある。一は煩惱漏で、羅漢にはこれが無い、他は不淨漏で、羅漢にもこれはある、煩惱が盡きたと言つても、便利涕唾などが無くなると言ふわけのものではない、我が漏らしたのは、魔のために嬈されたからであると。今日から見れば、魔といふのは、抑壓された無意識的性慾のことである。とにかく大天が、羅漢意識と本能的、もしくは無意識的心理とを區別して說明したところは、さすがに智者である。この話が、彼の提唱した五事の新說中の「餘所誘」の例證となるのだ。

○

釋迦如來誕生の傳說はかうだ。（佛本行集經に據る）。淨飯王第一の大妃、摩耶夫人は、夢に、一の六牙の白象あるを見る。其の頭は朱色にして、七支もて地を拄へ、金裝の牙を以て、空に乘じて下り、右脇に入る。
と見たので、これを王に告げたところ、王は不思議に思ひ、占夢婆羅門等を召して判斷させた。彼等の判斷は次ぎのやうであつた。
若し母人、夢に、日天右脇に入ると見ば、彼の母の生む所の子は、必ず轉輪王と作らん。若し母人、夢に、月天右脇に入ると見ば、彼の母の生む所の子は、諸王中の最勝たらん。若し母人、夢に、白象右脇に入ると見ば、彼の母の生む所の子は三界に極みなく尊く、能く諸の衆生を利し、怨敵悉く平等にして、千萬衆を深煩惱の海より

度脱せん。

この話は、後人の作り事であるか、あるひは事實であるか、今からは分からない。また、分からなくとも差支へはない。夢の研究者は、摩耶夫人が、實際にかやうな夢を見たのだとして、白象、日、月などが、なんの象徴であるかを考へて見れば宜しいのだ。私は、これらの象徴の解釋は讀者諸君に委せることにして、念のために、たゞ一言して置く。夢の象徴を解釋する場合には、夢みる人の年齡を念頭に置かなければならぬ。さうして、摩耶夫人は四十五歳の初産に悉多太子を產んだのである。

○

子曰はく、甚しいかな、吾が衰へたるや。久しいかな、吾れ復た夢に周公を見ず。

これは『論語』にある有名な語である。諸家の說明を聞くまでもなく、これは孔子晚年の語であることは推測される。周公の政治を骨組とした孔子の生活計畫は、老衰と共に破損したのである。

昔者、莊周夢に胡蝶と爲る、栩々然として胡蝶なり。自ら喩んで志に適するか、周たるを知らざるなり。俄然として覺むれば則ち蘧々然として周なり。

これも有名な文章である。言ふまでもなく、飛行の夢の一種である。

孔子の語と莊子の文とは、心理學的硏究の好材料であるばかりではなく、儒教と老莊哲學との特色の相違を、最も好く言ひ表はすものではあるまいか。むづかしい文句や、術語をもつて、この二派の差異を說き聞かされるよりも、上記の簡單な二文章を讀むはうが、これを知る近道であるやうに思はれる。

○

『莊子』の「大宗師」に、

古の眞人は、其の寢るや夢みず、

とある。至人は夢を見ない、と言ふ說は、餘程古い頃から支那に傳はつてゐたものだらう。『淮南子』の「精神訓」

に、

（眞人は）死生を以て一化と爲し、萬物を以て一方（一類の意）と爲し、精を太淸の本に同じうして、忽區（恍惚として無形である域）の旁らに游び、精あれども使はず、神あれども用ゐず、太渾の樸に契うて至淸の中に立つ。是故に其寢は夢みず、其智は萠さず、其魄は抑へられず、其魂は騰らず、反復終始して其端緒を知らず、

とあるのは、まさに眞人に夢なしといふ語の解說である。

ところで、世の中には、全く夢といふものを見たことがない、と言ふ人が相當に多い。と言つて、それらの人々は眞人でも、至人でもないやうであり、また、その言に僞りがあるとも思はれないから、全く不思議だ。先きに引用した孔子の語について、伊藤仁齋は、次ぎのやうに論じてゐる。

夢は心の動きなり。夜の夢みる所は、乃ち晝の思ふ所なり。人心、思ふこと無き能はざれば、則ち寐ねて夢なきこと能はず。孩兒の知ること無しと雖も、亦必ず之れ有り。但し、聖人は邪夢なきのみ。後儒、莊周の至人夢なしの說に惑ひて、夫子の夢を以て寤寐常に周公の道を存し行ふと爲せり。其獘、强いて夢なからんことを欲して專ら虛靜を務むるに至れるは謬れり。

まづこれが穩當な說であらう。いや、聖人とても、邪夢を見ることもあらうくらゐに考へても、惡いことはあるまい。しかし、夢を知らないと言ふ人のあることも事實だ。普通には、熟睡中に夢はないとか、あるひは、さやうな場合の夢は記憶されないと言はれてゐるが、果してさうであらうか。かやうな人の心理には、睡眠中においてさへ、非常に强烈な抑壓作用が行はれてゐるのではなからうか。至人に夢なしと言ふのは、抑壓の强さが、極度に進んだ場合を意味するものだと見ても間違ひはなからう。

○

『列子』の「周穆王」に夢の說明がある。

覺に八徵あり、夢に六候あり。奚をか八徵と謂ふ。一に曰はく故、二に曰はく爲、三に曰はく得、四に曰はく喪、

五に曰はく哀、六に曰はく樂、七に曰はく生、八に曰はく死。此の八徴は形の接する所なり。奚をか六候と謂ふ。一に曰はく正夢、二に曰はく蘁夢、三に曰はく思夢、四に曰はく寤夢、五に曰はく喜夢、六に曰はく懼夢。此の六者は神の交はる所なり。感變の起る所を識らざる者は、事至れば則ち其の由つて然る所に惑ふ。感變の起る所を識る者は、事至れば則ち其の由つて然る所を知る。其の由つて然る所を知れば則ち怛く所なし。一體の盈虚消息、皆天地に通じ、物類に應ず。故に陰氣壯なれば則ち夢に大水を渉つて恐懼す、陽氣壯ならば則ち夢に大火を渉つて燔焫す、陰陽倶に壯なれば則ち夢に生殺す、甚だ飽けば則ち夢に與ふ、甚だ飢れば則ち夢に取る。是を以て浮虚を以て疾を爲す者は則ち夢に揚る。沈實を以て疾を爲す者は則ち夢に溺る、帶を藉きて寢ぬれば則ち蛇を夢み、飛鳥髮を銜めば則ち飛ぶを夢む。將に陰ならんとすれば火を夢み、將に疾まんとすれば食を夢み、酒を飲むとみる者は憂へ、歌儛するとみる者は哭す。子列子曰はく、神遇ふを夢と爲し、形接はるを事と爲す。故に晝想ひ、夜夢るは神形の遇ふ所なり。故に神凝まる者は想夢自ら消ゆ。信に覺めたるは語らず、信に夢みるは達せず。物化の往來する者なり。古の眞人は、其の覺むるや自ら忘れ、其の寢ぬるや夢みずと、幾虚語ならんや。

かなり漠然たる說述であるか、大體の意味は通ずるだらう。夢の分類は、周禮にあるものと同一である。その內、「正」といふのは平生の心理過程に異ならぬ夢のこと、「蘁」は愕の意、「思」は思念より生ずるもの（願望などの現れ）「寤」は目覺めかけた時のもの、「懼」は憂懼の意である。「感變」といふのは神、物と交はりて感じ、形、物と交はりて變ずるの意。林註には、物我の感ずる所、自ら變幻あり、故に感變と曰ふ、とある。「浮虚」は脈の浮いたこと、「沈實」は脈の沈んだことを言ふ。一言して置く。列子は、夢と覺とは、いづれを眞とし、いづれを妄とすべきか、俗見を超脱せよといふ人生觀に立つてゐるのである。

○

『列子』の同じ所に、次ぎの話がある。

周の尹氏、大いに產を治む。其の下の趣役の者、晨昏を侵して息はず。老いたる役夫あり。筋力竭く、しかも之

れを使ふこと彌よ勤む。晝は則ち呻吟して事に卽き、夜は則ち昏憊して熟寐し、精神荒散す。昔々（夜々の意）夢に國君と爲り、人民の上に居り、一國の事を總べ、遊燕宮觀、意の欲する所を恣まにす。其の樂み比すべきなし。覺むれば則ち復た役せらる。人其の勤を慰喩する者あり。役夫曰はく、人生百年、晝夜各々分かる。吾れ晝は僕虜たり、苦は則ち苦し、夜は人君と爲り、其の樂み比なし、何の怨むる所あらんやと。尹氏、心は世事を營み、慮は家業に鐘まり、心形倶に疲れ、夜も亦昏憊して寐ぬ。昔々夢に人の僕と爲り、趨走作役、爲さざるなく數罵杖撻、至らざるなし。眠中、𠴫囈呻吟、旦に徹して息む。尹氏之れを痛み、以て其の友に問ふ。友曰はく、若が位、身を榮するに足り、資財餘りあり、人に勝ること遠し、夜夢に僕と爲るは苦逸の復にして、數の常なり。なんぢ覺夢之れを兼ねんと欲するも、豈に得べけんやと。尹氏其の友の言を聞き、其の役夫の程を寛くし、已れが思慮の事を減ず。疾並びに少しく閒えぬ。

この話は、列子一流の哲學を傳へるための寓意談でもあらうが、實際にも有りがちな事である。物語の前半は、願望成就の夢の好例であり、後半は、意識に對する夢の補償關係の適例である。

○

『史記』の「趙世家」に左の話がある。

王（孝成）夢に偏裻（音トク、トクは衣の背の縫ひ目）の衣（左右色を異にする衣のこと）を衣、飛龍に乘りて天に上ぼり、至らずして墜ち、金玉の積むこと山の如きを見る。明日、王、筮史敢（敢は人名）を召して之れを占はしむ。曰はく、夢に偏裻の衣を衣るは殘（不完全の意）なり。飛龍に乘りて天に上ぼり、至らずして墜つるは、氣有りて實無きなり。金玉の積むこと山の如きを見るは憂なりと。

これは古代における支那の夢判斷の一例である。孝成王の夢は型にはまつたものだ。一體、東洋では、龍に乘つて上天するのは吉兆と見なされてゐるが、王は、至らずして墜ちたのだから、夢の意味は不吉となるのだ。また、金玉積んで山の如しといふ夢は大兇惡と言ひ來つてゐるのだから、筮史は悲觀的判斷を下したのである。龍と言ひ、金玉

と言ひ、象徴的意義に富んでゐるものだが、今はそれらについては何事も言はないことにして、左右色を異にする衣については、深く注意してもらひたいと思ふ。これは人格分裂の象徴と解釋される。かう考へて見ると、上天し得なかつたといふ意味と衣との間に、明白な關係のあることが分かる。同時に、この夢には警告の意味のあることが頷かれる。

○

有名な淨瑠璃、「苅萱桑門」に、繁氏の御臺所が石童丸をつれて高野山へ赴く途中、お伴の女之助が、夢に御臺所を手ごめにしようとするくだりがある。「一月足らず夜も晝も、テモ好い器量、又あるまいと見る度に思の種、勝りこそすれ忘られず、と云ほか〳〵と、こら〳〵ていひ出す今夜、命懸で惚れた戀、厭とあればお二人を、手に懸けて拙者も自害、ヲツトとあらば何時まで、こつてりのちん〳〵。サア手短に御返事」といふことから無禮不忠な騒ぎを演ずる。御臺所が若君をかき抱いて奥の間へ逃入る、女之助が追かける途端に、「ごんと一聲釣鐘の、音凄じく鳴響き、驚かされて見し夢は、跡無く覺めて、旅姿、慈尊院の緣ばなに、主從三人笠傾け、前後も知らず臥し給ふ」といふのだ。「生れ付いての色好み、淫犯の病ある」女之助は、「明暮れ御臺を見るたびに、さりとは惜しいお姿、お主ならずば、くどきおとし、我が妻にせんもの」と思つてゐたので、この夢を見たのだ。

もちろん、作者の想像で作つた夢であるが、無意識内に抑壓されてゐる性慾の願望が、夢となつて現れる例としては、まことに代表的でもあり、露骨でもあるものだ。作者もなか〳〵の心理研究家である。(完)

フロイド説以外の夢の心理的解説

高島平三郎

夢の一般的説述——普通の精神現象に、表象と再現との別がある如く、夢にも表現的即ち末梢神經の興奮に伴ふものと、腦中樞の興奮に伴ふものとの二大別がある。後者は即ち幻想と同性質のものであつて、別に外界から末梢神經を刺激する事なしに、中樞に起る興奮によつて感官に受けた刺激と同じやうに、種々の心象を生ずるのである。此の興奮は、無意的即ち生理的に血管に生ずる變化から起る事もあるが、又種々の思想から此の興奮が起り、遂に末梢にまで變化が及ぶに至る事もある。かゝる刺激から起る夢は恰も幻覺の場合と同じく、感官の刺激から導かれて種々の心象を生ずるのである。

その心象が正直に外界を代表すれば、直觀の場合と同じであるが、夢に於ては概ね種々に形を變じて現はれる。それ故覺醒時の幻覺が睡眠中に現はれゝば、即ち神經刺激的夢となるのである。此の種の夢はあらゆる感官から起るのであるが、其の視的心象を生ずる數は、各感官非常の差がある。これも亦特に視的生活に限つた譯ではなく、覺醒時の精神現象にも型式があつて、或は視的心象の多く働く人と、聽的觸的等の心象の多く働く人とがある。通常人は視的型式のものが多く、之に次ぐを聽的觸的とするのであるが、夢の場合も又之と同樣に、普通の場合には視覺に屬するものが多く、聽覺が之に次ぐのである。

ミス・ウィードと、ミス・ハラムとの兩人が、三百八十一の夢を調べた中、八四・五%は視的夢で、六七・七%は聽的

夢で、一〇・八％は皮膚、六・三％は味覺、六・九％は嗅覺であつた。斯くの如く視的夢の多い事は、夢生活が覺醒時の生活と大に關係して居る事を證するものである。且つ神經刺激的夢は、通常明け方の輕き眠の間に見るもので、其の際には、外界の刺激が直ちに夢となる場合が特に多い。其れ故其際の夢を分解して、其の由つて來る所をたどつて行けば、覺醒時の生活との關係を見出し得ぬのは少いものである。ミス・カルキンスが、二〇五の夢を調べた中で、是等の關係を見出す事の出來なかつたのはたつた一一％であつた。

夢と感情——夢の世界は、殆ど感情の世界である。勿論、感情に關係少なく、唯知能に屬するものもあるが、それは數に於て少いばかりでなく、其の性質も甚だ漠然として、多くは明瞭を缺いでゐる。醒覺の後にも、ありありと記憶に殘つて居るといふやうな夢は、概ね苦樂の情が、其の要素となつて居らぬのはない。是は覺醒の意識に於ても、同樣に情調といふものは、たゞの知識作用よりは、強度が強いから再現するにも容易である。

併しながら、此の事情の他に、生理的方面から考察して見ても、單なる思想と感情とは、神經系統の働きに差異があるのである、モッソーや、ジェームズや、ランゲや、リボー等が唱へるやうに、感情の働く時は、たゞ腦の中樞が興奮するばかりでなく、末梢神經機關が、主觀的に興奮せられるのを見認る事が出來るのである。其他血行狀態に著しく影響して、顏色が或は赤くなり、或は蒼くなり、或は脉搏が速くなつたり、遲くなつたりする。併し、思想の働く時は、言語が筋運動と關係する外、末梢機關の興奮を見る事は少ないのである。この點から考へて見ても、夢中には、どうしても、感情要素が多いわけである。

然らば、其の感情は如何と訪ねて見るに、人により、場合により、固より一定しないが、概して言へば、不快の感情に屬するものが多いやうである。是は夢その物が、一體身體に於ける多少の異常から生ずるのであるから、自然の結果として免れぬ事であらう。併しながら、又臥寢の際、身體の態度か呼吸等に最も都合よく、且つ寢室の空氣の性質溫度等も最も肺臟に適して居るといふやうな場合に、他に之を妨ぐる何等の原因もない時などには、覺醒時に覺えぬ愉快の夢を見る事があるが、是れ亦、つまり異常たるを免れぬのである。

ミス・ウィードとミス、ハラムとが、六人の若き女學生の夢三八一を調査した中で、二九は愉快の夢で、五七%は不愉快の夢であつた。そして、その不愉快の情を著しい度に感じて順次に排べると、混雜及び急迫、氣味あしく助けなき事、恐れ、怒り、失望、羞恥であつた。それから夢中の感情と覺醒時の狀態との間には、どういふ關係があるかといふ事に就き、曾て伊太利のサント・ド・サンクチスが、次の二つの問を出して調査した。

（一）覺醒時の感情の反響を夢中に於て見出したりや否や。

（二）夢中の感情の反響を、覺醒時に於て見出したりや否や。

此の調査の爲めに、彼は健全なる百四十五人の男子及び五十人の女子、並びに六十人の白痴、百廿五人の犯罪者、四十三人の賣笑婦、其の他多くのヒステリヤ、癲癇、神經衰弱、ヒポコンデリヤ等の患者の夢を調べた。

第一の問題に關して、氏は四種に分類して、結果を示したが、其の第一類といふのは、覺醒時の感情狀態と、夢中の感情狀態とには、定まつた關係のないことである。之には、常態の男の三分の一（多く老人を包含す）女の五分の一、白痴の三分の二以上、犯罪者及び多くの賣笑婦の殆んどすべてを包含してゐる。尤も白痴、犯罪者、賣笑婦などは、夢みることの最も少い者であつて、是等の者には、全く夢といふ事を知らぬものもあるのである。第二類は、感情が時として、睡眠等にくり返され、時として、然らざるものである。かやうなくり返しは、感情の性質に屬するのであつて、一樣にはゆかぬ。例へば、恐怖の情は再現しても喜悅は再現せず、性慾に關するものは再現しても、同情は再現せぬの類である。

此類に屬する者は、健全なる男子の七分の一、女子の五分の一、白痴の四分の一、犯罪者及び賣笑婦の夢みる者の多くである。就中面白いのは、白痴は日中に怒つたことを、睡眠中にくりかへし〳〵夢みるけれども、性慾や喜悅に關する事は、決して夢みず、又人殺しは、犯罪の有樣を決して再び夢みぬといふ事である、第三類は、覺醒時の感情の根本的性質を留めて、夢中に習慣的にくりかへされるもので、之に屬するものは、健全なる男子の三分の一、女子の五分の三、及び多くのヒステリア、神經衰弱患者等であり、同じ覺醒時の感情でも、急激のものは容易に夢に反響

せぬが、慢性的のものは再現し易い。例へば情人のことゝか、熱心に信じてゐる宗教の事とかは、覺醒時と夢中と連續する事もある程である。それ故、つまり强度の强すぎる感情は、殆んど夢に再現せぬか、たま〳〵再現しても、後れるのであるが、中等の强度の感情が、却つてよく現はれる。併し、この事實は、兒童には、そのまゝ當てはめるわけには行かぬ。蓋し、兒童は日中に經驗したすべての感情を、夢中にくりかへし易い傾向を持つて居るものである。

第四類は、覺醒時の感情が反對に夢中に現はれるのであつて、例へば覺醒時に怒れば、夢中で憐み、覺醒時に抑壓を感ずれば、夢中に意氣揚々たるの類である。之はグリージンゲルや、ロンブロゾーが注意した事實であるのみならず、我國でも、俗に「夢は逆夢」というて、暗に夢の對比的現象を認めて居る。併し、此の類に屬する人は、甚だ少く、僅に健全なる女子の一部、及び或るヒステリや、ヒポコンドリや、ノイラステニーの患者などに過ぎぬので、健全な男子や兒童には、此の現象は認める事が出來なかつたといふ。

又、第二の問題、卽ち夢中の感情の反響を覺醒時に見出したりや否やといふ事に就いて、ド・サンクチスは、二つの異なつた場合を區別した。第一の場合は、卽ち夢中の感情が直ちに覺醒時まで引き續いたもので、之は兒童やヒステリー患者、若き癲癇患者及び健全なる女子中に、いくらも見出す事が出來る。又第二の場合は、たゞ夢中の感情を覺醒時にくりかへすに過ぎぬのであつて、之は前者に比すれば、一層多く出逢ふ現象である。

さて以上の事實から推論してみると、ド・サンクチスの言ふ如く、覺醒時の感情が、夢中に反覆せられるには、其の感情のために、腦及び末梢機關が、疲れ過ぎぬといふ事が必要である。感情が餘り强過ぎて、神經の勢力を消費してしまふと、引續いて同樣の感情をくりかへす事は難い。それ故、對比の理に基いて、反對の感情が起るやうになる場合もあるのである。又激烈なる感情は、ほど經て、くりかへされるといふ事實は、卽ち此の間に其の情のために疲れた腦が回復するのである。此の事實は、吾々の生活上、甚だ大切な事である。卽ち吾々は、覺醒時に種々の困難に遭遇し、甚しく失望したり、落膽したり苦悶したりする場合があつても、睡眠中は是等の事を忘れて、夢にも現れ難いから、睡眠によつてよく休養する事が出來る。

言ひ換れば覺醒時にさん〴〵心配して、睡眠時には再び之を續ける勢力が無い程になつて居るから、同樣の思も起らず、睡眠中に腦は疲勞を回復して、再び覺醒時の心配に堪へ得る樣になるのである。然るに、兒童の如くに勢力の盛なものは、覺醒時にいろ〳〵感情を動かしても、大人程腦の勢力が涸渇してしまはぬ故、兒童は、日中に出逢つた事を再びくりかへして、夢みるのである。幼兒が日中に何か恐しいものを見たり、驚くべき音を聞いたりすると、夜中に突然起きて、其時の事を言うて泣き出す事の有るのは、卽ち夢中に其の現象をくりかへして、强い感情を起すためであらう。

夢と意志――すべて、夢の生活作用に於ては、高い精神作用が先づ働きをやめ、低い精神作用が、後に殘つて色々の働きをするのであるが、意志の働きに於ても、注意·思慮·決心などいふ自我と直接に關係ある高尙なる作用は、夢中に於ては、殆んど現はれぬ。睡眠中の精神生活の特質の一は、有意的注意が止んで、全く反射的になり、强い觀念や感覺に從ふ事であるから、此の點よりいへば、夢中の生活は、兒童·野蠻人·白痴等に、よく似て居るのである。卽ち、是等の人は、日常の意識的生活に於ても、自我が確立せず、隨つて其觀念が明でないから、高き意味の意志といふものが働かず、其の動作は、概ね、本能的·衝動的·反射的である。

併しながら、夢中に於ても、隨分自己の要求する所を遂げやうと考へ、比較的に、其の精神作用に、統一ある如く思はれる場合が少くない。之は、平常の習慣が勢力を留めて居つて、かやうな形式を現はすのであつて、實は自己が中心となつて、始終一貫した所から起るのではない。其故、何か强い刺激にあへば、すぐに其の方に心の作用が傾いて、前後少しも連絡のない夢を見るに至るのである。元來夢生活に於ては、夢みる人は、全く傍觀者の地位に立つて居て、自分の眼前に、色々の出來事が現はれるのを、そのまゝ受けとるのである。覺醒の場合に於ては、仕事を爲すにしても、自分が主動者として、自分が經驗してゐるのであるといふ事は、通常意識の根柢をなして居るのであるが、夢生活に於ては、全く之が缺けて居る。是れは畢竟意志作用が、働きを止めたのに基くのである。併し、時として、夢中に於て自分の思ふやうにならぬ爲に、非常に憤慨するやうな事のあるのは、全く覺醒時の經驗が、複雜なる

關係中に現はれ、其の感情を復現したのであつて、自我若しくは意志作用と直接に關係してゐるのではない。

夢生活に於て、高き意志作用が働きをせぬ證據は、なほ色々擧げる事が出來る。例へば、覺醒時に於ては、立派な品性を備へた人、卽ち主義を有し、堅固な意志を有して、すべての事を苟もせぬ程の君思人が、夢中に於ては、他に語るを憚るやうな心的經驗をする事があらう。是等は卽ち、平常の意志的生活が破れて未開人や白痴の如き心生活が現はれるのである、

夢と智能――前にも述べた如く、夢生活に於ては、感覺就中視覺像が最も多く、之に基く記憶（廣義の）想像が、盛んに働くのであつて、それ以上の智能は、殆んど現はれぬ。元來人間の智能中最も大切なのは、因果の法則であるが、夢生活に於ては、此の法則が、殆んど認められぬ。普通の場合に於て、多少敎育ある人ならば、何か一つの出來事が起れば、其の原因を考へ、或は其の結果を察するのが當然であるが、夢に於ては、かやうな事は實に稀である。偶々是等の事を考へるやうな夢を見るのは、覺醒時の經驗が、聯合作用で現はれるに過ぎぬのであつて、決して自己が主働者となつて、甲の現象と、乙の現象とを比較し、其の因果を明らめるといふやうな事はない。かく高き智能の根本原理とも見做すべき因果法の働かぬ事が、夢生活に於て、多くの背理悖德の事等が少しの抵抗も無く現はれる所以である。

何故に夢生活に於ては、かゝる大切な原則が、打ち壞られるのであらうか。此の答は、前に述べた如く、すべての夢生活に於ては、高き發達をなした精神作用が、先づ働きを止めるものであるといふ、一般の事實から說明する外はない。ヘルムホルツのいふ如く、因果法といふものは、純粹の思想の論理的法則であるから、意識の明かに活動して居る時の外行はれるものではない。卽ち言ひかへれば、因果法といふものは、意識の發達に伴うて、發展して來た高い作用であつて、神經機關が不完全であり、隨つて意識が人類ほどの發達をせぬ間は、因果法を認める事は出來ぬのである。此の事實は一般の動物界及び人類界に於ても、其の發達の階段に從つて、明に認める事が出來る。

犬・猿・象の如き高等の動物には、多少原因結果の關係を認めて居るのであらうと思はれるやうな行動があるが、

其の多くは、習慣的聯合作用で說明の出來る事である。假令彼等が因果律を覺つて居つたにした所が、それは極めて程度の低い少部分の事に過ぎぬ。又原人及び今日に存してゐる未開人並びに、兒童の間に行はれてゐる神話童話等を調べてみると、如何に彼等が因果の關係を明に認めずに居るかといふ事がよく分る。これは卽ち彼等の精神界に論理的思想の發達せぬよき證據である。今日文明國の哲學者でも、科學者でも、夢中に於ては、未開人や兒童の境地に還り、實に笑ふ可き事を眞理の如くに、そのまゝ承認してゐるのである。然るに未開人や兒童等は、通常覺醒して居る時でも、夢のやうにぼんやりした心を持つて居るゆゑ彼等の間には、夢と現實とを區別する事の出來ぬものが多くある。文明國に於ける成人でも、病氣等で身體が非常に疲れ、精神が衰へて居るやうな場合にはかゝる事がある。

心の三つの作用中、夢生活に於て、最も著しいのは、感情であつて、意思と知能とは甚だ弱いのである。然しながら、又之に反するやうに思はれる事がある。それ 、覺醒時にいくら考へても、考へつかぬ事が夢中で分つたり、或は夢中で詩歌文章を作つたりするやうな事も少くない。併し之も又前の事實に相反するわけではなく、畢竟覺醒時に熱心に考へて居た事は、通常の意識作用が止んだ後にも、中樞機關は、隋性で活潑な働をなし、所謂識閾以下の作用を營んで居るのであるから、それが外界の刺激の少い睡眠中に至つて、一定の强度を現はし、夢現象をなすのは、決して怪しむに足らぬことである。

以上、私は、夢に關して、主としてフロイド說の發現前に於ける心理說の、極めて概略を說述した。フロイド氏の精神分析を研究する人々の爲めに他山の石として、何等かの參考とならば幸甚である。(完)

歌舞伎劇に於ける夢

松居桃多郎

歌舞伎劇で代表的な夢と云ふと語弊があるが、相當有名な物として第一に擧げなければならないのは、安政四年の夏、江戸中村座で上演された三世櫻田治助作「三世相錦繡文章」である。つい最近では新橋演舞場で前進座が上演してゐるから御覽になつた方も多い事と思ふが、四幕全部が夢と云ふ珍趣向である。夢を見るのはお園と云ふ藝者で、病中その情人六三郎の事を思ひつゝ寢てゐる間に長い〳〵夢を見るのだが、その內容は第一に自分と六三郎の間に出來た娘が殺され、義理の兄に欺かれて墮胎藥を飮まされて胎內の子も下ろされ、遂にその義兄を殺して、六三郎と心中して地獄へ落ちると云ふのである。以下「十萬億土の段」、「墮地獄の段」、「極樂の段」等は荒唐無稽な茶番にすぎないが、自分の子供を殺され、兄を殺し、男と心中して十萬億士へ旅立するのは、フロイドの「夢の註釋」中にある子供が汽車に轢かれた夢を見た外出恐怖症の例と比較して見ると興味がある。フロイドの說明によれば、この婦人の夢は、彼女が以前神經症療養所に行つた時、その療養所の監督と戀愛に陷つたのを彼女の母に無理に引離された事件の劇化であると同時に、その源泉は彼女が、父親や兄の性器を始めて見た時の印象、卽ち彼女自身の性器は去勢されたもので、その責任は彼女の母にあるとの嬰兒的性觀に基く事になるのだが、三世相の場合では、お園の兄が彼女の去勢恐怖の對照になつて種々の慘虐な行爲をする。フロイドは又この婦人の外出恐怖の原因は、彼女が自分で空想して揑造する誘惑が恐ろしさに外出が不可能になつたのだと解釋してゐるが、お園が夢の中で二度もその愛人六三郎に

場合非常に意味深い物のやうな氣がする。

恐怖症に罹つてゐると見えて、病氣と稱して何所の座敷にも出たがらないで、家に閉籠つてばかりゐる點など、この

められて』ゐるのなどは、お園の無意識内に抑壓されてゐる願望を表してゐる物と云へよう。加之、お園は事實外出

愛想盡しを云つてゐる等、矢張夢で自殺して冥土へ行つてからも、『極樂却つて地獄の苦しみ、無量の業夢に身を責

願望の夢が重要な役目をするものに、並木宗輔作の「苅萱桑門筑紫𨏍」がある、例の石童丸と御臺所のお供をして行つた女之助が慈尊院で一夜を明かす內に、石童丸を殺して御臺所に不義（エディポス願望）を云ひかけようとした夢を見る。御臺所にとつては子であるにしても、女之助にとつては、石童丸は「主君」であるから、やはり父である。母（御臺所）に不義を云ひ寄るためにはまづこの小さき父を殺してかゝらねばならぬところに型通りのエディポス・コムプレクスが見える。際疾い所で目が覺めるのだが、これは長谷川誠也氏の文中にも出てゐるさうであるから私は引用は略すが、とにかく相當の自己分析をした結果、自殺して仕舞ふ。夢に對してかく責任や罪障滅を持つてゐるところを、我々は看過してはならぬ。愛慾の世界を捨てゝ佛道に志すと云ふのが主題だけに淨瑠璃には珍らしい心理解剖をしてゐるのが面白い。

この種の夢に於ける願望充足をもつと具體的にした物に、南北の「三賀荘曾我島臺」がある。意識面では潔白を誓ひあつてゐた笹野權三と小まんの二人が、偶然褥を同じくしなければならない破目になつた。二人の枕元には伊勢物語の芥川を繪いた屛風が引廻はされてあつたので、それが原因となつて、その夜二人はその畫中の人物になつた夢を見て、目が覺めて見ると已に取返しのつかぬ仲になつてゐる。

『殊には二人、思はぬ邪道へ。』
『落ちまいものとこの年月、心の錠を卸ろしたる』
『その甲斐もなう、いたづらに』
『夢の心が通ひしや』

と悔んでも間に合はず、遂には二人共刄の錆となる。

この手法を眞似た物では、默阿彌作「菖蒲太刀對俠客」で若侍とその主人の女房の不義を夢で見せて、目が覺ると本當になつてゐると云ふのがあるが、前後の事件と關係がないので一向引立たない。同じ默阿彌作で「新累女千種花嫁」でも、權之丞と累の關係する動機に夢を使つてゐるが、累は非常な醜婦であるし、二人が一緒に寢たのは雪の夜の寒さを凌ぐ爲であつたのだから、原因が全然生理的であつて、何等精神分析の餘地がない。

同じ默阿彌の作でも「敵討噂古市」の夢は大分心理的に働いてゐる。正直淸兵衞を慘殺した久七が古市の女郎屋に泊つた晩、夢に淸兵衞の亡靈に魘される。所が彼の相方になつた女郎お梅こそ正直淸兵衞の娘で、その夜彼女も亦夢に父淸兵衞の亡靈を見て最後の樣子を知つたので敵を討つ事になる。

久七　あゝ淸兵衞許してくれ、金を盜んだも亦汝を殺したも、皆女房が勸め、おりや何も知らぬ、許してくれ、許してくれ、むゝゝゝ。（ト苦しき思入、これをお梅聞いて）

お梅　疑ふにはあらねどもまこと敵に違ひなくば、今一度知らせてたべ。（ト手を合せる）

久七　（又苦しみて）あゝ淸兵衞許してくれ、金を盜んだも亦汝を殺したも、皆女房が勸め、おりや何も知らぬ許してくれ〳〵

（ト苦しき思入、お梅聞いて）

お梅　扨こそ〳〵、再び違はぬ夢中の告、疑ひもなき父さんの敵、不便ながらも覺悟さつしやれ。

トお梅一腰を拔き久七の胴をぐつと突く。

敵討の過程がハムレットのそれと一寸似通つてゐるのも面白い。

變つた夢では「釋迦八相記」を脚色した「花觀臺大和文庫」がある。之は釋迦が廓通ひの夢を見て、覺めてから阿羅々仙人に叱られると云ふのだから振つてゐる。併し之などはあまり思ひ切つた「父引下げ」であるから、宗教家からはお小言を喰ふかも知れないが、見樣によつては相當釋迦の心理をよく分析してゐる物と云へない事もない。

天保八年と云へば未だ馬琴が例の「里見八犬傳」を完成してゐない內の事だが、已に其頃江戸でも大阪でも「八犬

傳」の大流行で、芝居にも色々の脚色が現れた。その中の一に、伏姫と八房の一件を犬坂毛乃の見た夢として、八房に若侍の姿をさせて伏姫との色模様を現した作があつたのを原作者馬琴が見て、『成程、芝居の作者は、芝居の作者らしい見方をする物だ』と苦笑したと云ふが、その大膽な精神分析振には流石の馬琴も顔負けがしたらしい。

之に似た例では天保十一年に河原崎座で上演された「裏表忠臣藏」がある。之は十一場ある「假名手本忠臣藏」に裏の筋を加へて二十二場、幕なしと云ふ今日のレヴューの様な芝居だが、その中に大序の裏として、「箱根の湯治場」と云ふ場があつて、師宣が顔世御前の夢を見るのだが之なども竹田出雲に聞かせたらさぞ驚く事だらう。「忠臣藏」にはこの外「いろは假名四十七訓」の如く師宣自身が殿中で若狹之介に殺される夢を見るのや、「騎飾忠臣藏」の如く由良之助が太平記にある鹽谷判官や師宣の事件を夢に見るなどゝ云ふ變なのもあるが、之等は皆見物をあつと云はせる爲の珍趣向にすぎない。

併し之迄擧げた例は餘程出來のいゝ物ばかりで、實際は大抵の場合歌舞伎劇に夢が現れるのは、色取りの爲とか、俳優の役の都合で作者が窮した時に用ゐる手である事だけはお含みおきが願ひたい。今日では中幕だの大喜利だのと云つて、一幕物が出るのは何でもなくなつたが、昔は大抵通し狂言で、一番目と二番目に別れてゐても、その各に關聯がなければならない約束になつてゐたので、筋の都合でどうしても所作や、美しい場面が出せなくなると、誰かの夢にして前後に關係のない場面を持つて來る。例ば有名な南北の四谷怪談で、最後の蛇山の庵室の前に伊右衞門とお岩が美しい侍と娘になつての色模様などは、理屈の附様によつては伊右衞門の願望ともなるが、南北自身は唯前後の陰慘な場面を引立たせる爲の對照以上には考へてはゐなかつただらう。明治三十三年に歌舞伎座で菊五郎が演じた三代目河竹新七作の「成田道初音藪原」にある夢などは、主人公の藪原檢校が全幕盲目なのは殘念だから一幕だけ目の明いてゐる幕を作つてくれと云はれて書いたとか云ふ。併し之などは盲人が目が明いて自分の戀してゐる女の所へ行く夢を見るのだから、檢校の願望には相違ない。之によく似た例で尾崎紅葉の作品中に、矢張盲人がその愛する女の夢を見ると云ふ小説があつて、先頃猿之助が之を上演した事もあつたが、原作が發表された當時、一體盲人は夢を見

るか見ないかで、相當その頃の文壇を賑したと云ふ逸話がある。

「天下茶屋」の蒲鉾小屋の前に「曾我の夜討」がついた例などは、芝居が敵討だからと云ふよりは何か他の狂言を挾む必要に迫られたからで、その甚しい例は「佐倉宗吾」が直訴をする場の前に將軍が「張良」の夢を見るのは沓を捧げる形と紅葉の枝に挾んだ直訴狀を捧げる形とが似てゐるからと云ふのであるが、夢を見るのが宗吾でないだけに全く無意味である。「三人吉三」に現れる地獄に燒直した「曾我の對面」の夢なども、唯、初演當時和尚吉三をした小團次に朝比奈の牢獄破りをやらせたい爲の作者のはたらきにすぎない。

こんな例はいくら擧げても切がないから、最後に歌舞伎劇に於ける表現樣式を述べる事にする。

『ドロ／＼にて舞臺の切穴より心といふ字の切拔を上へ引いて取る、この內蝶々番ひ飛んでゐる、ドロ／＼打上げる、淺黃幕を切つて落す。』

之は四谷怪談の夢の初めのト書である。心の字を出さずに、蝶々の差金を出すだけの場合もあるが、大抵は「心」を初めに出し、最後にもう一度出すのが普通である。「三世相錦繡文章」の場合などでは、

『ト薄ドロ／＼になり、屋體の內より、心と云ふ字を引いて上げる。』

とあつて、黑幕も振落さず、道具も變へずに唯「心」が拔出したたけで主人公が夢を見てゐるのだと云ふ事を見物に承知して貰はなければならない。これは全く不文律的な約束で、誰もそんな事を協定し合つた事はないのだが、それでよく通じてゐる。また夜の場面には月に叢雲の懸つた形を釣り出して見せたものであつた。これも約束事であつて「晝でない證據に一寸月を描き」と云つて昔の川柳は下手な畫工を嘲笑したが、油繪のやうな寫眞力のない日本畫の技法や材料に對してかゝる嘲笑は酷である。それと同樣、照明の不完全であつた昔の舞臺に、心字や月形を釣出して夢と承知させ、夜と合點させたことは已むを得ない。技法の自由な活動寫眞とてもその點五十歩百歩と云へないことはない。最近の映畫「夢見る唇」の夢の場でも、主人公が寢てゐる。その中から寢てゐる姿と別の姿が拔け出して動くことに依つて夢を表現してゐるさうであるが、これとても約束事たるに於いて同じである。それで夢と承知しろと

云つても俺は承知せぬと云はれゝば已むを得ないだらう。

話が少し脱線したが、歌舞伎劇ではその代り夢が破れる時にはドロ／＼で道具が居所替りになつて元の場に返り、「心」が元の所へ歸ると、ドロ／＼を打ち上るのが順序になつてゐる。番ひの蝶々は勿論莊子の故事からヒントを得たのに相違ないが、芝居の夢には色模樣が多いだけに、もう一つ別な意味も含まれてゐるらしく思はれる。蝶は春、花に戯れるものとなつてゐる上に、一對が出てゐること、また婚禮に雄蝶雌蝶のつきものである點なども考へ合さねばなるまい。心を、從つて夢を、エロティックなものと認めてゐるらしい昔の人は、抑壓が少なかつたゞけに却つて分析學の見解と大體一致してゐる。

兎に角、歌舞伎劇中の夢の場など云ふ物は世の中が進むに從つて――理性的になり、抑壓的になるに從つて――次第に少くなつて行く傾向があり、況、新劇などでは風變りな形式の物でなければ全く見られない狀態になりつゝある。併し人間は人生の約三分の一を寢て暮すのだし、寢る以上は夢を見、その夢こそは人間の最僞らざる無意識の活動だとすれば、僞らざる人生を描かうとする劇作家は須く夢を主に書くべしと云ふ事になる。此頃になつて急に新劇畑の人々が歌舞伎劇の再檢討などゝ騷立てゝゐるが、人生を覺醒時の生活からばかり觀察してゐる人々には所詮歌舞伎劇の心髓はつかめる筈がない。さういふ人々――のみならず我々――にとつて必要なのは、歌舞伎劇の再檢討よりも自分の心の再檢討である。再檢討してから歌舞伎劇の夢の描寫を見ると、其時の人々には抑壓が少かつたゝめか、意外に分析學の見地と一致してゐる點の多いのに驚かされるのである。（完）

夢の戲曲化に就いて

高水力太郎

夢の外形を顯在內容と呼び、その祕められたる內容を潛在思想と呼ぶ。潛在思想をして顯在內容にまで轉變せしむる過程を夢の仕事と呼ぶ。何故にかゝる過程が必要であるか、それは檢閱のためであるとされてゐる。檢閱の眼をくゞつて現實に許されざる一つの願望が空想的に充足されなければならないためには變裝が必要である。その變裝の方法としては轉位、凝縮、戲曲化、第二次仕上げの四つがあるとされてゐる。併しそのやうに檢閱と云ふ作用を假定せずとも、單に現實に對する支配慾の空想的滿足のためにも、戲曲化と云ふ仕事がなされるのであらうと、私は信じてゐる。

檢閱の眼をくゞらうとの變裝のためばかりでなく、夢に於いては、覺醒時に於けるよりは、我々の思考の樣式は既に非常に異つてゐる。その異り方の一つは退行と云ふことである。これを種族に卽して見れば原始人的となり、これを個人に卽して見れば幼兒的となる。檢閱の有無を問はず、我々の思考樣式は睡眠夢中に於いては、原始的となり、幼兒的となつてゐる。

思考樣式に於ける原始的と幼兒的とは如何なる特質に存するかと云ふに、それは複雜なものは單純化せられ、抽象的なものは具象化せられ、觀念的なものは影像化せられる。理性は弱まり、感情に支配せられ、論理は現實に適合すると否とを問はずして、只無意識的快樂原則の支配下に盲從するやうになる。パスカルの言葉にも「我々の心には理

性の知らぬ論理がある」、と云ふのがある。夢に於いて象徴が屡々用ゐられるのは、かゝる退行（還元）現象の必然的歸結であつて、象徴には（一）代償、（二）轉位、（三）還元の三つの意味があると私は考へる。これ等を總稱して「コムプレクス（復合、錯綜）」と名付ける。

このやうに觀念は影像となり、抽象は具象となり、複雜は單純となるが故に、それ等諸觀念、諸抽象の復合し、錯綜して生ずる一つの思想 Gedanken は夢に於いては、必然的に戲曲化せられざるを得ない。舞臺面に於いては書物に於けるとは違つて、例へば善とか惡とか美とか云ふ抽象觀念は存在しない。善を表はすためには、何か他人の困難を助けてゐる或る個人の行爲が演ぜられねばならない。美を現はすためには美人、或は花、景色などがそこに置かれねばならない。惡を現はすためには殺人や不正の行爲が與へられねばならない。

それ故に夢の意味を解釋し諒解するためには、夢に於ける戲曲化作用を抽象化、複雜化して、その本來の動機を抉剔しなければならない。それにはその夢中戲曲に於ける感情を判然と意識しなければならない。如何なる感情を以て戲曲を夢の本人が眺め鑑賞したかと云ふことが重大な點である。さて二三の實例に就いて具體的に研究して見よう。

實例一――或る知識階級者Aの夢である。

『木造の高い塔――その塔は自分の現在の家のやうに古ぼけた、危つかしい、すゝけた、がたがたした感じのものである――があつて、自分はその最も高い室に妻と子供等とで籠つてゐた。誰か勞働者風の卑しい感じの男が一人で、自分に何かを返すためにこの高塔の頂まで登つて來た。何を返して貰つたか記憶がない。さうしてニヤニヤと皮肉な卑しい笑ひを浮べながらまた階段をギシギシと下へ降つて行く。彼が上から第二階目まで降りた時、その下の方からまた數名の勞働者風の男が上つて來た。降りかけた勞働者はそれに勢を得てか、また最上階の方へ登つて來始めた。自分は彼等の襲擊から妻を守らねばならない不安を感じて、先登の勞働者の頭を足蹴にしたら、その頭はころころ下へ轉落して行つた。』（昭和七年五月中の夢）

これはA自身の經濟事情や社會的立場などを象徴し、それに就いての感情を戲曲化してゐる。A自身は平常プロレタリア恐怖症には罹つてゐないと云つてゐたが、この夢で見ると階級的感情は否定出來ないやうであると私は云つた

が、本人は却々强く抵抗した。併し、Aのやうに下から登つて來る者を足蹴にせずに、いや僕も實は君の仲間だよと云つて握手する人の方がもつと臆病でブルジョア的である事は云ふまでもないと思はれる。何れにもせよ、この高塔が彼の地位を象徴し、この塔上の闘爭が彼の立場を戯曲化してゐることだけは明かである。

實例二――同じくA氏の夢である。

『自分は巨大な粗末な、木造建築物の壁面にとりつけられた、危つかしい棚のやうなもの丶上に、妻と二人で乘つてゐた。少し動くとミシ〳〵音がして、棚は崩れ落ちさうな感じ。自分は一人で下りやうかと思つたが、眞下は廣い階段であつて、その階段は自分の視線とは直角をなすやうに勾配してゐた。自分が飛下りれば、階段の中腹でなく、その上端に續く踊り場に降りることが出來さうだが、妻にはそれが出來さうにない。中腹に降りたら、そのまゝ階段の遙か下方へ轉落しさうで危險である。自分が先に降りて下で受けてやらねばなるまい。或は二人とも怪我をなすかも知れない。何か大きな布で受けてやりたいが、手傳つてくれる者がない。中學生のやうな霜降服を着て鞄を肩から下げた男（Aが商業學校教師時代の敎へ子にして、只今ではAよりも經濟的には安樂な位置にある男が、覺醒後分析時に聯想された）が、自分等を仰ぎ、何かあざける如き聲を擧げ、自分の方へ小さな木片か何かを投げつけたが當りはしなかつた。（夢の數日前、Aは或る事をその男に依賴した手紙を遣つたが返事が來ず、少しく不快を感じてゐた。）自分はほと〳〵困りぬいてゐるところで、眼を覺ました。』

眼をさまして了へばいゝんだと云ふやうな感じが、醒めた瞬間にしたと本人の云つてゐるところを見ると、この夢の覺醒には彼の前意識の働きが加はつてゐたかと思はれる。細かく分析研究の結果、この夢はA自身の不安なる社會的經濟的立場の戯曲化であることが明かとなつた。

實例三――同じくAの夢。

『ふと氣がつくと、自分は非常に深い水色の螺旋形の坑の中を滑り下つてゐた。坑の壁面には凸凹があつて、そのためにそこを滑り下る自分の尻は律動的の運動を餘儀なくされて、それが少しく不快である。妻も後から跟いて來る。一時間ばかり滑つたと思ふ頃、一つの踊り場のやうな處に達した。そこに低いところに小窓が開いてゐて、そこから覗いて見ると、內は臺所のやうな

場所で、人相のよくない男女が二三居てニヤ〳〵氣味の惡い笑ひを浮べながら自分と妻とを仰ぎ見てゐる。これは警戒しなければいけないぞと、自分は祕かに思ふ。彼等は併し、別に何の害をも自分等に加へず、自分は一碗の水を貰つて飮んで、更に以前の滑り降りの運動を繼續する。あゝあゝまたこれをやらねばならないか。いつまで續くことかとなさけない感じになりつゝ用意をする。背部に受ける律動的振動がやゝ不快である。さう思ひつゝまた動き出すと、今度は意外に短くて五六間滑ると、もうそこは半圓形の出入口になつてゐて、眞晝の日光がまぶしくさし込んでゐる。そこで眼が覺めた。』

聯想――半圓形の出入口については前夜夕刊紙上で見た愛宕山の新開通トンネルが想起されたが、これは所謂「晝間の殘物」に過ぎなくて、眞の意味はもつと象徴的なものであることは勿論のやうである。

この第三の例は、前二者とは一寸違つたところがある。前二者は非常に類似してゐて、明かに相互に關係のある夢であるか、この第三のは少しく違つてゐる。分析者としての私にもその意義が未だ判然しない。たゞ共通してゐるところは、無氣味な、人相のよくない人物がニヤ〳〵してゐるところや、非常に高いところに場景がとられて、そこから降りるか降りないかゞ問題になつてゐることである。この夢を社會經濟的立場の象徵化、戲曲化と解することは無理があるやうである。寧ろ、分析の常道的行方をするならば、律動に於ける性交象徵以外に、出產空想、殊に腸管出產空想と解すべきであらうが、無意識（夢）に於いては出產と死とは同一であるから、また死の夢とも解せられる。死とすれば、社會生活の終端に達せむとの願望充足とも解せられる。かく解すれば、前二者の夢との關係もついて來るわけである。一體、無意識にとつては、社會生活もまた一つの胎內生活である。母の胎內から、現實生活の胎內に移り、更に第三に、大地の母胎內に還元するのが、人類の定められた運命である。現實世界の胎內生活と云ふことは一寸常識者には理解し難い言葉であらうが、次のやうにこれを論證することが許されるであらうか。――人間は要するに穴より出でゝ穴に入るものであるが、分析者として最も賞讃したい「第二の穴」の造り方は、一生懸つて有形無形を問はず、社會的、人類的の事業の大ピラミッドを作ることである。實業家が大會社を興し、政治家が大經綸を行ひ、哲學者が大體系を樹立し、藝術家が一代の傑作を遺すのも、要するに、それは自分が、それに依つて安樂に往生

し得る大ピラミッドに外ならないのだ」と。

かく考へて見れば、第一例の高塔も、第二例の建築物も、第三例の長杭も、みな胎內象徵であると云ふことが出來る。かゝる實例は夢に於いてのみならず、我々の現實生活中にも數多く發見される。寺院や教會の高塔のみならず、一體に高所、高山への登攀慾望はA氏の夢の象徵と關係せしめらるべきものである。先頃、朝日新聞の『趣味の手帳』欄に、實に面白い話が出てゐた。右の問題の考究に對して大きな示唆を與へるから引用して見る。

『明治十二三年頃淺草厩橋の近所、藏前へ出來たハダカの大人形、高さ三丈余り、乳から上がヌッと出てはだ色の漆食塗、余りいゝ格好ではなかつたが思ひ切つた珍趣向と、あきれながらもゾロ／＼見物。木戸を入ると腰卷然たる赤い幕を潜つてまたの邊から體內へ、ゲラ／＼笑ひながら上つて行く、腹のあたりに十ヶ月の胎兒の模型、もつともらしく說明が一トくさり、御順に上つて頭のてつぺん、三ッばかり窓があつて四方を見晴らす、高場所のない下町の人間は珍らしがつてのぞいたものだが一年ばかりで止めたらしい、これが高い所へ登らせる見世物の始めでお次ぎは明治十七年、下谷の佐竹ノ原に出來た大佛さま。

大佛は高さ四丈八尺、これも土臺は竹組みで漆食塗り、前のハダカ女と違つて顏も格好も立派なもの、そのはずである、當時興行者が高村光雲先生に原型を賴んで念いりの細工、大きさといひ姿といひ全く奈良からお引越しの體、見物は膝から上つて手の掌へ出られる、見あげるとアリのやうにゾロ／＼、頭の窓からは上野や淺草が手に取るばかり、體內には古物の展覽とえん魔さまの像、四五月頃の開場で相應の人出であつたが、その年九月の大荒れで無殘や大破。

三度目が明治二十一年淺草公園の六區に出現の富士、木骨石炭塗で高さ十八間、さすがに高いがその無格好は女人形以上、ナンダさゞゑの化物かとケナしながら中々の登山客、これも二年と經たぬ中ハゲ山となつて取崩し、最後が例の凌雲閣即ち十二階、二十五年落成、株式の福原某が發起で英人の設計、高さ三十六七間富士山の倍、但し六區のである。所が昇降機なしの階段づたひに初手から失敗、その上二十七年の地震にヒヾが入つて鐵のタガ、煙突式の圖抜けたノッポに持余しの形であつたが、大正の震災にポキン、これにて高い所へ引張り上る興行物は一トまづ打止め。』（樂山庵）

この高所登攀の形式の變化に於いて、我々は文明そのものゝ發展の象徵を見ることが出來る。高所登攀の最も原始的な形態な『赤い腰卷を潜』るか潛らぬかはともかくもとして、やはり胎內復歸である。その性的契機が漸次に抑壓

されて上品なものとなり、遂に本來の意味が昇華されて了つてゐる。高所へ引上げる見せ物は十二階のポキンに頓挫してゐるが、もし現今の百貨店の高層ビルが、殊に淺草松屋屋上の飛行艇が、存在しなかつたら、必ずまた別の形で出現したに相違なかつたことを私は斷言してもいゝと信ずる。松屋屋上の飛行艇に我々も乘つて見たい心は切なのだが、何故子供にかこつけなければきまりが惡いのであらうか。やはり慾望の昇華があつて、我々はもつと精神的な高らかな「飛翔」をなすべきものだと云ふ抑壓の命令があるせいであらうか。もしさうだとすれば、高所登攀の見せ物の變遷に文明の進展の象徵を見ることは必ずしも附會とは云へまい。

論旨がいさゝか脫線したが、要するに私は夢の象徵と戲曲化に於けるそれのみならず一切の高所登攀に無意識空想の介在を論證せんとしたのであつた。非常に現實的と思はれる象徵（社會的經濟的立場としての高塔など）に於いてさへ、そこに廣い意味に於ける性的空想の意義の存することを證明せんとしたのであつた。

次に、非常に顯著な戲曲化の夢を擧げる。これは或る夫人の夢である。彼女はその夫君の事業を助けて相當力を盡したが、その事業は結局經濟的に失敗に終るらしいことが明かとなつた頃に見た夢である。

『私は夫や子供等を停車場に出迎へに行つた。一同は旣に驛の構外に出で、圓タクを傭つてもう家に向つて出發しようとしてゐる。その時、忽ち、夫は手荷物を受取ることを忘れた事を想起し、それを私にとつて來よと命じた。私は非常な人込みをかき分けて、やうやく手荷物引渡所へ辿りつき、いざ受取らうとすると、夫が私にチッキを手渡しするのを忘れたことを發見して、非常に口惜しい思ひをした。

聯想——近頃、子供等が田舍から歸つて來るに就き、それを出迎へにS停車場へ赴いたことを思ひ出した。但しその時、夫は家にゐた。』

分析に依れば、この聯想は單に夢の構成に於ける材料として使用されてゐるに過ぎなくて、夢のテーマはやはり、夫の指圖に從つて非常に骨を折つたのに、結局無駄骨折に終つたことに對する不滿にあることが明かとなつた。何とこの戲曲化の巧妙であることであらう。

實例五——

次に筆者は自分自身の戯曲的象徴の夢の報告を與へておかう。夢は非常に複雑な筋のものであつたが、大部分は忘却されて了つた。

『……或る女が物思ひに沈んだやうな樣子をして坐つてゐる。樣子は靜かであるが、彼女の心中には種々な思ひが資えたぎつてゐることは夢の本人によく分つてゐる。その時、彼女の背後のところに一頭の馬が狂奔してゐるのであつた。』

私は覺醒後、直ちに分析して見ての馬の狂奔はその女の心理狀態の象徴的表現であることを發見した。この程度にまで抽象的なものは具象的なものとなり、觀念的なものは影像的となるかと、驚いたのであつた。それにしても何故に、彼女の物狂ほしき心意を表現するに馬を以てしたか。これは私自身の發明ではなく、東洋の用語癖の內にその先例が多く發見されることを想起して自分はハタと膝を打つたのである。——心猿意馬の制し難き！

實例六——

『私は或る人に或る事を依賴した。私はその返答を聞くべくその人の事務所へ出掛けた。その男は出て來ず、その男の使用人が出て來て、自分の希望の聽屆けられぬことを非常に素氣なく「冷やかに」告げた。自分は甚だ失望して、そのまゝ直ぐに立去ることさへ出來なかつた。なほ暫くそこに低徊して壁面に掲げられた額面を眺めてゐた。額面は浮彫の雪景で、見るからに寒さうな色調で色彩られてあつた。』

この額面の風景畫の色彩は、即ち私自身のその時の心理狀態を象徴してゐることを分析に依り、餘程後になつて發見した。これ等最後の二つの象徴は、夢中戯曲の主人公の心理狀態を表はす點では、機能的象徴と云ふべきであらうが、（この二者の區別に就いては本誌前號所載、田內氏講座參照）夢中戯曲の作者（夢の本人）に卽して云へば、戯曲の一つの材料として用ゐられてゐるのであるから、抽象的材料ではあるが矢張り「材料的象徴」と呼ぶのが妥當のやうに思はれる。斯學界への一つの問題として提示しておきたい。

最後に私は一つの問題を設定し、その解決を以つて本論を終らう。一體、明かに狹い意味に於ける願望充足に非ざ

るこれ等の夢中戲曲が、何のために演ぜられるのであらうか。それは現實の悲劇の主人公が、舞臺上の悲劇を見ることを好むのと、同じ意味であらう。苦痛なる經驗を持つた子供が、その經驗を遊戲に於いて反復するのと同じ意味であらう。卽ち、現實支配への一つの試みであらう。その意味に於いて夢の戲曲化はまた願望充足への一つの「試み」（本誌第四號所載フロイド「夢の新說」參照）である。（完）

夢の研究文獻

一、『夢』（歷史、文學、藝術及び習俗の上に現れたる夢の學術的研究）石橋臥波著（明法四十年二月一日發行 東京、大阪、寶文館）

一、『夢の心理』小熊虎之助著（大正七年九月十五日發行 東京越山堂書店）

一、『夢學』高峰博著（大正十三年五月十八日發行）

飜譯以外の學術的品位ある著書としては、明治以降以上の三著に盡きてゐると云つて過言でないのは、いさゝか心細い次第である。右の內最初のだけがフロイド以前。後二者にはフロイド說が紹介されてある。第一の書は材料を克明に集めて分類配列してゐる點では、眞に敬服すべき好著である。永く後學の參考となるであらう。

時評

最近映畫に現はれた近親愛的傾向

伊東豊夫

一 「モナ・リザの失踪」

戀愛の對象選擇は、人がその幼兒期に受けた、母親の印象の上に爲されると云ふ、精神分析の定式を、私は此のフィルムの分析に當つてもう一度繰り返す事になる。無知、感傷に頭腦を浸されてゐる人々のみは、强情に、或は思ひ上つて、此の事實を否定したり、罵つたりしたが、此の事實はそんな事ではどうにもならない程、嚴然とした根據ある、又殘酷な生物學的事實であつた。フロイドは戀愛生活の心理（Beiträge zur Psychologie des Liebeslebens.）全集第九卷「分析戀愛論」大槻氏譯。）と題する論文の中で、男子の對象選擇の特殊の型に基いて、是を詳論してゐる。詰る所、戀愛の對象選擇は一般的なると、特殊的なるとを問はず、一樣に近親相姦的（inzestós）である。勿論それはあくまで、近親相姦的であるに止つてゐて、近親相姦では無い。全く無感動な、單に性的對象としての異性と、全く感傷的な、性的感情の混入しない對象としての母性との中間に、戀愛が位する。謂ふ所の妥協構成（Kompromissbildung）である。尤も、それが一種の均衡關係に依る以上は、場合に依つては、感情が完全に退行して、意識的に母性を對象に祭り上げる事があり得る。極度に激しい戀愛感情の場合には、特に此の疑ひが濃厚となる。アメリカの優秀な大衆的な分析家の、F・ヴィッテルスはルソーやダンテの戀愛を斯う云ふ角度から見事に分析してゐる。詰り、彼等の母親の外には戀の對象を選び得なかつた哀れな幼兒だつたと云ふのである。「モナ・リーザ」を描いたレオナルド・ダ・ギンチも御多分に洩れなかつた。ルソーの懺悔錄が其の大膽にして、赤裸々な衝動生活の暴露に、彼と同時代の人々を激しく搖り動したやうに、レオナルドの「モナ・リーザ」も其の極りなく、香高い藝術のヴェールを通して、哀れにも幼兒的な、人類の無意識に祕む願望を、如何程强く刺戟して來たのか分らない。謂つて見れ

ば、それは恐ろしくも、又忌はしい罠でさへある。此の罠に足を取られたが最後、人間は忽ち、現實から轉落する。最早、彼は社會を構成する一單位としての義務を擔ふ能力も、勞働力も所有しない。彼は全くの幼兒として原始人として、從つて或る場合には、又犯罪者として、空想の世界、悪の華へと逃避するより仕方がない。そして此等の世界で、彼は失つた母親を取り戻し、破れた戀の痛手を癒さうとする。

　此のフィルムの主人公ペルージヤが矢張、此の罠に掛つた哀れな犧牲者である。そして此の伊太利生れの硝子職工が體驗した著しい、又奇妙な心理的動搖は、彼自身がエディポス感情の擒であるのを意識しない中は、徹底的に彼を惑亂させたが、それを意識すると同時に彼の心理的位置は整頓した。

　私は此處で此のフィルムの筋を辿つて分析すると云ふわづらはしさを避けて、最初からいきなりフローレンスの法廷に被告として登場するペルージヤの口を借りて、彼自身に總ての經緯と分析と批評とを代辯させる事にする。

× × ×

　裁判長閣下。私がモナ・リーザを盜みました動機、目的、經過等について、逐一有體に陳述せよと云ふ御言葉に從つて、私は此處に一切の私心を差控へ、順を追ふて事實をその儘申し上げる積りで居ります。私の奉公先の硝子屋の主婦の命ぜられるまゝに、私がルウヴルへ參つて、「モナ・リーザ」を壁から抱き降ろしました時に、私は此の神祕的な微笑を含むだ「モナ・リーザ」の譬へやうも無い深い眸や、輕い笑靨の浮むだ唇元に、何とも云へぬ物懷しさ、優しさ、物淋しさを覺えたのでありました。お恥しい次第ながら、私は之と云つた學歴とては無く、勿論藝術とか云つた難しい事柄を、よく辨へては居りません。唯、此の畫を描いたレオナルドーが私と同じ伊太利生れの優れた畫家だと云ふ事だけは、聞き傳へて知つて居りました。私の其の時の感情は、人々が普通戀と呼び慣はしてゐるものでは無かつたかとも考へます。それにしましても、其の時の感情は、有り觸れた浮氣な戀とは凡そ緣の無い、何か神々しい、犯し難い聖女に對して抱く信仰に似て居りました。私が何時までも餘り熱心に畫を見入つてゐた爲でありませう。此の時、床や壁を掃除してゐた女等が、冷やかし半分に私の事を大聲で話し合つては、笑つたり、面白ろ可笑しい言葉を投げたりして騷いで居りました。が、私は一向そんな事に頓着せずに、何時か遠い昔の、懷しい子供時代に反つた氣持で、畫を見詰めたまゝ、何處までも續く樂しい故鄉

の風物や家族の團欒の回想に浸り切つて居りました。私は又、硝子板に息吹きをかけて之を磨く風を粧つては幾度となく熱い接吻を、モナ・リーザの半ば開き掛つた唇元に印したのです。歸途、私はセーヌ河畔のまづしい店で、「モナ・リーザ」の複寫を買ふと、持つて歸つて是を自分の室のベッドの上に飾りました。そして朝夕、私は此の畫を眺めては、樂しい空想に耽りました。今にして見ると、私は其の時既に、再び子供時代のあの類の無い一徹さで、母親を戀し始めたのだと云ふ事が明瞭に分るのです。私に限らず、自分の辿つた過去の生活を、素直に振り返つて見る事の出來る人なら、誰でも子供時代には私と全く同じやうな體驗を持つた事を思ひ出すに違ひありません。それに當時、私は極めて貧しい其の日其の日を送つてゐて、剩へ誰一人身寄りとては無い異郷に生活する身には、母を戀ふる氣持が一層劇しく復活して來たものと見えます。が、愚かな私は、それも自分でよく感じて居りながら、實際には一向それに氣が付かないやうな有樣だつたのです。そして私が向ひ家の女中マチルダに、モナ・リーザと寸分違はぬ容姿を見出した時には、私は此の女こそ世界中で私の戀の相手たるべき唯一徹の女だと一途に思ひ込むだものでした。私は又、此のマチルダの爲なら如何な困難な事、如何な馬鹿氣た事でも、躊躇する所なくやつて除けやうと自分に誓つたものでした。私はぞつこん此の女に惚れ込むだのです。私は近所の詰らぬ活動館で、早速此の女に近づきました。始め、私は女に對して、巴里に畫の勉強に來てゐる裕福な伊太利の畫家のやうに振舞ひ、自分のアトリエはブーローニュにあるのだなぞと出任せに吹いたのです。さて其の晩二人は樂しく踊り續けてから、私は女を自分の室へ連れて行きました。が、此處で女は私の本當の素姓、私の貧しい稼ぎ高を知つてしまふと、もう何の未練もなく、さつさと私を振り切つて自分の室へと戻つてしまつたのでした。マチルダは至つて氣位の高い、虚榮心と自惚の強い女でした。さう云ふ性質の女を滿足させるには、私は餘りに貧しい境遇にありました。

「一日に八フラン！　それなのに、先刻あんたは、二人で使つて餘る程稼ぐと云つたわね。それっぽっち、一人だけでも少な過ぎる程だわ。」と、肩をすぼめながら吐き出すやうに言つたマチルダの美しい眉が、侮蔑に逆立つたのを私は思ひ出すと、もう無下に自分が詰らぬもの意氣地の無い男のやうに思はれて來ました。男と云ふものは、此の種の侮蔑には決して耐へられないのです。私は矢も楯も溜らなくなると、軒傳ひに、先廻りしてマチルダの室へ忍むで行つて、室へ戻つて來たマチルダを捕

へ、一體お前の理想とする男は如何な種類の男かと詰問しました。女は其の時壁の上に掛けられた金持の下宿人の寫眞や、赤雜誌の表紙繪の紳士泥棒(アルセーヌ・ルュパン)を指しました。「何でも特別な事、變つた事、素晴らしい事を、私の爲に爲てくれる男。それが私の望む男なのよ。」 そう云つてマチルダは試めすやうに私の眼の中を覗きながら、接吻して來ました。此の言葉が呪文のやうに、私の腦裡へ烙き付けられました。

手順よく私は畫を盗み取りました。私が外套の裏側に畫を吊して、ルウヴルの出口の階段に差し掛つた時に、山高(ダアビイ)を冠り、片眼鏡(モノクル)を掛けた身裝のよい、頑丈な身體つきの紳士が、眞直ぐに私に近寄つて來ると、至極いんぎんに帽子を取つてから、時間を尋ねるのです。モノクルの奥に光つた相手の鋭い眼差しに出會ふと、此の男は若しや私が今犯したばかりの窃盗を逸早く嗅ぎ付けて、斯うして私を試めしてゐるのではあるまいかと氣を廻し、全く息が詰る思ひでした。苦し氣に、私は呻めくやうに時間を答へると、紳士は再び叮嚀に一揖して立ち去りました。恐らく十秒後には、ルウヴル全館に響き渡るだらう非常ベルの事を考へると、私は無性に恐ろしくなりました。後になつても、其の時の有樣を思ひ起す度に、私は丁度惡夢を見てゐる時のやうに、心臓が激しく鼓動しました。

守衛長との將棋が、私と守衛長自身の現在不在證明(アリバイ)を作つたので、私は難なく嫌疑を逃れました。畫を盗むプランとして、守衛長との將棋を用ひた事は、賢明であつたばかりでなく、非常に皮肉だと私は思つて居ります。將棋で追詰めて置いて、考へ込んでゐる間に裏に廻つてモナ・リーザを盗むと云ふ此の方法を何故か私はとても勝ち誇つた氣持で考へるのです。左樣、私は立派に復讐を遂げたと云ふ感じでした。誰に對してか？ 今となつて見れば、それが私の母親を奪つた私の父親だと云ふのが判然と分ります。私が公判廷で思はず、ナポレオン一世への復讐からと叫むだのは、斯うなると出鱈目所か、立派な根據があつての事だつたと云へます。

私が「モナ・リーザ」を自分の室へ持ち歸ると間もなく、例のモノクルの服裝の整つた山高帽の男が尋ねて參りました。私は直ちに事が露顯に及むだのだと思ひ込み、全く觀念の臍を固めたのでした。所が、此の男は仲買人で、或るアメリカの富豪の依囑を受け、「モナ・リーザ」の買却をルウヴルに交渉した所が、一向埒が明かない。其處へ私が現はれたのは勿怪の幸だと云ふのです。そして私に向つて、「モナ・リーザ」を賣つてはくれまいかと云ふのです。金額は君のお望み次第だとも云

ひましたが、私は斷然拒ねつけました。第一に、そんな途方もない金額を自由にするアメリカの富豪に反感に近いものを感じたからです。此の男も必つと、私が幸福を得やうとする際に決つて邪魔に現はれるあの不吉な惡魔のやうな奴に違ひないと本能的に思ひ込みました。それに是に似た强迫觀念を私は子供の時代から持つて居りました。第一「モナ・リーザ」を賣つてくれと云ふ男が實際は又、如何な種類の男か知れたものではない。私が畫を手放したなら、もう私は破滅するのだ、さう自分に云ひ聽かせました。當時、私が意識的に考へてゐたやうに私が畫を手放さなかつたのは、マチルダの歡心を得る的だとするなら、それは誤解です。若しその爲になら、私は賣つて得た莫大な金額の方が、虛榮の女を釣るにはずつと效果があるのを知つてゐた筈なのですから。マチルダにも此の畫を見せました。そして私はもう一度求愛しました。が、徒勞でした。そして、マチルダと來ると、私が警察へアリバイを立てに行つた留守に、あれ程の私の熱心な申し出を拒けて、新しい帽子一つ新しい手袋一對が欲しいばかりに、金持の下宿人とパリを離れてしまひました。私は警察へ行つて一切を自白する積りで居りました。私にはそれが極く容易い事だつたのです。「モナ・リーザ」の盜難事件が全パリ、全世界を湧き立たせてゐるのを、日々の新聞で見るにつけても、私の心の內で勝ち誇つた感情は燃え盛る一方なのです。ですから、此のセンセイションの中心が私であると名乘るのは、何か英雄的(ヒロイック)な氣持と共通して居りました。所で、警察では事件が餘り大きな波紋を畫いて行くのに困惑し、狼狽し切つてゐて、私こそその犯人だと名乘つても耳に這入らないのです、私は、思ひ返して、畫を箱車に仕立て、嚴重な監視の眼を前にして、悠々伊太利へ渡りました。あれ程、パリを、フランスを、全世界を騷がした問題の「モナ・リーザ」を私が車の横に是見よがしに飾つて歩くのに、誰一人それが正眞正銘の「モナ・リーザ」であると氣が付かなかつたのは痛快でした。當て込み上手なパリの作家が、モナ・リーザの神祕的な微笑を流行歌に作ると、忽ちそれが作曲されて、巷から巷へ傳へられると云ふ有樣です。そして全フランスが母親を失つた幼兒のやうに、國旗を失つた軍隊のやうに、喚(ワメ)き出しました。新聞は此處ぞとばかり、警察を無能呼ばゝりし、煽り立てました。私は、巧みに群衆心理を利用するこの賢明な流行歌の作家や、ジャーナリスト等を見るにつけても、此等の人々は結局自らは手を下さない迄も、私の竊盜には心から共鳴し、私と一緒に此の事件の裏に祕む社會的な反抗と、此の事件の捲き起す唯徒らに騷々しい波紋と

を心行く迄樂しむでゐるのだとさへ考へて居りました。又、是れに反して、此の事件に躍氣になつて憤慨する人々の氣持も、私にはよく分ります。彼等の中の一人々々は、私と同じやうに、母親と幸福とが全く一つに組み合つてゐる子供等で、「モナ・リーザ」を失ふ事は、彼等に取つて非常に不吉な運命とを豫言することを意味したのです。若し、私が畫を手放してしまつたら、必つと彼等同樣、その心に受ける傷は致命的なものであつたに違ひありません。故國イタリーへ辿りついて、私が畫を極く僅かな金で一美術商へ渡した時に、私はそれを自分で泌々と感じました。其の僅かな金で、私は未だマチルダへ土産を買ふ積りで居りました。が、私には結局、マチルダが自分の戀の相手たるべき女でないのが薄々分つて來てゐて、マチルダの事を考へても大して苦にはなりませんでした。

是に反して神祕的な微笑を湛えたモナ・リーザの顏を眺めてゐると、私は底知れぬ物狂ほしさ、妬ましさに襲はれて、一層此の畫を壁にでも打ち付けて、粉々に碎いてやり度いやうな衝動に驅られる事が屢々でした。若し眞實、私がマルチダを愛してゐるのだつたら！

裁判長閣下、それ所か、私は今ではあの虛榮心の高い女を少しも愛してなぞゐなかつたと云ふのが分つたのです。私がマチルダに一日八フランの稼ぎ高を笑はれた時には、私は激しい侮辱を感じたと申し上げました。私はあの時には、それが矢張り貧しい境遇にある爲の僻みからだと思つて居りましたが、事實はそんな單純でなく、もつと不思議なのです。詰り、其れは私がマチルダに與へる愛情の事を暗示してゐたのです。母親に總ての愛情を捧げ盡くした私としては、他の女に割くべき愛情の量は誠に貧しいものでした。詰り、私はマチルダに對して男として振舞へる能力に缺けてゐたのです、從つてマチルダの身分不相應な、冷靜に見れば寧ろ滑稽な位、驕つた言葉が、私には急所に觸れた針のやうに應へたのでした。又、是と關聯して、私がマチルダの理想とする男やアメリカの金持に對する憎しみも、私が子供時代に母親に對して抱いたあの反感の再現に他ならないので、私が「モナ・リーザ」を盜む事に成功した時の、あの哀れな守衞長や、ナポレオン一世に對する勝利感と云つたものも、皆此處にその心理的な原因を發してゐるのです。私は永遠の子供なのです。私は母親無しでは生きて行かれぬ哀れな幼兒に過ぎません。私が母親を崇拜し、愛する度が深ければそれだけ、現實的な女等には侮蔑や憎しみを強く感じるのです。現實的な女は徹頭徹尾エゴイストに出來上つてゐます。現に、マチルダは、此のやうに

大それた事件を惹き起して破滅に瀕してゐる男、此の私の陳述に依つて吾身の美しさを裏書されるのを聽く爲に、公判の傍聽席にやつて來たものでした。既に御聽きになつた通り、私は無殘にもあの女の誇りを傷けてやりました。私は唯、畫が欲しいばかりに盜むだので、決してあの女の美貌に惑はされたのでは無かつたと申し上げました。が、私は何もそれを一時の氣紛れや、腹癒せから云つた事では無く、此の一言で、私は唯一人私の愛する事の出來る母親と、他のありと凡ゆる現世的な女とを區別したのでした。

左樣、「モナ・リーザ」を美術商に手渡してしまつてからの私と云ふものは、據り所を失つた魂の安じる所とては無く、誠に救ひやうの無い慘めな存在でした。刑事等は私の犯行を遂に嗅ぎつけると、情け容赦なく私を捕へやうとして追つて參りました。嘗つてあれ程大膽だつた私が、意氣地ない事には、野良犬のやうにほつゝき廻つて、逃れ度い一心で徒らに心を焦せらせるばかりでした。私は逃げやうと思へば逃げられました。が、私が丁度刑事等を撒いて、とある家の軒下へ避難した時、その奥から流れ出る聖歌の厳かな合唱を耳にするや否や、急に、私は何故か泪ぐましい氣持になり、逃れやうとする力も失せて、淨められ度い一心で跪き、無心に祈りの言葉を呟きました。そして、私は此處で始めて吾身の安らかなのを覺えたのでした。

裁判長閣下。私は今では逃げも隱れもせず、只管に法の裁きを受ける覺悟で居ります。全く、人間と云ふものは、眞底自分の心に動いてゐるものを、見定め得ぬばかりに、馬鹿な事を仕出かすもので御座ゐます。正眞正銘の「モナ・リーザ」を車に仕立てゝ歩いて居た私自身を御覽下さい。此の目で絶えず見張りながら、此の手で絶えず運びながら、私も他人も誰一人、それが自分を支配し、導いてゐる本尊なのだと云ふ事を氣付かなかつたのは、恐ろしい事だと云はなくてはなりますまい。が、又私が多數の守衛見物人を前にして白晝堂々「モナ・リーザ」を盜み取り、あれ程嚴重な監視の眼を潜つて、難なく國境外へ落ち延びる事の出來たのも、一應理由のある事なのです。

裁判長閣下。貴方は夜半他人の家へ押入る盜賊の類は之を捕へ、罰する事は出來ても、白晝堂々母親の心臟を盜み取らうとする子供等の犯行を拒ぐ事は出來ますまい。毎日、此の地球の上の數知れぬ家庭の内で、此の愛すべき、が又警戒すべき、犯罪が何百萬回となく繰り返へされてゐるのを、裁判長閣下、貴方は一向御存知無いのだ。

二　戀愛の流行型

映畫を精神分析するに當つて、私は平常もその映畫の辿る筋を最も重要視して、是を先づ全部的に把むで置いて、內容を斯學特有の定式に從つて整頓し、改變して諸君に是を示して來た。所が驚いた事には、斯うして得た結論が、必らず何等かの意味で近親相姦的內容を常に含むで居り、叉其の作品全體が、性的不能者の藝術的に修飾された空想を反映してゐるのに氣が付いたのである。尤も此の部類に這入らぬ、健康なものもあつて、一樣には斷じ難いが、それにしても、近代映畫の中でも、優秀な、藝術的價値の多いと目されるものに、特に此の傾向が强く現はれてゐるのは注目に値する。所で、私は今、「夢見る唇」を分析するに當つて、今迄と違つた方向から、此の傾向を追求して行く事にしやう。

戀愛に流行(モード)があると云つたら、諸君は私が突拍子も無い事を云ふと思つて、吹き出すかも知れない。或は叉、極く素直に私の云ふ所に賛成するかも知れない。が、確に戀愛には流行(モード)があると云ふ事は、譬へば映畫俳優の人氣と云ふものを考へられるなら、直ちに納得される事と思ふ。

日露戰争の勝利に國民全體が熱狂してゐた頃には、軍人は當時の戀愛の流行型を代表してゐたに違ひない。「椿姫」や「罪と罰」が一時代前の青年等に愛讀された時には、不幸な、虐げられた女、賣春婦に惚れる事は、當時の青年等に取つては、確かに尖端的な戀愛と思はれたらう。唯、一途に英雄的な行動や、苦行者流の哲學癖、自然主義的な文學等の影響から、當時文化的に著しい進歩をしつゝあつた青年が解放された時、外國映畫がそれ等に代つて彼等を支配し始めた。此等の外國映畫から、若い人々が最も深く影響された傾向と云ふのは、一例を擧げると、喜劇役者ハロルド・ロイドに誇張されてゐるフェミニスムスであつた。此の時以來、青年等は女を尊敬し、禮儀正しく扱ふ事を覺えた。抑壓する事が文明の著しい特徴の一つとして數へられるならば、此の映畫を通じて輸入されたフェミニスムスが、青年等に向つて、女性に對しては愼み深くなくてはならないとか、或る場合には彼女等を充分甘やかす程寛大でなくてはならない事を敎へたと云ふ事は、一つの文明的な進歩と云へるかも知れない。そして之の事は今迄徹頭徹尾服從を强ひられ、それが動かす可からざる宿命であり、それが彼女等に許された唯一の道德的生活であると說敎されてゐた日本の女性等には、確かに幸福であつた。其處で此の風潮に乘じて、ブルー・ストッキングの女等が事新しく

「ノラ」を論じ、婦人參政權を論じ、避姙法を研究し、煙草を喫し、斷髮し、スカンダアルを起すのを名譽のやうに心得始めた。そして彼女等は忽ち、靑年等の戀愛の對象としては、極めて高い價値を獲得した。詰り、モダン・ガールと人々が輕蔑的に呼むだ女性と、是に對應して、今では佐々木邦氏の甘酸つぱいユーモア小說に僅かに其の名殘を止めてゐて、昔氣質の人々には腑拔けた優男（フェミニスト）として、激しい反感を買ふ、あの坊ちやん型の男が戀愛の流行型を爲した。

マルクシスムスが一世を風靡した時には、プロレタリア小說に現はれた學生上りの勞働者等や、お孃さん（マドムアゼル）型女工等が上流社會から天降つて行くと、下層階級の人々は舊式な幻覺を起し、彼等とは似てもつかぬ此の新しい同志等と、同一化をし始めたのは寧ろ悲慘な位であつた。逆上せた是等の人々は、「小間使ひと若樣との戀」を、「有閑夫人と運轉手との戀」を共の心理的下地とした戀を見始めた。又知識階級の生れのよい多くの同志等は、分析家から年齡的に云つて「女中部屋覗き」とでも呼ばれそうな幼兒期に退行してしまつた。馬鹿な目を見たのは、飛ばつちりを喰つて狼狽した、眞實の歷史的使命を目的とした文明的な社會改良家等であつた。或は、生活擁護の爲に組合を築く勞働者等であつた。何故なら、此の頃の流行型を形作つたマルクス・ボーイ、エンゲルスガール等は、彼等が何か特別なものとして想像してゐたプロレタリアートの生活を、覗き度いだけ覗いてしまふと、さつさと身を引いたからである。彼等は是迄、陣營を共にして來た同志等からは、階級的裏切者として烙印を押されたが、人間的に見る時には、彼等が成年に到達する爲に必らず克服すべきエディポス・コムプレクスから自らを防ぐ爲に、全マルクシスムスを必要としたと云ふのは、同情にさへ値する。詰り、彼等は兩親へ反抗するのに階級理論を使用したのである。何故の爲の兩親への反抗であるか？　性的自由を得る爲に！　と私は一口に之を盡してしまふ。此の邊の呼吸をピッタリ呑み込むで、うまく當りを取つた作家に林房雄氏がゐる。氏が自らの放縱な私的生活を辯護する爲に、階級的理論を用ふるのは、立派な階級的裏切りであると、レェニンの定式通りに喝破した大宅壯一氏は、誠に痛い所を突いたのではあるが、此のやうな性生活の放縱と、過渡期の道德とを兩つながら、巧みに操るのでなかつたら、到底氏は現在のやうに、モダンな流行作家としての盛名は得られなかつたであらう。

ギャング映畫と共に、バンクロフトが銀座街頭や、公園のベンチや、停車場での話題の對象となつた時には、

若い人々の戀愛對象の流行型がグと現實に近づいて來た。直接、官能的な刺戟を強く發揮する事が其の第一の條件であつた。バンクロフトに見られる强精的な體格、クレアラ・ボウに見られるイットがそれである。

ディートリッヒに見られる「中性的な女」（ズボンを穿いた女 Frau mit der Hose）は人々の注意を引くには餘りに異端に過ぎる爲か、唯彼女の一側面としてメッサリナ型、同じ意味でのガルボの冷い女（フリイギツト）がヒステリッシな多くの男女を挑發し始めた。

多少とも精神分析學の素養のある方々なら、私が是迄念入りに取り上げて來た、戀愛の流行型に、巧みに隱蔽された近親相姦的傾向が其の片鱗を覗かしてゐるのに御氣づきであらう。が、私は其の説明を、本誌の「戀愛に於ける救助願望の研究」と題する大槻氏の論文に一任しておかう。そして、私が少し饒舌に語り過ぎた戀愛の流行型が、「夢見る唇」“Der träumende Mund” には如何な形に表はれてゐるかを示す事にする。

三　「夢見る唇」

近頃、アメリカ映畫で可成の人氣を背負つてゐるシルヴィア・シドネイの幼兒的顏貌（ベビイフエイス）と並むで、此の「夢見る唇」に變つた演技を見せてゐるエリザベイト・ベルクナァの幼兒型の風貌、態度は、彼女等を又情愛の流行型の一つに數へさせる程の特色を持つてゐる。

如何にも舌足らずの、鼻に掛つた甘へ聲の發音、飯事遊びそのまゝの巫戲化切つた結婚生活。そう云つたものが一度ベルクナァの演技を通すと何の無理もなく吾々の腦裡に刻みつけられる。ディートリヒ、ガルボに見られる、あの何も彼も知り盡したメッサリナ型の、氷のやうに冷い情熱と比較して見ると、母親と其の娘程の、印象の距離（ヘダタリ）がある。が、是は單に大衆の趣味の反動的變遷を物語つてゐるに過ぎない、と云つてしまへばそれ迄である。所で、ベルクナァの演じるガビイとスカンダルを惹起するミハエルの役が、嘗つてパブストの「三文オペラ」の主役を演じたルドルフ・フォルターであつて、此の男の著るしい特色と云ふのは、一言の下に括つて見れば、全く父親型なのである。近親姦的傾向として、母親と息子のそれを内容とした映畫は無數にあるのであるが、此の「夢見る唇」に於けるやうに父親と娘のそれを扱つたものは極めて稀有なのだ。「三文オペラ」に於ては、フォルスターの演じた父親型の男は、華美な山高を冠り、要心深く手袋を穿めた手には、何時でもしつかと仕込杖が握られてゐて、立派な口髭の上に異樣に光る眼は絶えず强盜團の親方として、犯罪者として、警戒と輕度の不

安の表情を湛えてゐるのである。近親相姦に纒はる罪障感は、此の場合は、斯うして全く外部に投射されてしまつてゐる。父親型の此の男は、始めから犯罪者として登場して來る。が、「夢見る唇」の場合は、此の男は唯、著名なヴァイオリニストとして、戀愛經驗の豐富な男であつて、ガビイの夫ペーテルとは親友である。ガビイとミハエルは音樂會で顏を合はした時に、一も二もなく御互ひに深く戀し合つてしまふ。幼兒期の體驗が、後年其の人の陷るべき情愛の下地を整へると云ふ事を、御存知の方なら、此の一眼で陷つた戀（リーベ・ミツト・エルステン・ブリツク）は別に説明の餘地が無い。ミハエルにして見れば、相手が無二の親友ペーテルの細君である爲に、深く自らを警めてゐるのであるが、幼兒的性格として向ふ見ずなガビイは、彼を自宅に訪問して、自らミハエルを禁斷の果實へと誘惑してしまふ。翌日、此の三角關係に置かれた三人は再び晩餐を共にするが、ミハエルが良心の苛責に悶々としてゐるのに引き換へて、ガビイは燥ぎ廻り、夫ペーテルとエルデ叢書の實習と云つたやうな、思ひ切つた態度で。踊り狂ふのである。所で奇妙な事には（尤もミハエルが父親代償である事を知つてゐる吾々としては、別に不思議は無いが）、ミハエルは席に戻つたガビイに向つて、今の淫がましい態度や、半裸に近いデコルテの事で詰るのであるが、ガビイは一向苦しむ様子が無く、自分は現在此の上なく幸福であると答へながら、酒に嗄がれた聲で陽氣な歌を口吟むのだ。此の何氣なくガビイの口を突いて出る表白こそは、姦通を刑法の條文から取り除くべきであるとの主張に傾いてゐる近代的な刑法學者の意見と共に、此の映畫が或る種の階級に屬する人々に對して、痲醉劑（ナルコテイシ）的な快い刺戟を與へるのである。が、ガビイは結局罪を逃れるわけには行かない。

心を寄せたミハエルが出發し、フトした事から病み付いたペーテルの看護にガビイの毎日が費された時に、此の心理的葛藤は今度こそ逃れられぬ必然性を持つてガビイに迫つて行く。病床にある夫を捨てゝ、ミハエルの跡を追ふ程の殘酷さはガビイには耐へられないし、それかと云つてあれ程深く愛したミハエルを思ひ切る程、舊時代的性格に、ガビイは生れついてゐない。と、すると、ガビイの逃れる路は、神經症か、犯罪を置いて他にはない。ガビイはヒステリックになる。ガビイは不安夢の中で、夫を毒殺すると云ふ、精神分析學の定式通りの事が起る。空想の世界で彼女の幼兒的願望が充足されたのである。當然、其の反動として、眼を覺してからのガビイは、無意識に祕むだ憎惡を逆抑壓し、泣きながら夫の胸に縋りついたり、ヒステリ弓と軌を一にした蜻蛉反へり

を症候的に繰り越してから、セーヌ川に自らの罪を裁いたのである。若しガビイが有り觸れた浮氣な、吾儘な女であつたなら、又彼女の戀の對象が之程近親相姦的傾向を含むでゐなかつたなら、ガビイはヒステリックになる事も、姦通する事も、夫の死を望む事も、自殺する事も無かつたであらう。何故なら目前に迫つた夫の全快を待つて、離婚を敢行する事位は、近代的女性に取つて、それ程困難とは思はれない。が、結果から見ると之程小心な女ガビイを、凡ての外的內的禁制を盲目的に突破させる程、大膽にした原因は、近親相姦的傾向を外にしては說明されない。若しもそれが近代的な浮氣の一種に過ぎないなら、此處に死と云ふ決定的な契機が入り込む餘地がないのである。私が、戀を實現させる事は、人間が生き通す事であり、生本能は又性本能である事を、此處にもう一度繰り返す事が必要であらうか？（完）

附說——「夢見る唇」にはカットが多くて、殆どあれでは何の事やら分らぬまでになつてゐた。殊に女が男の許に訪れて後が甚だしいさうだ。音樂はまたそれから後が殊によかつたと云ふから殘念だ。

新刊紹介

新關良三氏譯『夢判斷』（下卷）

フロイドの歷史的名著『夢判斷』（アルス版）はさきに新關氏に依つてその上卷を上梓されてゐたが、十月中にその下卷が發行された。この大著を完譯せられた同氏の努力に對して祝福せねばならぬ。アルス版全集中では新關氏の譯は最も良心的な正確なものゝ一つであるが、たゞ譯文が少しく生硬であるのと、氏が分析學專攻者でないためにか、術語が斯學界の習慣に反してゐるのがあるのが遺憾である。例へば、『抑壓』を『排斥』に、『過程』を『經過』に、『退行』を『逆行』に、と云ふ風である。この書の內容は大槻憲二氏譯『夢の註釋』（春陽堂版全集の內）の後半と大部分共通してゐるものである。（定價二圓）

資料

夢の日本的象徵數例

矢部八重吉

夢一　近親姦隔壁（インゼストベリア）としての下駄

十八歳になる性格分析を受けて居つた入寮患者。或る日母の訪問を受け、同道デパート店に外套を買ひにつれて行かれた。歸途俄か雨に逢ひ新外套を濡らして歸る。その夜次の夢を見る。

「古風な堂々たる門構への家の前で貴婦人に逢ふ。不圖と氣が附くと雨が降つてゐる。着物を濡してしまうなと思つてゐると、前の貴婦人が指さして、そこに下駄と傘があるのを敎へてくれた。自分は履いてゐた草履を脱ぎすて下駄とはきかへ傘を持つて歩んで來た。」

聯想――堂々たる門構へ＝嘗つて映畫で見た舊劇の場面。

貴婦人＝古風な官女＝澤山重ね着をしてゐる婦人。

お媛樣＝雛人形の御内裡樣。

重ね着をしてゐるお媛樣＝氣高くして近より難い。

此の夢は嘗つて見た次の夢を追憶せしめた。

夢二　戸扉が重なつてゐる室

「室がある。エレヴエターの樣な小さな所だ。戸を開けて入ると、また戸がある。次ぎへ次ぎへと戸を開けて入ると終に廣い所へ出た。氣持がよかつた。（胎内憬憧）」

聯想――廣い所へ出た時、氣持がよかつたが、自分の家でない樣な氣がして氣が咎めた。戸を次へ次へ開けて入る室へは近より難い氣がする。

問。「近より難い」と云ふ事からどう云う事を思ひなさる。

答。女を思ひます。氣高い女です。

問。氣高い女とは澤山重ね着をしてゐる女の事ですか。

答。左樣です。

問。重ね着をしてをる女はどうして氣咎めがするのですか

答。肌に觸れるのが恐いからです。

問。下駄で何か思ひ出しませんか。

答。小供の時に日蔭の路地を歩んでゐる時、下駄の鼻緒が切れたので跣足で家へ戻つた事がありました。雨降の後で路地は泥濘で非常に氣持ちが惡かつた。今でも夜就床

後、跣足で泥濘を歩く事を想像すると氣持が惡く感じます。氣味惡さは日の照らない路地とか木蔭の泥濘の所では特にひどく感じます。

問。傘でどう云ふ事を思ひなさるか。

答。雨降りの時、傘をかぶつて出るが、傘から雫が落ちて泥の跳ね上がるのが嫌です。だから足駄を履いてゐても少し位な雨なら傘は被りません。

以上の聯想及問答から次の註釋がつくのであらう。

氣高い女は母である。跣足（ペニス）を地（女の表象）に觸れる事、殊に泥濘へ足を突込むのは近親姦である。下駄はその防禦卽ち隔壁（ベリア）である。尙重ね着してをる女は官女であつた（顯在內容）。此れよりの聯想は九重の雲、××と出てゐる。××は幾重にも圍まれた（重ね着）處である。それを犯すのは恐れ多いのである、禁裡は母の××である。近親姦恐怖は、重ね着した婦人に屬してゐる。下駄は丁度、崇物性の對象となり易い靴（膣）と反對に近親姦、卽ち、轉移した意味に於て、一般性的誘惑から遠ざからん願望を表現してゐる。

夢三　窃視願望を滿す山車

地震の恐怖症に罹つてゐる三十六歲の男。分析中數回繰返して見た夢。

「父（死んでをる）と淺草へ行き映畫を觀た歸り道澤山の山車を見る。」

聯想――山車＝小供の時小車を見るのが好きでお祭りのある時は遠近に拘はらず必ず見に行つた。御輿を見るのも好きだつた。

問。夢で活動は面白かつたですか。

答。つまらなかつたです。レビューを見たいと思ひます。

患者は或る工場へ通つてをる職工である。そこで次の問を發して見た。

問。昨日工場か又は歸り道で何にか見ましたか。

答。歸り道でいつもお花の師匠の家の前を通ります。そこの主人は三十五六の女で昨日は屋根の上の干物臺で何か干しているのを見ました。……もう一つ夢を思ひ出しました。それは……

夢四　みやこ腰卷

「いつもの樣に工場から歸つて來る道でお花の師匠の前を通ると、師匠の女が洗濯をしてゐました。

問。洗濯してゐた物は何だつたか解りませんか。

答。赤いものでした。多分みやこ腰卷でしたらう。

患者は數年前から早漏に罹つてをり、最近は殆んど不能症を發してゐる。早漏は門前早漏（エジヤクレシオ・アンテ・ポルチコ）であつた事が次の夢から知れた。

夢五　土手の芝生へ水をかける

「女學校へ用事があつて行つた（彼の妻はある女學校の掃除婦をしてをつた）。門衞がをつて、門へ入る事を許さなかつた。癪に觸つたから、門傍の土手の芝生へ水をぶつかけて來た」

即ち彼の早漏の原因は性交恐怖であり、恐怖は父（門衞）の恐怖である事が解つた。そして此の恐怖はリビドーを轉位せしめ、崇物的對象を求めしめた。そして性感が下部より上部へと移行し終に視感を犯す事となつた。

續行聯想――みやこ腰巻＝嘗つて遊郭へ行つた時遊手が用ゐて居つたもの。

御輿＝小供の時に御輿がかざつてあつたのを見た。その時お祭りであつて不斷〆切つてある神社の扉が開いてあつて、御開帳だから、拜むんだと同行した母が云つた。

御開帳＝小供の時に一諸に遊んで居つた女の子がしやがんだ時に、もう一人の男の子が下を覗いて、御開帳を拜もうと云つたのを覺えてゐる。

問。父さんと一諸に活動を見たのはつまらなかつたと云うたが一人ならどうですか。

答。一人ならレビューを見たいと思ひます。

問。分析を受ける時物足らない氣がしますか。

答。先生は餘り話をして吳れないので物足りません。

問。どういふ話を聞きたいのですか。

答。……先生の本に性慾論と云ふのがありますね。

註釋――患者は精神分析の事をきゝかじつて、或る期待を持つて來た。それは分析者に性的好奇心を滿してもらいたい事であつたが、父（轉嫁により分析者）はレビューを見さしてくれない、面白くない映畫を見さしただけである。此の埋合せに山車を見たのである。山車は御輿、御輿は御開帳、即ち婦人の性器である。患者の不能症は性器に於けるリビドーの抑壓に基き、その代償として眼が性器化（ゼニタライズ）されてゐるのである。

夢六　呼吸困難で讀經の表現

氣飢 air-hunger に病んでゐる二十三歲の青年。ある寺の住職をしてゐる祖父母に育てられた。症狀の特徵として、呼吸をした時吐いた息がもどらないで、其の儘息が止まつてしまう樣な氣がする。密迫恐怖（クロストロフオビー）が强い。三十四回目の分析中、次の夢を語る。

「母に小供が生れる（母は父と共に別居してゐる。）生兒は牛の皮の蒲團の上にねかされてゐる。牛の皮には灸の跡が一杯ある。その部屋では、祖父が永らく病んでをつて終に死んだ。」

聯想――祖父母共全身に一杯灸の跡があつた。

問。御灸といふ事から何か思ひませんか。
答。御經を思ひます、五六歳頃と思てますが夏の暑い時に祖父が讀經する傍で、祖母の云ひつけで團扇で蚊を追うてやりました。
問。何か外に思ひ出しませんか。
答。私は小供の時に半鐘の音が嫌ひでした。今でも餘り好きません。家がお寺でしたから、本堂の廊下に半鐘がさがつてをつて御葬式の時や何にかにそれを鳴しました。
問。半鐘の音で何か思ひ出しませんか。
答。そうです。讀經の時に鳴らす鉦を思ひ出します。
問。君はお經が讀めますか。
答。御經は習ひましたが、呼吸が續かないで覺えられないでしまいました。
問。どういふところで呼吸が續かなくなります。
答。ずうとひくところです。
問。お祖父さんはお經がお上手でしたか。
答。よく呼吸が續くので上手でした。然し私は傍できいているる呼吸が止まつてしまはないかと心配でなりませんでした。

註釋——患者の氣飢の原因は此の問答で解つた。彼は讀經の聲を吐いた息が戻つてこないといふ意味で祖父を模倣し、祖父と同一化してゐるのである。即ち彼の無意識は祖父から敎へられた御經を症狀の形で復誦してゐるのである。換言すれば、症狀は讀經を習得し損うた補償である。此の註釋の結果、呼吸困難は除去された。

夢七　母の名代としての鼠

肛門性感の强い定著、虐待性に目立つた四十二歳の男子。入寮性格分析を受けて居つた人。二十五回目の分析中に次の夢を話す。

「三年前に死んだ母と自分は何か對談して居る。急に自分は怒を感じた。其の原因は解らない。場面變る。自分は棒をもつて壁のそばにしやがんでゐる。壁の下に穴がある。そこから鼠が出て來るのを待つてゐて、叩き殺さうとしてゐる。

聯想——母は口喧しい女で、自分は子供の時よく叱られ時々反抗して見たが、ひどく仕置されるばかりだつた。母は又ふしだらな女で父（五年前死亡）の不在中、屢々變な男と密談してゐる樣な事があつた。……次の樣な夢を見た事がある。

夢八　橋上で母と情夫との密會

「夜更に母が歸宅しないので、氣になつて探しに出た。村はずれに川があつて、其れにかゝつて居る橋がある。母は眞暗の中で其の橋の上に立つて居た。はゝ此れは情夫に密會の爲に來てゐるのだなと感じた。傍に近よつて

見ると、母だと思つたのは大きな溝鼠だつた。」

問。鼠と云ふ事で何にか考へませんか。

答。鼠は子供の時から嫌ひで、見ると殺さないでは濟まない樣な氣がした。よく殺しました。

問。母さんについては！　……

答。……母はたしか子（鼠）の歳だと思ひますが。

註釋――患者は生れ歳からして、母を鼠に同一化してゐる。そして母に對する憎惡と復讐心を鼠に轉位したのである。尙、被分析者の强き積極エディポス、父との同一化及他の聯想の材料からして、母の性格に歸した不倫は嫉妬に基く空想に外ならない事が明かとなつた。其れは母の情夫と見た男は父であり、密談は父母の間で交したものに過ぎないのであつた。水で隔たる二つの土地を結びつける橋は、父母の性交を意味するものと解されるであらう。嬰兒時代に患者は此の行爲を目擊し、それによりエディポスを强め虐待性を定着せしめるに至つたのであらう。

夢九　婦人の同性愛と狐の嫁入り

三十五歳になる初期のパラノイア婦人患者。夫極烈しい嫉妬で惱ましてゐる。被害妄想を示しかけてゐる。例へば、夫と同伴して來る四歳になる男の子を、分析中に夫が遊ばしてゐる。或る時、私の妻がその子供に菓子を與へた。患者は、歸宅後、毒がしこんであると稱して、それを棄てさせた。私の妻は彼女を毒殺するとたくらんだとしたのである。此の出來事のあつた數日後、次の夢を持つて來た。

「先生の奧さんが御嫁に行く事になつた。自分はその仕度を手傳つてゐる。提燈が澤山ついて賑かな行列が始まつた。自分はお婿さんの樣な氣がした。」

聯想――患者は旣に深い退行症狀を示し、自由聯想が殆んど不可能の狀態であつた。よつてユングの單語聯想法を試みた。「水」といふ語から「川」、「川向う」と出た。

問。「川向う」に何が見えますか。

答。森が見えます。……狐の嫁入りと思ひます。

問。狐の嫁入りを見た事がありますか。

答。イヽエ見た事は有りません。唯聞いただけです。

問。狐は人をばかすと云ひますが、貴女はそれを御信じなさるか。

答。イヽエ信じません、唯人からよく聞きます。

問。狐は大概女にばけるさうですな。……狸は大入道に。

答。さうださうです。妾の家の筋向ひに氷屋があります。そこの娘の顏はよく狐に似てゐます。其の娘は私の家ばかり覗いてゐます。日曜等宅が家にゐます時には格別覗きたがる樣です。

註釋——彼女の夫に對する嫉妬の原因は此所で明かにする事が出來る。同時に該患者のパラノイア的投出の機制も理解出來る。狐は彼女の分身、卽ち狐と同一化した彼女の自我の部分の投出である。彼女は狐に惚れてもらひたいのである。此のナルチスス的對象となつたものは私の妻であり、又氷屋の娘である。彼女の巧みなパラノノイア的論理もまた此所に窺はれる。「自分は女である。女に女が惚れる筈はない。それ故氷屋の娘は夫に惚れてゐるのだ。」私の妻に對してはアンビヴレンツの消極側を轉嫁してゐる（自分の自我で狐と同一化した部分に對する）。消極側、卽ち憎惡が私の妻に塗除け（投出）られてゐるから患者は自分を憎むものは、自分自身（事實さうであるが）でなく、飽まで私の妻であると信ずるのである。パラノイアの被害妄想の加害者は常に同性でなければならないのである。尙、該患者の夢の顯在內容中「提燈が澤山ついて賑かな行列が始まつた」の潜在內容としては「川向ふの森の間に見える狐の嫁入り」と組立直す事が出來やう。願望現實の要素は「自分はお婿さんの樣な氣がした」（女に惚れられないので男になる）と云ふ內に認められるであらう。（完）

夢と民俗

中山太郎

◎夢で靈魂を知る

日本民族は夢によつて、始めて靈魂の在る事を知つたのである。書紀の一書に『自後、國の中に未だ成らざる所をば、大巳貴命獨り能く巡り造る。遂に出雲國に到りて、乃ち興言して曰く（中略）。今此の國を理むるは、唯吾れ一身のみなり、それ吾と共に天下を理むべきもの蓋しありや。時に神光海を照し、忽然に浮び來るものあり（中略）。大巳貴命問ひて曰く、然らば汝は是れ誰ぞ。對へて曰く、吾は是れ汝が幸魂奇魂なり。大巳貴命の曰く、唯然り、迺ち汝は是れ吾が幸魂奇魂なりけりと知りぬ』とある。此の幸奇兩魂の解釋に就いては、代々の神道者及び國學者の間に種々あるも採るに足らぬ。所詮は大巳貴命が夢で自分の魂を發見し、それと問答したのを神話化したに過ぎぬのである。

◈ 夢は神人交通の道

日本民族は、夢を以て神人交通の道と考へてゐた。神武紀に『天皇獨皇子手研耳命と軍を帥ゐて進み、熊野荒坂津に至ります(中略)。時に神毒氣を吐きて、人物咸に瘁えぬ。是に由りて皇軍復た振ること能はず。時に彼處に人あり、號を熊野高倉下と曰ふ。忽夜夢みらく、天照大神武甕雷神に謂りて曰く、かの葦原中國猶聞喧擾之響焉。宜べ汝更た往きて征て。武甕雷神對へて曰く、予行らずと雖も、予が平國之劒を下さば、則ち國將に自らに平けなむ。天照大神曰く、諾。時に武甕雷神登ち高倉下に謂りて曰く、予が劒の號を韴靈と曰ふ。今當に汝が庫の裏に置くべし。宜べ取りて天孫に獻れ。高倉下唯々と曰すとみて寤めぬ。明旦、夢の中の敎に依りて、庫を開けて視るに、果して落ちたる劒あり(中略)。卽ち取りて以て進る。時に天皇適寐ませり。忽然にして寤めて曰く予れ何ぞ若此長眠しつるや。尋いで毒に中れる士卒、悉に復た醒め起きぬ』とある。斯うして夢を神人交通の道と考へた思想は、萬葉集以下の歌集及び文獻に例證が多い。

◈ 夢占で大事を決行する

日本民族は夢を以て大事を判斷決行した、崇神紀四十八年春正月の條に『天皇、豐城命、活目尊に勅して曰く汝等二子慈愛共に齊し、曷れを嗣に爲むことを知らず、各宜しく夢みるべし。朕夢を以て占へむ。二皇子是に於て命を被り、淨沐みて祈みて寐たまへり。各夢を得たまひつ。會明に兄豐城命夢の辭を以て天皇に奏して曰さく、自ら御諸山の嶺に登りて、東に向きて八廻弄槍し、八廻擊刀す。弟活目尊夢の辭を以て奏して曰さく、自ら御諸山の嶺に登りて、繩を四方に絙へて粟を食む雀を逐る。則ち天皇相夢して、二子に謂りて曰く、兄は則ち一片に東に向きて當に東國を治すべし。弟は是れ悉く四方に臨みて宜しく朕が位を繼ぐべし』とある。曾て小熊虎之助氏は、斯うした記錄を集めて、我國の天皇は何時でも他の者に、夢を見せ得る修養を有してゐたのであらうと、說かれたやうに記憶してゐる。

◈ 夢の資料は多過ぎる

斯うして夢を手重く考へた思想は、世が降るにつれ更に種々なる俗信を生み、民俗にも相當に深い交渉を有つやうになつた。誰でも知つてゐることではあるが、自分の事を遠く離れてゐる者に夢に見させようとするには思ふ事必らず告げよ枕神、吾が衣手をかへしてぞ寢る』

と云ふ歌を三度唱へて寢ると效驗があると云ふのを古いものとして、此の外にも數ふることの出來ぬほど樣々のものが工夫され、後には夢判斷とて吉凶禍福を說く者さへ生じた。越中下新川郡五箇庄村では、昔は分家屋敷を定める折には、本家の主人がその屋敷とすべき場所へ一夜ごろ寢をして、惡夢も見ず安らかに眠むることが出來れば、そこへ家作したものだが、若し之れに反して惡夢を見れば他の場所を擇むことゝなつてゐた。正月の寶船の俗信、夢違ひ觀音の信仰、一富士二鷹三茄子の故事、夢の話は長き夜の遠の眠りのそれの如く、かづ限りなく存してゐるのである。(完)

處刑の夢

The "Execution Dream" (1927)

George H. Green

岩倉具榮譯

グリーンは英國の精神分析學的教育家で Ph. D., M. A., B. Sc., などの學位がある。「教室に於ける精神分析」、「心の活動」、「白日夢」、「恐怖の夢」などの著がある。左の論文は「恐怖の夢」の中の一章である。

×

或る時は突然目が醒めるほどの恐怖の夢となることもあるし、又或る時はそれほど激しくはなく、たゞ不安の夢となることもあるが、とにかく我々がよく見る夢の一つの形は、その中で夢の本人が自分自身處刑されようとしてゐるのを見る夢である。私は嘗て恐怖の夢一般についての論文を書いたが、その中で私は、之等の夢はフロイドの「願望充足」の原則に對する例外ではないといふ見解を取り、そして之等の夢は願望が滿された時の條件を囘復する爲め努力が妨害されたものであるといふことを大變強く暗示する證據を提出しておいたのである。併し乍ら夢の本人が處刑を受けようとしてゐる夢が如何なる意味に於てにもせよ願望の充足を現し得るといふことは一寸分らない話である。

フロイドと彼の祖述者とは、夢が二三の例を除いて明かに願望とその充足とを明かに表現してゐるとは決して云はなかつたといふことを忘れないで貰ひたい。ある方法で夢を考察して始めて、その隱れた、その內に含まれた潛在してゐる願望が、明白になるのである。

今日一般のヨーロッパ人にとつて處刑とは如何なる意

味を有つてゐるであらうか。まづ犯罪が遂行される、周圍の狀況を十分注意深く探求する、證據が蒐集される。そしてある特定の人が有罪と確定する、と云ふわけである。此の手續は大變注意深いものであるから、大抵の場合には無罪の人が處刑される事は極めて稀である。

して見れば、自分自身の處刑の夢は、自分が罪を犯したことを意味し、又最も明白にその意を示すといふことが直ちに推論される。

又、極刑に處せられる犯罪は數に於ては少い。英國では殺人のみが、極刑に處せられる。して見れば、そこから直ちに推論される事は、自分自身が現在處刑されるのを夢見る人は、誰かを殺した者として自身を夢に見てゐるといふことになるらしく思はれる。

私が現在といふ點に力を入れるのは、處刑の夢はある時には、人々が殺人以外の事件で處刑された時期に舞臺を取ることがあるからである。ところで、私の一友人は自分がギロチンにかけられようとする夢を、見たのである。その處刑は大きな公開の場所で行はれることになつた。彼自身の教師を除いて、彼の學校友達の全員が出現した。彼は、椅子を前方に程よいところに置き、そして彼の教師が來たならば、そこに掛けて、彼の處刑をよく見ることが出來るやうにしてくれと賴んだ、

ギロチンと云ふと直ちにフランス革命が聯想され、暴民が貴族でありさへすれば皆人をそのために處刑した時が思出される。で、右の夢は、處刑されてゐる男が貴族であり、そして彼を處刑しゐる人々は平民の暴徒であるといふ意を含んでゐる。彼の先生には前の方に席を占めて貰ひたいとの配慮は、それ故、先生が面白い見せ物を細かく見ることが出來ない樣では困るとの私心のない願望の表現ではなく、その反對に、先生が彼の周圍にゐる平民の暴徒と貴族たる自分を明瞭に見分ける樣にとの願望の表現である。夢の本人は夢を分析してこの點に達した時に云つた。「併し之れは完全に恐しく、そして利己的である」と。けれども進んで彼は、この要素が彼の學校友達と先生に對する彼の感情に入り込んでゐるのを認めてゐる。こゝまで來ると、夢の分析の經驗のある何人にとつても、その探求が非常に進み、より深い、古い願望の層が見出されたといふことが明白になるであらう。けれども、このことは、その時には、可能でなかつた。そして實は、吾々の只今の目的に必要ではない。

右の分析は淺薄だが、これだけの分析でも、新教徒の殉教者として火刑柱で燒かれる夢は、若し、それを新教徒が夢見たのなら、自分は完全に正しく、他の人間は全部惡いといふ確信を表現する非常に戲曲的な方法であ

ることは明かに分る。實は、廣い意味で云へば、如何なる處刑の夢も夢の本人と彼の周圍の人々との間の相違が非常に大きく、そのため彼が周圍の人々から逃れねばならない程であるとの狀態を表現する戲曲的の方法である。かくして人々は、夢の本人だけを生かしておいて他の人々全體を破滅させる大變動（シイル M. P. Shiel が「紫の雲」The Purple Cloud 中に述べてゐる樣な）或ひは自分だけが社會全體から破滅させられる如き夢を見るであらう。兩方とも結局は同じことを意味するのである。

處刑の夢に屢々現れる特徴は、その夢の中のどんな點に就いて見ても、どういふ犯罪の爲に處刑されるのか、その夢の本人には明瞭でないといふことである。私が言及したギロチンの夢のどんな點に就いて見ても、夢の本人に取つて分らぬのは、彼が自分をその周圍の人々より善いと思つてゐるとて群集の中の何人かゞ彼を非難したといふことである。彼は實際、特別に謙遜な男で、彼の仕事と學識については並々ならぬ穩當な、公平な見解を持つことが出來、そして彼が自分自身を周圍の男女よりも勝れてゐると考へるのを知ることは（彼の言葉が示す如く）彼には氣持よくないのである。夢に於て現實の犯罪の事が少しも出てをらぬのは、抑壓の力が普通以上に明瞭に出てゐる實例であると思はれる。

リヴァーズ（Rivers）はその著『葛藤と夢』Conflict and Dream）の中で、處刑の夢と非常に共通點の多い夢の一つの型を述べてゐる。それは戰爭中前線に勤務した人々に大變屢々現れた型であつた。兵士は、ある時には病院で、ある時には戰線から歸つて、又ある時には民間生活に歸つてずつと後に、自分が戰場にゐるかの如き夢を見た。そこに歸ることは如何なる場合にも、明らかに願望充足とは見做すことは出來なかつた。それにも拘らず私は、右に論じて來た如き意味での願望充足でそれがあつたと信じ度いのである。

戰爭中、私が一時屬してゐた聯隊で、特別な兵卒と特別な將校が私に托せられた。彼等について私は次の話を聞かされた。前進中、兵卒等は目的地に到達し、そして塹壕を掘つた――問題の兵卒は並々ならず巧妙に。將校は少し後に來てその男を使ひに送り返し、そして彼の塹壕を占有した。その男が復命を持つて歸つた時に將校はその塹壕をあけ渡さないで、敵がどん／＼射擊してゐるから出來るだけ早く行つて塹壕を掘る樣にとその兵に云つた。その兵は、將校に塹壕を出て行つて自分で掘るがいゝとその將校を銃劍でおどかした。私に報告した人は話しつゞけた。――戰場に於けると根據地の陣營に於け

るとの差を語つた。彼が云ふには、戰場では各人は各人で、皆人は夫々他の人と同じ價値であつたと。彼はその時何か細かいことで退屈してゐたので、又戰場が旣に記憶に過ぎなくなつてゐたので、彼はその事柄の一面のみを取上げてゐたのである。從つて彼の話は塹壕の二線間の戰場の恐怖と危險とに就いては、何も言及しなかつたのである。

その話がどの程度迄眞實であるかないか私は何等知る所がない。その話には多分、眞實の事件を誇張して取扱つてゐるのだらうといふことを疑ふだけの何物も、私はその當時知らなかつた。併しその話に依つて、戰場が、日常の文明生活の規則が支配してゐない場所の代りになつてゐるといふことが明かになるのである。つまり「スエズの東」に於ける如くそこには何等の命令も規則も行はれないと云ふわけだと分つたのである。將校をその塹壕から逐ひ出した兵が民間生活に於てある慾望の實現を規則や戒律のために（社會的に經濟的に彼自身より勝れた人々によつて）妨げられる場合があるであらう。するとその様な場合には彼は例の「戰場」での經驗を夢みるであらうと想像することは理屈が通つてゐる。それは丁度犬に飛びつかれた少女が後にそれと類似の恐怖を經驗すると、再び少女が大きな犬に飛びかゝられる夢を見るのと同じである。

除隊後二三ケ月ほど後に、或る除隊の將校が、汽車や電車が無暗に込合ふ――その當時は殊に甚かつた――ので不快だと私に話して居た。彼は自分がその場所を取る爲に少女を電車の踏板から押しのけた大きな男について特別な憤怒を以て語つた。「それであなたは默つて見てゐたのですか」と私は尋ねた。「おゝ、私は彼のあごの下を毆つてやつたのです、すると彼は丸太の樣に倒れました」と彼は事もなげに云つた。「それから彼は起上つて一言も云はずに鋪道の方へ歩いて行きました」と。この前將校は丁度その時のと同じ樣な憤怒を感じた多くの場合に會つてゐるに相違ないと私は思ふのであるが、規則や法律や文明的習慣などのために制せられてこれほどはつきりと表現することが出來ないのである。彼が時々軍隊へ歸つてゐるところを夢に見るのは、非常に明瞭である。彼は軍隊を意識的には嫌つてゐるにもせよ、それに歸つてゐることにすれば、彼の現在の環境では滿足に表現することの出來ない如き性質のことを表現出來るのである。

恐怖の夢、戰爭の夢、及び處刑の夢は、願望充足の表現とは表面では、凡そ緣の遠いものと思はれるが、實は願望充足の表現である點で共通してゐるのである。併し

乍らそれ等の間には重大な相違がある。

女兒が犬を恐れないで犬の側を通り拔けて犬小屋のところへ行き、そこで玩具で遊んでゐてお母さんに見つかり、そしてひどく打たれると假定しよう。その後、その子供がどうして罰せられたのか思出せないが、とにかくお母さんに打たれた夢を見て眼を醒ますとしよう。處刑の夢と眞に類似するものは、嘗て述べた恐怖の夢よりもむしろこの種類の夢である。

單純恐怖の夢には、抑壓作用の證據は殆ど、或ひは少しも見られない。直接的の、單純な願望充足への道程に於ける一點に於いて一つの立場が作り出される。この立場の事をいろ〳〵と考へてゐると段々亢奮して來て睡眠を續けられなくなる。このやうな夢は二樣の失敗である——それは願望を充足させないと共に、「睡眠の保護」としての役目を果さないのである。

私が以前に述べた型の夢は多分これ等二つの眞中に這入るのであらう。その夢では、夢の本人が彼を攻擊した敵と爭つてゐる最中に、又は彼が敵から逃れた瞬間に、目醒める。こゝでも亦感情が强過ぎて夢が最後に達するのを妨げる。併しそれは睡眠者がたゞその立場を考察するために恐怖から目醒める夢よりも場面は進展してゐるのである。

けれども私が話した型の處刑の夢では、夢の場面はもう一つ進展してゐるのである。この夢に於いては、願望充足を駄目にさせ、目醒めの原因となる感情を呼び起す如き立場は出てをらぬやうに見える。この夢に於いては願望の性質が非常に恐ろしいために夢の本人がそれの充足を見果てずして目醒めるのであらう樣な願望の實際充足は現はれない。これを吾々は抑壓と呼ぶべきか。或ひは健忘と呼ぶべきか。夢のこの部分は抑壓され決して夢に出なかつたのか、或ひは目醒める時に忘れられたのであらうか。若しも願望が夢の本人の思ひも寄らぬものであるなら、何故それはそれが何であるかを認められるのを妨げる樣な外觀を取らないのであらうか。

私は、之等の質問に答へるべき材料を持たない。併し私はそこに少くともある程度迄抑壓があると考へざるを得ない處刑の夢の一つの型を知つてゐるのである。その中で睡眠者は自分の處刑に先立つて審問を受けるところを夢見る。即ち、彼は裁判官と陪審員に面するが、彼に對する論告は馬鹿げて居るか、又は何の事やらよく分らない。抑壓が作用してゐることの證據は、この不合理さ又は無意味さにある。夢の本人が、その論告を不合理或ひは無意味と認めるといふ事實に依つても亦、夢が願望を假裝し損うてゐることが分る。で、抑壓はもつと進展

した夢に於いて、全部の省略となつて現れるのである。

凡そこのことに就いて見ても、右のやうな夢で充足された「願望」が如何に緊急なものであるかを指示して居る様に見える。夢が完結に達するのを妨げる様な恐怖は避けられねばならないから、從つて初めの方の立場は省略される。願望そのものも現れてはならない。であるから可能として殘る凡ては、願望充足の結果を示す事である。抑壓が、此の如き程度に進まねばならぬといふことは、願望の原始的又は反社會的の性質を暗示して餘りある。たとへ、實際夢の本人の友達が彼を仲間から除くために互に結合するといふ事實の中にその反社會的性質の保證を吾々が既に見得ないにしても……。(完)

田に水當の夢

奥本島田

あたりは暗い。川尻(地名)の道を下つて來ると、五六人の人が道の兩側に坐つてゐる。それは水當の番人である。暗いので顔は見えない。彼等は道の兩側に居るので私はそのまん中を通りすぎて行つた。平七(家の名)の稻木(稻を刈つて干すもの)の處のシデノ木が生えてゐる處に來ると、うすぐらいのでよくわからんが數人の者が道の兩側にころがつてゐる様にまるい形がうすぐらい中にわかる。その中を通つて來ると兩側の者はだんだん小さい形の者となる。道のまがり角の處に最後の者がゐるのではつきり見るとねずみの赤子のふくれた形によく似てゐるもので、人の嬰兒位の大きさ。頭と胴とだけがわかる。これまで人だと思つてゐたのにこんな形をしたものがゐる。ばけものかな——こいつ狐につままれてゐるのだな。……と思ふと何だか恐しい。彼は動きもしない。私は氣がふさがつた様で苦しい聲をフウー・フウーと立ててゐた。(昭八、八、八夜九時頃)

聯想A——私の故鄕で少年時代に川尻では夏の日照の爲めに田がかわくので田へ水當(水を引く)の爲めに友達と共に晩おそくまで其の附近を歩いたものだ。友人の家の名は平七といつてゐた。その田へ水を當てるために私は彼と共に水道を暗いのに見張りに行つてやつた。川尻は細い田舍道で兩側から草が覆茂つてゐる。このあたりはよく狐が火をともすといふことである。私も少年時代にこの道を夜通るのは恐ろしい様なので遠路をして歸宅するのだつた。初夏の頃螢狩にもよくこのあたりへ來る。或る夕暮誰かが入道僧を見たといふことを聞いたことがある。こんな話を聞くと夜はこのあたり

は何だか淋しい、恐しい氣分がする。

　聯想B――夢を見た日の晝、井戸のポンプで家內に水を汲んでやつてゐた。連日の日照りで水はほとんどないので、ポンプは大きな音をがた／＼立てるが水は少しより出ない。家主（婦人）が見に來たらしい。曰く

「ヒドイ水が出んらしいね――」

（水の出ないことは家主は良く知つてゐるのであるが――）

「ヘエでません。」

ヒョッと彼女の顏を見ると、よく肥えた頰で口を開いてゐるため（にが笑）にふくれてゐるのが目に付く。「さう／＼彼女が怒る時はいつもあんないやらしい顏付で聲もあんなもんだ。これはあんまりポンプをがた／＼やるから怒りに來たんだな。」と思つてゐた。

　水を汲みながら家主の顏を見たと同時に、妻の父が寢そべつて本を讀んでゐるのを見た。其日は掃除で父に手傳に來てもらつてゐるのでもう掃除もすんで休んでゐるのであつた。

　聯想C――少年時代に夏、田の草取りをしてゐながら横の溝から田へ水を入れてゐた。その水は少しより流れてゐなかつたし誰も附近に居なかつたので、他の人の田へは水を當ててゐないことと思つてゐた。私は一心になつて田の草取りをしてゐると誰かの聲がする。見ると私が溝から田へ水を入れてゐる處に、某婦人が立つてゐる。實はこの婦人が自分の田へ水當をしてゐるのであつたのだ。私はこの人に叱られるまでそのことを知らなかつた。私はそこで叱られてしまつた。その婦人もよく肥えた人であつた。

　其日の夕方私は水當をしてゐたが、川尻（夢に私が始めてあらはれた處）の處に數人の者が道の側の草の上に坐つて水當番をしてゐる。私もその中の一人であつた。この中で私は他の一人から今日晝水を田へ入れてゐたことに就いて訓戒的のことを言はれた。私は何も惡氣で自分の田へ入れたのではない。唯水があまりなかつたので一寸入れただけのことだのに村の中でも相當評判の惡い人物と同一視的にこの人は私を評したのであつた。だから私は極力辯解したかつた。だが、私はどうしても思つてゐる通り言ひ述べることは出來なかつた。晝間彼の婦人に叱られた時も同じく言ひわけをする力はなかつた。（あまりにもがみ／＼と壓迫されて）その後私は時々思ひ出して癪にさわつて言ひわけをしてやらうと思ふこともあつた。私はここで訓戒を受けた時に、「あのババが大げさに惡評したんだ」と思つた。

註釋　一――

此の夢は家主たる婦人を惡魔（バケモノ）にしてしまつてゐる。又父をもさうしてゐるところに一種の願望充足がある。然かも私はさうしておいて、それを恐怖してゐるのである。家主を惡魔にしてゐることは次の樣に解釋され得る。

（1）　私は四十歲前後以上の年齡の婦人で怒る性質の強い者をよく『惡魔』とか、或は『鬼ババ』とか言ふ。

この家主もその内に入る。
(2) 水當番人の水に對する關係は、この家主の井水に對する關係に等しい。(私には)
(3) 水當番人がしまひにはつきりばけものに見えた。おばけであつたのだ。
(4) ポンプで水を汲んでゐる時に出て來た家主の顏(頬)を見た時は怒り顏(惡魔)に見えた。
(5) (3)も(4)も其の形を見た時にさう思はれたのである。私はそれによつて恐怖の雰圍氣に包まれてしまつた。
(1)から(5)までの理由と夢とによつて次の様に結論される。

水當番人=家主
水當番人=おばけ
∴ 家主=おばけ(鬼ババ)

又は――

家主=顏を見た時鬼ババ
水當番人=形を見た時にバケモノ

家主が鬼ババたることも、水當番人がバケモノたることも、其の結果は恐怖の雰圍氣につつまれる其の心理的價値に於いては等しい。故に、

家主=水當番人=ばけもの

私はここまで分析してから、また次の様なことを聯想した。

聯想D――私は以前にこの家主から彼女の息子のことで小言をいはれた事があつたが、その時の顏付を思ひ出す。

聯想E――五六年前に或る地方に居た時、瘦がれた工夫にひどく怒られた事があつた。彼の顏は瓢箪の如く頬骨が出てゐた。口を開いて怒つた處はこの婦人(家主)を聯想させる。

聯想F――幼時母の弟が中折帽を見せると私は恐れるから見せぬ様にと言つたが、彼は笑ひながら頭の部を一寸見せて上り段の處へ置いてしまつたから帽子は見えなくなつた。私は其の時恐しい氣分はなかつた樣に思つてゐる。中折の兩方がプクッとふくれてゐるのが思ひ出され、其の色はカバ色であつたと記憶してゐる。

註釋 二――

(a) 田へ水を當てる人々は、御互に他人を拒むのである。それは他人が少い程自分の田へ多く水を與へ得るからである。それと同時に少しでも多く我が田へ水を引く樣に他人の目をぬすんで努力する。我田引水の爲には他人はじやまものである。

(b) 家主の見てゐる前で水の少ないのにポンプをがた〳〵やつてゐることを私はかう考へる。「私は少しはポンプがいたむからいけないと思つてゐたので、水が

ないのでさうがた〳〵やるとポンプがこわれるから困ると家主が思つてゐるのだらう。」と。

而かし私はがた〳〵やつて少く出る水を妻のために汲んでやつた。（もう少しひどくやれば水は多く出るのだが）私は家主の前で悪をなしてゐる様な心持ちがすると同時に、家主は私にはじやま者であつたのだ。

妻＝田

他の水當番人＝家主＝父

水＝精液＝愛

異性を愛する爲には、それを障碍する者は悪い邪魔者とされる。

（a）＝（b）エディポス・コンプレクス、

註釋　三――

夢に見たねずみの赤子の形は、正しく龜頭の完全に露出してゐる男性器である。龜頭が完全に露出してゐるのは老年である。私はこの老年の男を恐怖してゐる。

掃除をしてゐるうちは何とも思つてゐなかつたが、もう掃除もすんでしまふと、私の義父に對する心はエディポス的である。それは私が妻を愛する爲には父は邪魔者であるし、又恐ろしい。掃除を手傳に來て呉れた父が働いて呉れて掃除も片付いたので休んでゐる、その父を鬼（私ババとしての家主と同一化）にして、恐怖し憎んでゐる。

（最後のこの分析は四日目に思ひ付いた。聯想Bの後に記してある父の事から分析した。

聯想Bの後の部も四日目に思ひ出してBに付け加へたものである。

エディポス型の夢

高水力太郎

左に掲げたものは本誌讀者春田禮人氏からの寄稿であつて完全なエディポス型の夢である。筆者は何等聯想も自己分析も加へてはをらぬが殆ど曲型的な象徴を以て充滿してゐるから、その意味を判ずることは難くない。まづ主人公は幼兒症的青年として登場する。そこへ娼婦型の女としての母が現れて誘惑する。海に出たが、男は舟に乘り女は丸太に乘る。渡ると母は小便をする。その音が音樂的であると云ふのも意味がある。今度は母が「細長い小石」を拾つて大事さうに抱える。その小石が脹れて彼を追跡する。父である。また別の女が現れる。これまた母の分身である。最後に唾をすると、大地が裂けてそこへ溶込んで氣持がよい。同時に射精してゐる、と云ふので終りにな

つてゐる。全身を性器化してゐる。部分を以て全體を代表する象徴の技法の一例である。

×

『ひろい原である。それは何處であるか分らないが見渡す限りの原――いや砂漠であつた。やはらかな寢臺の上におこされていやだ〳〵と云ふのに母はまあいゝからついておいでと猫なで聲で云ふので、俺は自分の手をさしだして夜の家をぬけだした。正直なところを云ふとうれしかつたのだ。母にこんなにやさしく手をにぎられて人ツ子一人通らぬ夜の街を歩くことゝは――。俺のこゝろはあやしく慄へた。俺はいまゝでどんなに母にかうしてもらつたらと思つて赧いこゝろになつたゞらうか。ぎゆつとにぎつた手に力を入れると母もふつくらとにぎりかへしてくれた。やがて海に出た。俺は舟に乘つたが母は丸太につかまつてそれを渡つた渡り切ると母は溜息をついて暗い處へ小走りにかけよると、シャンシャンシャンと小便をした。いまでもあの音だけは眼を閉じればきこへるほど音樂的なハーモニイをもつてゐた。よせくる波に哀愁をそゝいだ。母は五分ばかりして疲れた顏に、でも微笑をのせて戻つて來た。

まだなのときくと力なくウンと答へて二人は歩き出した。母は細長い小石を大事さうに持つてゐて、どうかするると先刻の様に俺に與へたやさしさをその小石にかけ俺にはいちべつをだにくれないので、なぜなんだときくと母は默つて小石をなでる。小石はみる間に大きくなつて俺を追つかけ始めた。俺は逃げた。ところがその日に限つて運惡くはやくかけだされず終に何かに躓いてしまつた。大きな小石は怒りながら追つてくる。俺は這いずつた。這いずりつゝ逃げようとした。が、後からムンヅと捕へられてぽいと投げ出された。そこが原であつた――いや砂漠であつた。俺は泣きさうになつてその砂漠をさまよひ歩いてゐると、騷々しい人聲がきこへる。眞赤な川が流れてゐた。何處かで不意にチクッとして穴が大きくあいた。下腹部が針でさゝれた様に不る血膿をみながらこれで死ぬのかもわからないと思つた

それにしても死と云ふものは何と氣安いことか。いまゝで死についての考へに恐怖をもつてゐたことを知つて私は笑ひたくなつた。

もし――と女が云つた。見上げると背の高い美しい女で、乳房が馬鹿に大きいのだ。いや、乳房の上に人間としての肉體がはりつけてあると云つた方がいゝ。

「え?」

「あたしの子供、今日からあんたはあたしの弟よ。」

ひよつとしたらこの女は母なんぢやないだらうか。い

やゝ母は小石を持つて何處かに行つてしまつた。だけど母の樣に俺を愛してくれるに違ひない。さうだ屹度。お母さん。さう云ふと女のひとはかすかに笑ひを兩頰に浮べ、なあにあたしの可愛い弟、あたしの子供、あんたはお母さんぢやないの？いゝえだけど今日から、ではお母さんになるわねと、頭を撫でゝくれた。俺はその手にさはつてみた。おや、大理石の墓碑の樣に冷めたい。十月の樹皮の樣にさゝくれてゐる。

「あなたは！」

「わかつてしまつたの？」

一瞬かなしさうな顏をした。その聲には哀調があつた少時くすると女は恐ろしい形相になり、さようならと云ひのこして高く空のきはみへ消へて行つた。あゝ、母：：母：：まことの母は何處にゐるのだ。せつかくお母さんになつてくれた女は。煙、煙、トゥルゲネーフは泣かなかつた。俺は歩きだした。永遠の母となるべきひとを求めて。それにしても憎らしい小石ぢやあないか。俺はツバをした。するといまゝで立つてゐた大地が急に眞二ツに裂けて、俺はあつと云ふまもあらず落ちこんでゆくお終ひだ——こゝろの中は何と氣持のよかつた事か：．。

ふと目を覺ました。夢であつたのか。體を動かすと汗がエボみたいに流れおちるあらツと俺は赧くなつてあたりを見まはした。依然として夜はふかく四疊半の俺の部屋には俺だけより誰もゐなかつたので胸をなでおろしたが、體がちゞんでゆく樣な嫌な氣持だ。俺はスタンドのスヰッチをひねつて寢たまゝ××をとり××にぬれた個所をふきとつた。（完）

新刊紹介

江部鴨村氏著「眞理を語る說話」

原本は佛敎僧の說敎のための種本としての寓話集とも云ふべきもので、誠に千古の含蓄を堪えた珠玉眞理の寶庫である。分析學者は寓話を好む。本書の中にも幾多の示唆を發見するであらう。寓話は夢の如く、これが解釋は多岐であり得る。我等は江部氏の註譯とは別樣の註譯を加へたいと思ふ。（人生創造社、一圓）

雜話

E・グラヴァー氏の個人的印象

矢部八重吉

本誌第六號には高水氏がエドワード・グラヴァー Edward Glover 氏の、ロンドン犯罪學研究所の開所式に於ける演説を紹介せられ、第七號には岩倉氏が同じくグラヴァー氏の戰爭心理分析論を翻譯せられ、屢々問題になるグラヴァー氏が如何なる人物であるかを讀者のために語つてくれとの編輯子からの高囑に依り、玆に筆をとる事にした。

私が初めてグラヴァー氏に逢ふたのは一九三〇年（大正五年）三月の、たしか十二日夜であつたと思ふ。それは英國精神分析學會週會（毎水曜）の席上だつた。氏は當時會長アーネスト・ジョーンズ氏の下に學會理事を勤めてをつた。私は分析技法の個人教授をジョンーズから受け、その他研究の事項一切に關して氏の指導を仰いでをつた爲め、コントル・アナリシス（分析士資格養成分析）の件についてもその分析者の選擇に關してはジョーンズ氏に一任した。氏は此の分析を行ふべき適任者は英國に現に五六人しかないと云ひ、その一人として推薦されたのが卽ちグラヴァー氏であつた。斯くしてジョーンズ氏の斡旋で分析の取極めが果され、前述の週會の席上で逢ふ事となつた。私は此の被推薦者に對し勿論多大の期待と畏懼と豫感とを以て會合に出席した。週會には既に數回臨んだのであり、且つ當夜は二三の面白き論文が讀まれ、それに對しジョーンズ會長が徹底した批判を試みるべく期待されてあつたので、私は聽き洩らすまいと可成、會長の近くに座を占めた。その論文は、肛門性感が紙を嚙む癖として現れた一患者の分析報告であつた。ジョーンズ氏は故フェレンシー氏や故アブラハム氏に次いで、肛門性感及性器前期の性感研究で著名な人であるので、氏の批判は特に興味を以て期待したのであつた。論文朗讀が終り、一般論議に移り、先づ第一に發言を求めた人は婦人出席者であつた。彼女は四十五六とも見える肥りかげんな、婦人として寧ろ强固な體軀の持主であつた。獨逸語なまりたつぷりな英語でなか〳〵の饒舌家と見えた。後に聞き知つたのであつたが、彼女がメラニ

エ・クライン女史であつた。女史に次ぎ二三の質問者があつた後、會長ジョーンズ氏の左側に座し會議の記録をとつてをつた青年が突然ペンを投げ捨て論議の仲間入りをした。私は此の人の態度に一驚を喫せざるを得なかつた。と云ふのは、會議の初めに會長の命に依り前會の記録を朗讀し、その修正必要の有無を會長が出席者に質して居る間、ひたすら、謹嚴、沈默を守つてをつたその態度からして一介の筆生又は書記位なものと思ふてをつたからだつた。然るに彼は今や平凡朴訥なる態度をからりと捨て、堂々たる分析者の姿勢を示して己れが母にも相當すべき年配のクライン女史に楯衝き來り、女史の意見を批判し初めたのであつた。忽ちにして論議に花が咲いた。誠に痛快な場面であつた。終結批判は三十分間に亘りジョーンズ會長に依り降され、會合は終りを告げた。が、私の待ち設けた事項は未だ濟まない。それはジョーンズ氏の約束された、私のためにコントル・アナリシスを行ひ呉れる人の紹介の件であつた。參會者はボツ〳〵散り初めた。ジョーンズ氏の傍らにあつた青年書記……今夕のクライン女史との場面の立役者……は立上つて私の傍らへつか〳〵と歩み來り、「あなたは明日から私の事務所へお出でなさい。あなたが話し番で私は聞き手ですよ。」

此の言葉は私の頭へ稲妻の閃くが如く映り、咄嗟の自覺で「は、此れがグラヴァーだな」と感じた。私は「あなたはグラヴァーさんですか」と聞かうと思つたが、その暇なく「はい、承知しました、何時に上りませうか」と問ふてしまつた。そして氏の「何時にジョーンズさんの處へ行きますか」との問に對し、私は「ジョーンズさんの割當時間は午後三時四十五分です」と答へたら「それでは私の方では四時四十五分を割當てしませう」。これで凡てのアレーンジメントは附いたのだ。料金の件はジョーンズ氏から一回（セツセン）(五十分)二ギニアス(當時の換算率で邦貨約廿一圓)と取り極めて呉れたので、毎回の終りにだまつて此の額を置いて來ればいゝのだつた。

英國人は約束時間を嚴守する。殊にジョーンズ氏の如きはさう見えた。(これは肛門性感の性格的表現である。氏が性器前期の性感に關し深き研究者である所以は恐らくは此の性格が然らしめたのではないか。) 私が一番氣にしたのは此の事であつた。普通の分析割當時間、卽ち五十分であるから、その終了は四時卅五分である。それからグラヴァー氏の時刻は四時四十五分であるから、その差は僅かに十分だ。ジョーンズ氏の事務所からグラヴァー氏の事務所まで徒歩で五六分かゝる。餘裕はかつかつだ。

明くれば三月十五日午後四時四十五分で、被分析者としての私とグラヴァー氏との初めての會見は後者の事務所で行はれた。此の時の印象は昨夜の會合での印象を全然覆してしまつた。氏を青年と見たのは私の誤りであつた。近接して能く見ると四十の坂を旣に少し超えたかと思はれる壯年であつた。中肉中脊（歐洲人としての）無髯な、どちらかと云ふと、ぎつちりとした骨組の、スポーツ型、典型的英國紳士であつた。寡默、沈着の態度は言葉の人より寧ろ行爲の人を思はしめた。餘り笑顏は見せない質の人ではあるが、その裏面には親切さと熱心さとは充分窺はれた。私は初會の時に何故に氏を年若く見誤まり、その人格をあまりに見縊り過ぎたかについて無意識的動機を探らうと聯想をとつて見たが、その後分析に據つて材料を認むるに到るまでは解らなかつた。たゞ此の日の印象には、氏がクライン女史への楯衝き振り、その勇壯な態度が刺戟となつてもたらされた見縊に對する反應構成が加つてをつたものと解してをつたが、後に到りそれが分析者に對する積極轉嫁の開始であつた事が知れた。

　グラヴァー氏に對し、私が初會の時に示した見縊りは、遺漏なく分析中に最も適當な手段で復讐された。それは次の様な具合に行はれた。分析が可なり進み、主要なる私の註釋も終つた後の或る日、グラヴァー氏は突然症候行物に取りかゝらうと言ひ出した。私はこれに應じ直ちに次ぎの話をした。

「此の週間はグラヴァー氏の時間とジョンス氏の時間とが取り換えられグ氏の方か先にジ氏の方が後廻しにする事になつた。で、月火水の三日は此の順程が遺漏なく運ばれた。然るに第四日目の作日（木曜）いつもの地下鐵道下車驛より二町戻るウェップル街にあるグ氏の事務所へ向つて來たのに、その前をそのまゝ通り過ぎ、地下鐵驛より一町戻るハーレー街にあるジ氏の事務所のある方向へ逆戻りしつゝあつた自分を發見した。

聯想一

「此の症候行爲のあつた前夜（水曜）學會の例會に出席した。その際ジョーンス氏に「分析は滿足に捗つてをられますか」と問はれた。私は「極めて滿足に」と答へたが、これは僞りであつた。と云ふのは私は日本を出立した當時から過去數年間文通を續けてをつたジョーンズ氏（當時國際學會々長）から技法の教授ばかりでなく分析をも受け度い考へであつた。（文通に依つて旣に私はジョーンス氏に積極轉嫁を起してをつた）然るに氏が他の人を紹介した事には密かに不服を感じてをつたのである。」

聯想二

「私が初めてグ氏の事務所を訪ふた時に入口のドーアにEd-

ward Glover としてあるのを見て此の名は全然私に未知でなかつたのを知つた。此の名はその兄弟であり今は故人となつたジェイムズ・グラヴァーと共に國際精神分析雜誌で屢々見たのであつた。私は Glover をグローヴァーと云ふ發音で雜誌で讀み、取次の婦人に此の發音で來意を告げた。が通じにくかつたので當惑した。再三繰返したら解つたと見え「あゝあなたはグラヴァーさんをお尋ねなんですか」と修正され、初めて發音の誤りを悟つた。ジョーンズ氏は私にグラヴァー氏の名を言ひながら紹介してくれたのだつた事は忘れてをつたが、此の時思ひ出した。卽ちグローヴァーはグラヴァーと同一人物である事が初めて意識的に解つたのである。が、私の無意識はとうからこの同一化をもつてゐたのである。それは初めて週會に出席して役員の名簿を見た時にグラヴァーなる人は理事である事を知り、ジョーンズ會長の傍に座し、書記役をしてゐたのは卽ち氏でなければならないのである。然し長く雜誌で讀み馴れた發音の仕方を急に意識的に修正しやうとするのに對する無意識の抵抗が持續されてをつたゝめグローヴァー氏とグラヴァー氏は別人として取扱はれたのである。

此の聯想はグラヴァー氏の援助に依りとられ、症候行爲の意味も氏の註釋に解かれた。卽ち私は、グラヴァー氏は一介の筆生、靑二才である。ジョーンズ氏なら兎も角年若のグラヴァー氏は私を分析する資格は全然ないと斷定した私のナルシシズムが働いてをつたのである。（終）

氣付いた事一二三

則近保良

近來若い女性の使用する言葉が男性のそれに接近し、極立つて粗暴、直截になつてきた。殊に女學生に於てこれが著しい傾向を示してゐる。竟り、直木三十五氏作『光罪と共に』の春生子、牧逸馬氏作『新しき天』の香苗——流の言葉遣ひがそれである。例せば『叔父貴、もういゝ加減に折れたらどう? そして南海ちやんとのん坊、一緒にしてやつてよ』と、まづざつと此の調子である。が、これなどまだ無事な方で、もつと手嚴しいのがざらにあるのだ。

成る程、聞き手が極く氣分の好い折なら、時にはこれも魅力である。だが、流行となれば鼻につく、單なる娼婦的な或は同性愛者的な魅力であるかもしれない。

一面からみれば此の傾向には、確に流行作家連の迎合的な、頽廢的な（勿論それには皮肉な作家的サディスム

スもあるんだらうが）輕薄さが與つて力あるに相違ない。簡單に併し分析的にみればこれだけでは片附られない。これは幼兒的男性器嫉妬に根源を有つ男性への同一化が、表面に現れてきたとみるのが至當であらう。通俗小説に強く影響されるのも、內心の要求の代償的滿足として、かうした表現法がお誂へむきだからにすぎない。勿論、一般にこれらの流行（喫煙、乘馬、ゴルフ、狩獵等）が若い女性を限つて旺んになりつゝあることが注目に價するとは云へ、分析的解釋を嚴密に行ふとなれば現在の社會的狀勢を、或は個人としての環境、家庭關係等を考慮せねばならぬことは云ふまでもない。が理窟は別として、ユングの所謂アニマ、アニマスの心理からこれらを觀察してみるも面白いことゝ思ふ。

とまれ此の傾向は、分析學上に好材料を與へるものでなければならないだらう。

×

ユングを持出したから次手に記しておくが、吾國の歷史にアニマス型の女性を求めるとすれば、相當澤山に擧げることが出來よう。ざつと私の氣付いたゞけを列記すれば――

神功皇后、元明天皇の姉君御名部の皇女、安部の齋郞女、鎌倉執權政子の方、正行の母、眞田信元の妻（本多忠勝の娘）、春日局、賴山陽の母、巴、板額。近いところでは奧村五百子、寺田屋の女將等（順序不同）、史實から推して此の型の女性と見做ても差問へないであらう。また大阪落城に於ける問題の女性淀君もこの部類に加へてよいと思ふ。とすれば、執權片桐且元、寵童大野修理亮、のアニマ型と對照せしめて面白い考察も出來る筈である。

×

淀君と云へば、大阪夏の陣、冬の陣は、實にエディポス的爭闘であつたのだ。

一世の美姬にして秀吉の愛妾たりし淀君は、兩加藤、福島、黑田、淺野、堀尾、藤堂等豐家直參の諸大名にとつて、母であつたに相違ない。が、その淀君の寵愛を擅まゝにしたものは石田治部と大野修理亮であつた。從つて當然のこと此の兩人は諸大名に對して、憎むべき父の役割を引受けねばならなかつた。いや單にこれら諸大名に限らず、東軍の總大將德川家康自身が、淀君に對してムッター・コムプレクスを持つてゐたらしい。和睦の第一條件に、淀君の關東下向が人質としての理屈付けの下に記された點をみても、それが推定されるではないか。だから好色漢家康の此の慾望が拒絕されるに及んで、反

動としての父殺し衝動が石田、大野に差向けられたことは自然である。また右に云つた和睦の條件中に、大阪城の壕を埋めること――の一條が取上げられてゐるのも――勿論、合理的理由もあることながら――吾々の興味を强く惹くではないか。

以上の理由から、蓋し關ヶ原の一戰は、エディポス葛藤の悲愴なクライマックスを示すものだと云へよう。誰か此の觀點から大阪落城を再解釋して描出してみる氣はないか。旨く行けばジャーナリズムに受けること、確かだと思ふが……。

×

色氣より慾氣と云ふ年配の連中が集ると、必ず損だの得だのと、金儲けの話が一座を占領する。而してみんな損した、損したと云ひ乍ら一向損をしたらしくもなく、如何にも樂し氣に熱つぽい口調で話てゐる。が、愉快相に喋舌つてゐるのも、別にちつとも不思議でない。これはその心理に於て、子供の泥んこいぢりと同じであるからだ。――竟り一種の猥談なのである。

精神分析學は肛門性感論に於て、金と性慾とがある場合密接に關聯するものであることを明かにした。いや此麼面倒な理窟は止さう。御不審なら金色夜叉の間貫一を諸君自ら分析的に考察して御覽になるといゝ。モルナールも確かその戲曲中に此の種の守錢奴を描いてゐたと思ふが、これらを詳細に分析鑑賞なさるなら、此の關係が充分お解りになるだらう。

だから自已分析を嚴密にしてみるなら、雜談として金錢譚が、多くの場合猥談に外ならぬことを、自ら了解出來る筈である。猥談のお嫌ひな方々よ、充分に御注意あれ！

泥んこ遊びの心理

木多　良

私は本誌第五號に「泥んこ遊びの心理」は弄糞の名殘ではなからうかと書いたが、會々同號に長崎氏が紹介されたA・S・ニイル著霜田靜志氏譯の「問題の子供」の第三章、性敎育に關する覺書に、左の記事が有る。

『排泄物に對する抑壓も、性に對する抑壓と同樣に恐る可きものである。事實、兒童に於ては此二つは一緒である。排泄管と性的器管とが一つになつて居ると云ふ自然の位置からして、兒童は此二つがいづれも汚穢であると云ふ風に考へて居

る。私の考へる所では、手淫に關聯せる羞恥は、主として排泄に關聯した羞恥から來て居る。私はどの子供も糞便に興味を持つてゐる事を知つて居る。をかしな話だが、吾々は時々便所の事を話して居ることがあるので、參觀人がびつくりして逃出してしまふ事がある。併しそれは實は大に必要な事なのである。十二歳の女兒。私の學校に來たが、この子供の生活に於ける唯一の興味は便所であつた。便所の鍵穴から中をのぞく事が、彼女の唯一の喜びであつた。私はそこですぐに地理の課業をやめて、便所の話に轉じた。彼女は大變に喜んだ。それから十日程たつて、便所の事に就いて言ひ出してみた。『「私もう便所の事は聞きたくないわ」と彼女はうるさゝうに云つた。「便所の事なんて、全く聞き倦きちやつたわ」と。

常に斯くの如くである。子供は興味の中に自由に生きて行くべきである。抑壓と沈默は單に興味を心の奧底に沈めるに過ぎない。勿論私は此の肛門に對する興味を、物質的なものに止め樣とは努める。糞便に對する興味に代る最も良き方法は、泥こねである。併し此處で注意すべきは、子供が泥こねに依つて何を爲しつゝ有るかと云ふ事である。子供が糞便に對する興味を忘れて、泥こね其物に幾年も興味を續ける事は有り得る事と思ふ私は以前或る新聞に論説を書いて、泥こねに就いての子供の權利を主張した事がある。すると有名なモンテッソリ主義の教育者が其に手紙を以て答へて、「私の經驗では、子供は泥こねより良いものを與へれば、決して泥こねをし樣とはしない」と、併し子供が泥に興味を集中した時は、泥以外何も良いものは有りはしない。モンテッソリ主義の教育を受けて居る子供も他の子供と別に變りはない。

清潔と云ふ事に對して早くから躾けて行く事が却つて糞便に對する興味を誘發するのである。現在私の所に居る一人の男の子は、糞尿及び之に類似のものにのみ興味を持つて居てその爲に學科に對して少しも興味を持たない。糞便に對する興味の消磨し去つた時丈が數學に進み得る時である。教師の仕事は簡單である。教師は兒童の興味が何處に存するかを見、兒童が其興味の中に生活し得る樣に助けてやればいい。』

人を馬鹿にして居る、どの子供も糞便に興味持つなんて、など云はないで、オフクロに訊いて御覽なさい。

此の親（漱石）にして此の子？　とは僕だけの言草かもしれないが、漱石未亡人の思出の中に左の樣な事が語られて居る。夏目さんのロンドン留學中の事である。

『何しろ手の無いところに、私がどつちかと云へば構はない方なので、赤ん坊を危くない樣に放つたらかしておいては仕事をして居ます。と、そのうちに赤ん坊が泣き出します。すると夜晝に關らず、すぐ窓が向ひ合はせになつてゐる部室に居る弟が、氣の毒がつて飛出して來て、あやしたり抱いて行つたりして御守りをしてくれました。其頃には弟の家内も居

りまして、随分二人に御守りをして貰つたものです。ところがさうして二人に御守りをして貰ふ時には、私も赤ん坊も大に幸なのですが、時々例外の情ない時が出て來ます。其時はお猿さんの樣に赤ちやんは簞笥の環に紐の先で結いつけられて居るのですが、其のうちに御馳走をたんまりして、おとなしくして居ると思へば、それをこねまはして遊んでゐたとやらなめたとやらで散々の有樣でした。』

赤ちやんはまる二つの次女恒子さんである。
いやオフクロ達に聞いてみると『お前赤ん坊だもの汚いも奇麗も分るもんかね、おしつこしといてぴちや〳〵たゝいて遊んでたよ』と大の男臺無しの、併し晴々しい樣な、妙な氣持である。フロイドの所謂『存分に乳を吸つた嬰兒が乳房を離し、兩頰を眞赤にし淨福な微笑を湛えて眠り入る』のを眺める其の氣持は、母親のみが知るものでせう。さあ其の間に御仕事をと一生懸命です。まだ御腹がいいのにむづかる。見ると、おむつが汚れて居る。取更へてやると又すや〳〵ねます。溜つた物が出る快さ！　だがそれが冷えて行く氣持の惡さ！　其は寢小便の思出で分る事と思ふ。

其の寢小便卒業頃の我等のホーマーで有り、イリアッドであつた立川文庫と云ふ豆本の、大阪陣の物語！　眞田十勇士に追はれる家康公と大久保彥左衞門、老の命から〳〵の逃亡、十勇士面々の小氣味よい先手々々の待伏せ！　實際あすこは手に汗握らせるが、情無い哉、御覽の通り德川の御世となつて、家光公の時の事である。或日、彥左老に『そちが今迄に一番嬉しく存じた事は何んじや』と頗る泰平な御下問である。老毎時にも似ず例の得意の『天正三年三州長篠鳶の巣文珠山初陣：：』を持出さない。『先君を御護り申して大阪陣の例の命からから、其の時の事、其の所にてほつと一息吐いて、野糞垂れ申したる其の嬉しさが何より』と、如何にも尻曲りの彥左老らしい答である。

フロイドは『幼兒時代には腸の障害を度々起し易いので其の爲に此の激しい亢奮が起る。それで腸の弱い子は神經質になると云はれるのだ』と云つて居る。『又其から推して行くと昔の醫學が人の性質や感情の說明に直腸の影響を重大視して居るのはさう馬鹿には出來ない』と云つて居る。さう云へば太つ腹、尻の穴の狹い奴、腹黑い、尻曲り、尻輕、立腹、腹の蟲が納る、など云ふ。小學校時代、先生が『昔の人は間違つて御腹に心が有ると思つたので、こんな事を云つたのです』と云はれて理科を習つた僕達は、昔の人の馬鹿さを祕に笑つた。

父親が小さい妹を寢かしつけてた時の子守歌に『ねんねん猫の尻に蟹が這ひ込んだ。引づり出したと思つたら

叉這ひ込んだ――』子供は何んと思つて眠るであらうか？ 妙な子守歌である。うんとかしいとか教へてする順しい子、さう云つた癖にいざ抱かれるとなか〳〵しない子、云ふが早いかして了ふ子、して了つてから教へる子、もぢ〳〵し乍ら教へない子。其等し様がない子に就いて、フロイドは『其はあの興奮を覺えた子供が排便を拒んで、其を得樣とする爲である。其が昂じると言ふ事を聞かない、氣難しき反抗と云ふ事になる』と云つてゐる。子供にとつては誰も知らぬ唯自分だけの快感である。尻曲りの子供にとつては門外不出の大事な物であつたかも知れない。ちやうど親にとつては自分が生んだ子供の樣なもの。うん子と云ふのは偶然でない。順しい子供は云ふ事を聞いて直に出す。フロイドは『其は自分の物としての贈物の意味である』と云つてゐる。漱石未亡人の思出の中に「御馳走」とある。さう云へばあの狐に化される話。肥たごの御風呂に入つて、馬糞の御饅頭食べて、本の葉つぱの御金と、草履の御土産貰つて歸る話。子供はくす〳〵笑つて面白がる。成程之より素晴しい御馳走は無いわけである。大人のくせに化されて可笑しいですよ。子供なんかは化かしはしない。

明い眞晝、パラ〳〵降る雨、きら〳〵青く光る空を狐の嫁入だ〳〵と子供ははやす。泥ん子遊びにこしらへた御團子や御餅、美味しさうに出來るが惜しい事には食べられない。這ひ〳〵の時分には炭噛つたり、壁土食べたり、煙管なめたりしたが、今はもう食べられない。

遊ぶ子達は盛んにうんこ、しつこと云ひ合ふ。愛稱だか蔑稱だか感動詞だか分らない樣に、ふんだんに使ふ。だが『何んですか、そんな事云ふとお口つねつて上げますよ』と叱られ〳〵して、云はなくなるが、大きくなつて、今度は泥ん子遊びでもする子供でも持つ樣になるとくそいま〳〵しいとか、くそつたれとか、「言海」にもない樣な事を云ふやうになる。

とにかく子供は親の云ふ事を聞かなくてはならないのだからつまらない。だが、あの泥ん子遊だけはあの紅葉の手の云ふ事をきいて、そしてあの懷しい感覺を思出さして呉れる。お母さんの膝の上に抱かれてお乳をおもちやにし乍らオッパイをたんのうした時の懷しさを。

神初めに天地を創り給へり。次にアダムの骨一本とつて、アダムを作り給へり。次に泥こねて、イヴを作り給へり。アダムとイヴ作りたる神の子泥こね給へり。洗濯は大變であらうけれども餘りがみ〳〵云はないで頂きたい。幼稚園は勿論、市の公園でも砂場が拵えて有る位だ。先日須田町の交叉點のコンクリートで鋪裝した三角地帶で、一枚はがれた一尺四方許りの地面の砂をいぢつ

て、二三人の子供が折から大分街燈が明くなつた下で額着き合せて遊んで居るのを見た。

門その他

今福由江

Ｓは隨分と注文の多い男である。會社が退けて家に歸る、門の開けて置き方が氣に喰はぬと云ふ。細君にお叱言である。「或る時はちやんと閉めて置き、或る時は半ば開き、或る時はさつと開け放つて置くと云ふ風に種々變化をつけて自分の歸りをむかへて呉れなければ困る」と云ふのだ。そして細君に對する批難の末にはこの文句を並べる事を忘れない。「家の奴はかう云ふ風に氣が利かない。物事に變化をつける技巧を知らない……」と甚だ象徴的な物の言ひ方をする。細君は細君で、「うちの人の氣が知れないわ。門の開けて置き方まで氣がまわるものですか。」さうして犬も喰はない夫婦喧嘩である。で、私はそれ等の文句なり喧嘩なりを聞いてゐて心ひそかに思ふ。性愛技巧の變化を教へないのは夫君の罪であるし、夫の要求の深いところを知り得ないのは夫人の不幸であると。然し考へて見ればＳ自身何のために門の開け方に變化をつけさせ度がるのか氣が付いてゐないのだ。

救助願望

Ｋ夫人は有閑マダム型の人である。若い男達を身近に置いていつも問題を起す事に興味を持つてゐるらしい。そして、「どうして青年達に私がこんなに好かれるのかわからない」と嘆くのだ。だが、私はこれを嘆くとは云ひ度くない。明らかに見せ付けであるやうに解釋する。彼女は樂しげに嘆くのである。『此の間も主人のいとこが來た時、不用意に、家庭生活が面白くないから別れやうかと思ふと云つたら、お姉さん。（この場合これはお母さんとも云へる程の深長な意味を持つてゐる）それ程あなたが不幸なら僕は何年でも待つから僕のところへ來て下さいつて云はれて驚いちやつた。それで又、私の惱みが出來てしまつて、本當に私も馬鹿な事を云つたものね』、そして溜息をしながら、『私つて女もよつぽど馬鹿なのね』と云つたものである。そんな場合、一體普通の人は何と應答をするのであらうか。私は思はず、『あなたは馬鹿ぢやないわ』と云つてこの詠嘆詩人的な友を不

機嫌にさせてしまつた。思ふに私の語氣が、あまり現實的に皮肉に響いたものであらう。一體青年の救助願望を刺戟する事の效果は本誌に屢々大槻氏が書かれてゐる。見渡すところ青年と間違ひを起す人妻はどうやら無意識的にその技巧を心得てゐるらしい節がある。青年方よ、年上の人妻から家庭上のハンモンを打明けられた時には一應は吟味の必要がある事を力說するのに反應（抵抗）を起さないで下さい。同時に年長の女（殊に人妻）に甘えたがる自分の心にも一應の吟味を加へられむ事を希望します。

鐵瓶

鐵びんをきれいに磨いて何時も松風の音をさせて置かないと機嫌の惡い主人がゐる。これも勤めから歸つて來て長火鉢の上で、鐵びんがチン／＼となつてゐないと甚だ穩かでない。勤めの時間中でも、又うちの奴、あの鐵びんを冷たくしてゐるのではないかと思ふと、矢もたても耐らなくなつてお晝の休みにまで家に顏を出して留守居の細君を脅かす。『安月給取りの家で、朝から晩まで火鉢に火を埋けて誰ものまないお湯を沸してゐるのはぜいたくだ』と云つて經濟上のたてまへから細君は憤慨するのだ。だが、まアさう憤慨するにも當らない。もし、この人が鐵びんをあたゝめたがるクセが無かつたら、もつと別の形で、もつと現實生活に不適當な形で、現はれるかも知れないのだ。止むに止まれぬ象徵行爲を强ひて抑壓したとても何か他に代りになるやうなクセでも見付けなければ、當人は（そのクセの原因を自覺しない限り）浮ぶ瀨がない。細君が不經濟だと口を酸くして云つたとしてもそれは夫にとつては取るに足りない口實だとしか受取れないであらう。何故ならば彼にとつては鐵びんを何時も沸してゐなければ氣がすまないと云ふ熱情は殆ど何ものにも換へ難い程の或る意味を持つてゐるのだから。本誌十月號の講座中でフリウゲルは云つてゐる。

『その暖氣と火の觀念は、時と所との別を問はずいつでも愛、情熱、及び肉慾（セクシユアリテイ）に結びつけられてゐるやうである。それは次のやうな共通の表現を見ればわかる。例へば「熱くなつてゐる」、「暖かい抱擁」、「熱烈な情愛」、「あつ物（ホトスタフ）」、「燃ゆる思ひ」等（これを「冷淡な女」だとか「冷たいあしらひ」だとか云ふのに比較してみるがよい）、また原始人の間においては（摩擦によつて）火を宗教的に創造してゐるし、現代のある種の社會に於いても點燈の式を營んでゐるし、すべて多くの儀式に於いて火が（熱が）一役をつとめてゐるのを見れば分る。』と。

二人の夢

田内長太郎

夢といふものは不思議なものだ、といふ考の起きる年齢は、人によつてそれぞれ違ふであらうが、――また、中にはそこにさう深い考も起さないで過ぎてしまふ人もあるであらうが、――私にその考の起きたのは、たしか十一二歲の頃かと憶える。

私は早速、三つばかり年長の從妹にむかつて、その夢とは何ぞやの疑問をもち出した。子供の頃は、相手が大人ならなほさら、自分より一つでも二つでも年長者だと自分に解らないことは何でもわかつてゐて、こちらのどんな疑問でも、きれいさつぱり解いてくれるものと思ひこんでゐる。

すると從姉は私の質問に、「さア……」と一つ、しさいげに小首を傾けておいて、「夢は五臟の疲れとも、五臟のわづらひとも言ふが、どちらが本當かしら――」と答へてくれた。

從姉は劇場のすぐ隣に生ひ育つて、そこの樂屋口からしよつちゆう芝居を見に行つたり、近くのさかり場にかかる見世物やうかれ節などにも頻繁に出入してゐたせゐで、何時か耳學問で、そんなむづかしいことを知つてゐた。そして、その時の彼女には、夢はその五臟の「疲れ」か「わづらひ」かといふ點が、大きな問題であるらしかつた。

私にしても、「夢は五臟のわづらひ」といふ文句は、それまで小耳にはさんでゐたが、肝腎のその「五臟」がどんなものであるかが私にはわかつてゐなかつたので、――これは恐らく從姉にもわかつてゐなかつたであらう――そこで、夢の問題を解くには、その五臟の何たるかを知るのが先決問題だといふ風に、その時私は考へたと記憶する。それに何だかその時の私の疑問の焦點と、さうして從姉の問題としてゐるところとが、大分かけ離れてゐるやうな氣もされて、それ以上私は理窟をコネなかつたやうに記憶する。

そんなことから、折角のさうした私の幼少時代の「夢とは何か」の問題も、そのうちに忘れられてしまつたのである。

『ゆめ』の語源

長崎文治

邦語の『ゆめ』といふ言葉の語源的解釋は、『夜目』の轉化であるといふ者と、『寢目（イメ）』又は『寢見（イミ）』の轉化であると見る人とがある。勿論この二つの立場は全然異るものではなく、同一意味に就いて、異つた字義を當てはめたのみに過ぎない。夢は睡眠に依つて見られるものであるから『寢目（イメ）』とあて、又は『寢見（イミ）』と云つたといふ解釋は、それが夜見るものであるから、『夜目』といふのだと、原始心理から解釋するのも不當では無い、そうすると、ゆめの語源的解釋は、『寢目（イメ）』『寢見（イミ）』『夜目（ヨメ）』となるが、更に『寢見』に對して、『夜見』といふ解釋も當然あてはめられる筈である。所がこゝに問題となつて來るのは、『い』又は『よ』が『ゆ』と轉化して行つた過程である。一體『ゆ』といふ發音は、「ある信仰的概念を表現する語で、通例、齋の字をあてゝゐるが、其の含蓄する意味は、神聖、清淨、齋戒等で、ツミ、ケガの反對を表示する、イと轉じ、イミ（忌）の形に於て多く用ひられる」（松岡靜雄氏著、「日本古語大辭典」から『い』と『ゆ』の轉化は容易であらうし、又、夢の現象が、古代に於ては極めて神聖なものとして重要視されてゐた點からしても、その音の齎らす意味が了解されるであらう。唯『い』と『ゆ』の前後關係が問題になる、萬葉集などには『いめ』と云つてゐ、現代語では『ゆめ』と云はれてゐるが、『ゆ』が『い』に轉じたのだといふ語源的解釋からは逆になる、この間の關係は更に檢討さるべき餘地がある。

次に、『ゆめ』が『夜目』であり『夜見』であるといふ解釋からは、『黄泉（ヨミ）』といふ言葉との同類性が問題となる。『黄泉』は『夜見（ヨミ）』であるといふ語源的解釋は、少くとも、我邦では、他界信仰の發生と夢が密接の關係にあることを現はしてゐるものではあるまいか。否、多くの民族の靈魂觀念の發生が、夢の現象に示唆されてゐるところからすると、これは當然であらう。我邦の黄泉が、天上でなく地界を意味してゐること、多くの民族の地界が夜の國と考へられてゐることからして、夢の内容が、黄泉神話を形づくつたのではないかと考へられる。この立場からして伊弉諾、伊弉冉尊の黄泉（ヨミ）に於けるいきさつを、夢の内容として解釋して行つたなら、更に妥當

的な説明がつくのではあるまいか、こゝにも研究の餘地が殘されてゐる。

英語の dream, ドイツ語の Traum はサンスクリットの druh から來てゐるらしいが、druh には「損ふ」とか「害する」とか云ふ意味があり、dream の古語（アングロサクソン語）drêam は joy, gradness の意味だと云ふから、まるで正反對である。併しドイツ語の Traum は trügen（欺く）の意だと云ふから、なるほど「損ふ」と「喜び」との間の連環が發見されるわけだ。我々は夢に於いて我々自身を欺くことに依つて喜びを得てゐるが、それは結局現實的には我々は損ふことであらう。

西洋の「ユメ」の語源

岩倉具實

英語の dream がドイツ語の Traum と關係があることは常識でも解りさうだ。オランダ語の droom. デンマーク語、スウェーデン語の drōm 等、總てゲルマン語系に屬する國語では同じ系統を引いてゐる。古代英語には drêam と云ふことばがあつて「よろこび」を意味するが近代英語の dream と直接關係があるとは思はれない。寧ろ此の系統の語根は「だます、だまかす」と云ふ意味を持つてゐると思はれる。例へばドイツ語の trügen などと同じ語根に屬する樣だ。卽ち dream は illusion である。

イタリア語の sogno. フランス語の songe 等で解るように、ローマンス語系に屬する國語に於てはラテン語の somnium と關係がある。もつともフランス語には songe の外に rêve がある。これは動詞 rêver の名詞形で、rêver の古い形は resver だ。resver の語源は明かでない。サンスクリットの svapnah と關係させるのは少し無理だらう。

さて songe も songer（動詞）の名詞形である。これはラテン語の somniare（動詞）から來てゐて、次の樣な音聲の變遷を經たものであらう。

somniare→somnjar→somjier→sonjier→songier→songer

ところで、somniare の名詞形が somnium で、これは somnus (sleep) から出てゐる。これはラテン語の deep sleep を意味する sopor と同じ語根 sop に屬する。sop はインド・ヨーロッパ語族に共通の語根で、サンスクリット svapnah ギリシヤ語 ὕπνος 等を始め總て

これに屬する。つまりこれらの國語に於ては「ユメ」は「ネムリ」と同語根を有する譯だ。

	sleep	dream
サンスクリット	svapnah	svapnyam
ギリシヤ	ὕπνος	ἐνύπνιον
ラテン	somnus(sopor)	somnium.

即ち「ユメ」は「ネムリ」の派生語に過ぎない。

尙ギリシヤ語では Φαντάσμα を「ユメ」の意味に使ふこともある。もとの意味は vision である。英語の phantasma, phantasm, イタリア語の fantasma, フランス語の fantôme は皆ギリシヤ語の φαντασμα で、「ユメ」「マボロシ」から出て「幽靈」の意味にも使はれる。

（完）

（九九頁末から續く）

現代の社會狀態に於て、殊に吾國の現狀では、その兒童教育に充分ニイル式であれと望むのは無理かも知れない。經濟的にも、兒童の家庭に於ても、もつと多く考慮すべき事柄があるからだ。だが氏の此の誤りは精神分析學への研究不足のためである。お太鼓でもなんでもない。ニイル式教育の妙諦はこれをおいては眞に極み得ないのだ。ニイル式教育の實際的運用に當つて、氏にこの混亂があるのも竟りはこの故である。

だが併し氏は最初から、精神分析學に就いてはあまりよく研究してゐないと斷つて居るのだから、記者がいまこれを云ふのは見當違ひであるかも知れない。或は記者が氏に對して始から父（ファアザー）コムプレクスを抱いて出懸けた爲に、此麼餘計な憎まれ口が叩きたくなつたのかも知れないのだ。それ故、兎も角もニイルの教育を髓として困難多い兒童教育に盡瘁せられる氏の眞劍さに記者は心から敬意を表して、此の探訪記事らしくない一文の筆を擱く。（寫眞は操作中の、子供の家の生徒たち）

講座

夢の分析法

下山善高

精神分析が唱へられて間もない頃には、學界では夢は凡て無意識裡の心の葛藤が象徴として出たもののやうに考へて居たが、近來では象徴的な卽ち分析出來るもの以外の夢が存在して居るのではなからうかといふ疑問が生じて來た。又、睡眠中に於ける心の働きは各人により又その時々に、より甚しく異つて居り、從つて夢の種類は各種各樣である。分析學者に有用な象徴的な夢は大體或る種類のものに共通する象徴に過ぎない。そこにはもつと深い層の夢がある筈である。それ等の夢に於いては、多少奇異な不明な象徴を以てしては眞相を闡明し難いのである。然し玆には平明に分析し得る種類の夢に就いてのみ述べることにしよう。

睡眠中には、好ましからぬ觀念が意識に上らうとするのを防いでゐる抑壓力は可成り弛緩して了ふ。從つて正常に、上品に、自分の人格と矛盾しないやうに事物を感知する常識は弱くなり、覺醒時には我々が擯斥する如き思考が影像となつて心の中を過ぎ行く。然し乍ら、催眠狀態に於いても道德觀念がやはり行爲を律し、又は或る程度まで之れを抑制して居るのと同樣に、睡眠中に於いても好ましからぬ、又は拒否すべき觀念は象徴として、又寓話としてのみ表出せしむるやうに作用する何物かがやはり存してゐるのである。然しこの「何物」かが如何なるものであるかについては、未だ誰人も適當な説明を爲してゐない。フロイドは之れを人格化して精神內の檢閲(endopsychic censor)、卽ち魂の內部に存在する裁判官と名付けてゐるが、然し何故に無意識的の心が意識的な心と交通しようとするのか、然も之が何故本來の目的を無視し放棄するやうな方法で爲されるのか、それは我々に了解し難いのである。にも拘らず、この或る物は時折事實として現れるのである。恰も寓話が日常生活からとつた物語であり乍ら隱れた意味を含む如く、夢は毎日の出來事を素材として織出されるものではあるが、而も魂の底に潜在する問題をも象徴してゐるのである。

夢を分析する方法を簡單に言へば、以下のやうである。

先づ患者が自分の夢を物語り、次に醫者はその夢の中で自然に聯想される人や物や事件を患者に供述させる。之によると大多數の夢に於いて聯想は前日の些細な、それ程重要でもない事柄から始まり過去の遙かに重要な事件へと及んで行き、漸次に患者心中の大小の問題を引き出して來るのである。今之を術語に依つて說明すれば、夢を直接生起せしめる事態又は事情は顯在內容（manifest content）と呼ばれ、聯想に依つて引出される、より深い、より重要な事態は潜在內容（latent content）と呼ばれる。尙ほ兩者の更に深いところには通常もつと一般的な非人格的の象徵性が存在するが、之に關しては尙ほ別の機會に說くことにする。で、取敢ず上述の諸點を簡單な例を以て說明して見よう。

今强度の神經病に惱んでゐる一人の男が醫師に向つて「私は昨晩一匹の狂犬に追つかけられた夢を見ました。」と言つたとすると、醫師は患者をして狂犬について聯想せしめて、次のやうに分析して行くのである。

狂犬――

（a）私は犬が嫌ひだ。昨日、私はS君がテリヤを伴れて通るのを見た。そのテリヤは、私に吠へついた。

（b）私の子供の時、父はいつも犬を飼つてゐた。私は父がこわかつた。暫くしてから父は變になつてほり込まれた。（卽ち精神錯亂の廉で腦病院に入れられたのである。）私は時折自分も父と同じ道を辿つて居るやうな氣がする。

（c）一匹の狂犬。私の心の中には、鎖を離れやうと焦つてゐる狂犬のやうなものがある。若しそれが自由になれば、私はもう駄目だ。

右の內、（a）は夢の顯在內容を說明し、（b）は潜在內容を說明してゐる。然るに（c）は、無抗束なリビドー又は本能力と云ふ基本的概念を表明して居る。玆に注目すべきは、（a）（b）は共に患者の個人的聯想の結果であるに對し、（c）は誰でもが使用するやうな、一般的な象徵の一端であることである。卽ち夢では拘束し難きリビドーは最も普通には動物の形で表現される。例へば獅子、虎、或は怒れる牡牛などがそれの普通の象徵となつてゐる。

上述の夢から明に分ることは、この男の神經症は、父の精神錯亂が自分にも遺傳するのではなからうかといふ、抑壓された恐怖が明かにその因を爲してゐることだ。（兄弟の癲癇が感染しはせぬかと心配して、遂に氣狂になつた某氏の場合と比較されたい。）

前例は極めて簡單な場合であつて、之を以つて一般の

場合とすることはできぬが、併し子供とか無教育な人には明瞭な、あまり複雑でない夢が多いのが大體の傾向である。

夢の象徴度が更に込入つたものになつて來るのは、夢の中の重要な人物には物象が自我の一面を意味する事實に由る。かくて前例では、狂犬にはいろ〳〵な意味があるにもせよ、患者自身の動物的性質を示してゐる。次の一例は、これらの諸點を一層明かにするであらう。

M夫人は教養ある婦人で、分析期間中に次のやうな夢を見た。

「私は高い建物の一番上にある室に入つてゐたが、私の昇つて來た階段は私の登つた後で崩壊して了つた。私はもう階下に降りられぬのではないかと思つた。するとやがて窓が開いて、急に誰か粗暴な顔付の併し親切さうな男が飛込んで來て、無作法にも私を提げて安全な場所に飛んで行つて了つた。この時、私は救はれて良かつたと思つたが、見知らぬ男に無作法な取扱をされた事に腹が立つてたまらなかつた。」

顯在内容。前日私は急傾斜な階段の達してゐる屋根裏の室に閉ぢ込められてゐた。

潜在内容。あの無禮な男は精神分析者であつた。彼のとつた手段は無作法であり、突然であつたので呆れた。上の室は生活の實際を無視した空想に依つて私が這入り込んだ難澁な位置である。私は空中高く位して居て、下に降りることがあるだらうかと思つてゐる。さう云ふところから降ろすために普通に用ふる階段はもうなくなつてゐる。窓は開いてゐるので外に出る一路はある。分析者は窓から飛込んで私を救ふのである。即ち彼のとつた行動の手段は實に變つてをり、誰も豫期しない所である。私は救はれたのであるが腹が立つた。彼のやり方は成功したのであるが、然し私の弱點を突かれたことは口惜しい。

一般的象徴。無禮な男はM夫人のより實際的な常識的な一面であるが、本人はこの性質を輕蔑してゐる。併しこの性質に頼れば、彼女は安全である。夢の本人が幽閉されたあの高所の室は、現實から隔離されて居ること、精神錯亂の恐怖を意味する極めて一般的な夢の象徴である。

上例の夢は既に説明したところ以外に、甚だ明かに性と權力意志とを表はしてゐる。事實、患者は非常に發達した本能力を持つてゐたが、非實際的な理想主義のために性の原始的方面を嫌惡するやうになつた。これ等二つの事實は前述の夢から容易に歸納することが出來るのである。

フロイドは初期の論文中では、凡ての夢が、夢の本人の何か滿たされざる願望を示してゐることを述べて居り、その後彼は說を發展させて更に廣汎な分類を試みてゐるけれ共、その中で願望充足の夢が最も通例の型であることに變りはない。本誌第四號、第一夢の研究號に岩倉氏の譯されたステーケル論文中の少年ヨゼフの穀物の夢などは、最も判然とした願望充足の夢である。

他の通例の型は、無意識裡の葛藤を表す夢である。次の例は、非常に想像の豐かな或る若い婦人の葛藤の夢であるが、內向性と外向性とが競合つてゐる狀態が良く表れてゐる。當時その婦人は屋內の世界で、活潑な滿足の行く空想裡に暮して居り危險な內向狀態にあつたが、自分でも己が環境の危險をば意識してゐた。リビドーの內面はこの時旣に婦人の心內に變態徵候を起し、殊に盜癖が釀成されてゐた。この性癖は、幼兒時代に或る些少な性的衝動を受け、性に對する非常に强い好奇心を起した事によつて育まれて行つた。大抵の場合にさうであるやうに、彼女が盜んだものもまことにつまらないもので、誰もまさかこんなものを盜むだらうとは思ひも寄らないやうなものである。然し成人になつた場合にはこの盜癖は重大性を帶びて來、患者の抑壓のために盜みが全く健忘せられ、又殆ど夢遊病の狀態で竊盜を働くやうにさへなつて來たのである。併しながら長く分析してゐる內に古い記憶が漸次に再生して來た。數週乃至は數ヶ月を隔てゝ一つづゝ事件が想起されて來た。

分析中に婦人は、次のやうな夢を見た。

「自分はナポレオンであると思つた。部下は私が一戰を交へる事を願つた。私は進軍してゐたが、その途中で之れ以上進みたくないと思つた。で、私は天幕に歸つた。天幕の內部には繪畫、掛物、其の他樣々の美しい裝飾が施されてゐた。この天幕は私の專用であつたのだから、中には自分以外誰も居なかつた。外に居る家來共は私が外に出て戰線に向ふことを切望してゐた。之は全軍の希望であつた。數千の軍隊は遠くに廣がつてゐた。然し私が進軍不許可を宣すると、もうそれきりであつた。彼等は諦めるより仕方がなかつた。」

私はナポレオンであつた。この變態的內向性は知識、特に性的事項に關する知識を求めんとする慾望のために生じた。彼女にとつては權力とは知識であつた。それ故「我は全能なり」と夢みてゐるのである。

部下は私が一戰を交へることを願つた。其他。即ち彼女の幸福を思ふ人には彼女の病氣が全快することを望んだ。これは「一戰」であらう。何となれば、現實に直面して何等かの眞實を受容れることは非常に不快であり、

癪に障ることであるやうな狀態になつてゐたからである。然し乍ら彼女は假令「ナポレオン」になつてゐても自分の望みもしない戰亂を惹起す必要を認めなかつたので、部下の願を斥けたのである。

私は天幕に歸つた。等。彼女は戰爭を拒否する決心をした。故に空想の世界、卽ち彼女の不幸な祕密の藏されてゐる私室、卽ちすばらしい想像力で豐富になつてゐる豪華な場所に退却したのである。其處は掛物に包まれ、繪畫で充されてゐたが、繪畫とは實在物ではなく、實在物の代表物に過ぎない。

全軍は私の出陣を希望した。數千の軍は遠くに廣がつて居た。之は二重象徵である。外界の全刺激、卽ち社會的環境のもつ凡ゆる力が、彼女の反社會的行爲を阻止せしめようとしたのである。又も一つはリビドーの刺激が凡て外部に抑出された爲、堰かれてゐた流れは堤を越えて汎濫せんとしたのである。

然し私が進軍の不許可を宣すると、もうそれきりであつた。卽ち彼女は努力すまいと決心したのである。彼女は「ナポレオン」であつたから、誰人と雖もこの決心を覆すことは出來なかつた。かうなつては彼女の精神分析も駄目である。之れ以上分析を進めることは出來ない。

願望充足や葛藤の夢の型の外に、普通、分析の終末に於いて現れる、所謂「生れ變り」(rebirth)の夢の、第三の型がある。勿論この種の夢は分析とは獨立しても見ることがある。葛藤が分析以外の方法で解決されたやうな場合にも見るけれども、さう云ふ場合の嚴密な證據が實際に存在してゐないのである。昇華(snblimation)又は再生(regeneration)を示す夢の適例は、今迄述べて來た若い婦人が精神分析を完結した場合に見たが、それは次のやうであつた。

「私は教會に入つて何時も掛ける南側の椅子に腰かけて夕の祈をしてゐた。今讚美歌が熱心に唱はれてゐた。合唱隊は全員揃ひ、大人も子供もみな見知つてゐる人々ばかりであつた。南側にゐる人々は「祝福、名譽、光輝、偉力」なる讚美歌を歌つてゐた。然し反對側の人々は全く歌つてゐなかつた。その時私は祭壇のそれらの人々の側の蠟燭に未だ燈がつけてないのに氣がついたが、南側の方の蠟燭には皆ついてゐた。で、私は灯をつけに行つた。一つ一つ眞中の列からつけ始め、次に上の列につけて行き、最後に下部の列につけた。そして自分の席に歸ると、合唱隊が繰出し始めた。たゞ出る時には二人宛組まずに、一人々々前後に連り合つて一列になつて教會を出た。

分析が後半期の段階に入ると大抵の場合さうだが、こ

の患者も夢を、すぐ次のやうに解釋することが出來た。

即ち——

「北側及び南側は私の二つの部分である。その一方はどうしても生命の讃美歌に參加し得なかつたのである。唱歌を歌ふことができず、灯もつけてなかつた。私はあゝ云ふ風に蠟燭をつけたが、それは私があの順序で思ひついたからである。即ち最初に中央をつけたのは一生涯の中頃に起つた竊盜を最初に想起したことを表示し、その次に近年を想起し、最後に幼時の事を想起した。又合唱隊が一列をなして出て行つたのは、現在の自分は統一されてゐる爲である。即ち玆で私の二つの部分が結合したのである。」

最近實驗的に、有名な精神療法家たちが同一の夢を分析してその結果を比較したことがあるが、これら二つは甚しく相違してゐた。或る評論家はこの事實を捕へ、夢の分析が如何に實際と添はぬものであるかを證するものだと評してゐるが、そんなことを云ふならば、同一寓話に對しても説教者や註釋者によつて異る解釋が下されるから、何等現實的意義を持たないものだとも云へるわけになる。夢は或る一定の鍵によつて判ぜられる暗號ではなく、數多の意味を包藏する寓意的の影像である。性的又は創造的本能が主要な本能だと感じてゐる分析者は、性的象徴と見るところを、外の分析者は力の象徴だと考へるかも知れないが、これら二本能は一つの力を夫々異つた方面から見たに過ぎないのだから、どちらか一方に片付けろと云ふは不自然である。又或る分析者は主に夢の潜在内容をのみ問題にし、又他の分析者は夢の一般的或は民族的意義を重視する。で、恰も畫家のみが自作繪畫のもつ眞の意味を宣明することができる樣に、患者が無意識裡に構成した繪畫（即ち夢）を説明すべき聯想はたゞその患者のみがそれを供給し得るものである。分析者は試みに夢の解釋を下すことが出來るだけである。これを受け容れるか容れないかは患者の勝手である。分析の眞僞は、醫師の確信には存せず、患者の納得に存する。

精神分析語彙（六）

一、催眠的ヒステリー——ブロイヤーはヒステリーを催眠類似狀態、即ち消極的な意識的分裂狀態と見、フロイドは積極的な人格的な抑壓（檢閲）作用を豫想して「防禦神經症」と名付ける。

一、錯覺——Illusion の譯。客觀的なものに本人の願望が伴ふ場合。全然主觀的な場合を幻覺 Halluzination と呼ぶ。

一、サディスムス——Sadismus, 虐待性、加虐性など譯す。從

來の性慾學に於いては、これは性對象を虐待することに依り亢奮する一種の變態性となつてをつたが、精神分析學に於いては、意味がもつと廣くなり、一切の攻撃慾、破壞慾を意味し、それが自己に向つてはマゾヒスムスと合し、死の本能をさへ意味することゝなつた。

一、罪惡意識――萬人は、殊に神經症患者は無意識的な罪惡感を持つてゐる。これは宗教の所謂原罪に該當するもので、恐らくエディポス・コムプレクスに起源するものであらうとされる。無意識の罪惡感であるから、現實の行動には關係なく、全然空想に依つてさへ生じ得ることが明白になつてゐる。

一、仕荒し――Wilde Analyse の事。精神分析の知識や經驗に乏しき人の出鱈目分析。かゝる仕荒しは個々の患者のみならず、分析學そのものを損ふ。

一、思春期――斯學に依れば、性的開花は二度ある。第一期は三四歳に於いて、第二期は十六、七歳に於いて。故に思春期は第二期の性的開花であつて、この期に於いて性感は性殖力と合致し、部分本能は性器に統裁せらるゝことゝなる。

一、思想（念慮）の全能――無意識のナルチスムスは人々をして、凡その人の思ふことは總て直ちに現實に行はれると妄信せしめる。

一、失語症――言語に對する感覺を喪失すること。

一、嫉妬――同一對象に向つて二人の愛が注がれる時、この二人が互に感ずる競爭の焦燥を云ふ。但し嫉妬に於ける競爭感は常態的、健康的であつて、なほ病理的、變態的なものに、投出的嫉妬と、妄想的嫉妬とがある。

一、死の本能――死の本能は生の本能（エロス、結合の本能）に對立するものと見做される。死の本能は攻撃本能の自己に返つたもの、即ちマゾヒスムスと合一すると見做される。然るにまたサド・マスヒスムスと云ふ語に於いて兩本能のアムビファレンツが認められる如く、生本能・即・死の本能の説が支持される。我々が生を大切に保存せんとするのは、自然に依つて與へられた一定の生のコースを完全に辿つて、窮極の死に到達せんとするために外ならぬ。我々が死を恐れるのは、自然に與へられるたる一定のコース（生）を完全に辿得ざらむことを恐るゝに過ぎない。その意味に於いて生の目的は死にあり、死の目的は生にある。即ち生死一如である。この説は西洋の分析學者の間にも初め程は反對者が多かつたやうであるが、只今では殆ど一般的に容認されてゐるやうである。佛教の寂滅爲樂の思想に教育された我々東洋人としては、この思想は素直に受容れられる。

一、嗜糞（弄糞）――一切の神經症者にして弄糞の傾向なきものはないとフロイドは云ふ。本誌木多氏論參照。

一、社會――精神分析的に云へば、人間が相互にリビドーを備給（纏綿）し合ひ、エロスに依り結合し合つてゐる狀態を云ふ。（勿論そこにアムビヴァレンツは働いてゐるが――）

（未完）

探訪

霜田氏の『子供の家』(三)

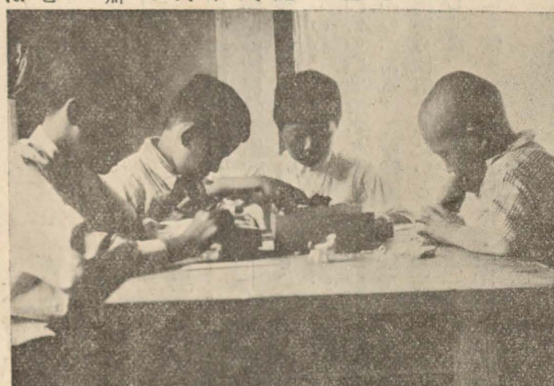
西荻窪驛から三四丁に小さな松林があつて、子供の家はその前にあるのだ。經營者は吾國に於ける唯一のニイル式兒童教育家として、またニイルの著書の飜譯者として知られた霜田靜志氏である。屋棟は和洋折衷で、道にむいた部分だけ子供の好き相な、急勾配の屋根を有つた華奢な造りであるのに眼を止め乍ら、記者は無遠慮に扉(ドアー)を排して玄關に立つ。内部は鳥渡變つた造作である。式臺から唐突り三尺幅の板敷が、無愛想にぬうつと二間餘りを奥へ伸びてゐるのだ。突當りの襖の向うが子供の製作場らしい。間歇的に疳高い嬉聲が洩れてくる。記者が來意を通じると早速、畫家服(ブルウズ)を纒つた氏の痩軀がみえた。眼許、口許の感じが甚だ攻撃的(サディスティッシュ)である。が、最初は畫家を志して美校に學ばれたと云ふだけあつて、在來の教育者型とは異る慧敏と柔和な人馴つこさとが、その言動の端に滲んでゐる。年配は既に不惑を過ぎ、これからぢつくり實のある仕事をするんだと云ふ強い氣魄が、刹那的に記者の心を臆病にさせた。記者は直ぐ應接室に招ぜられた。此處も洋式で疊敷六疊餘り、扉の右手の壁際に大きなピアノが、手入の届いた艶をみせて置かれてある。二つの大きな書棚からは本がはみ出してをり、籐製のテーブルセット一組みと、長椅子一脚の配置に、肩の凝るやうな狹まさを感じて記者は身を竦める。挨拶が濟むと、記者は先づ當り障りのない話から始めた。實を云ふと記者は、たゞニイル式の教育を實際に見聞出來る期待だけを抱いで、何の計畫(プラン)も樹てずに出懸けてきたのだ。從つて子供から切離された氏と二人きりの差向ひに、内心尠らず閉口したのである。

「目下の處子供の家の仕事は土曜と日曜だけで、主に藝術的な操作――畫と手工と音樂をやらせてゐます。年齢は八才位から十五六才までゞ、現在十五人程預つて居ります」と氏は云ふ。だが、子供が來てゐると云ふのに、家の中が少し靜かすぎる。折々それは賑かな笑聲もたつが、ニイルの所謂問題の子供を念頭においてきた記者には、多少拍子抜けがする程靜かな周圍である。記者は些か疑念を起した。が、それを口に出す前に訪客があつた。氣輕に立たれた氏は、軈て妙齢の婦人を伴つて來られ記者に紹介せられた。ピアノの先生であつた。茶色の洋服をきつちり身につけて、モダンな姿の方である、勿論斷髪！　丁度ルイズ・ブルックスをもう少し細造りにして可愛らしさを増した、と云つた風の感じである。ピアノの課目(レッスン)が始つたのを機に、記者は製作場の一覽を乞ふた。此處は和室で八疊敷、中央に裁縫臺のやうな長い板が二筋に列べてあり、庭に面した縁側

にも卓(デーブル)が四つ許りある。六人程十才前後の子供が、各自氣儘に位置をとつて、畫や手工をしてゐる。中に一人女の子もゐる。みんな穩和しくて悧口さうな子許りだ。役目柄、記者が周圍に詮鑿の視線を投げたとき、緣鼻の壁に貼られた偉人の修養言（多分雜誌の附錄らしい）が眼に入つた。これは少し意外であつた。何故なら氏の奉ぜられるニイルは、道德的な訓戒を絕對に否定してゐるからだ。大人の作つた道德は子供を神經症にする、子供は獨自的に道德を作つて行くとニイルは云つてゐるのにと、記者は失望して呟いた。が、氏は云はれる。「私は自由主義者(リベラリスト)です」と。で、理想主義者としての小原國芳氏と御自身を比較せられ、またニイル式教育に就ても種々語られた。

「子供の性教育に就ての御持論は？」と記者は訊ねたが、子供の前であつた故か、氏は明答を避けられた。外國に比較して日本の家庭では餘り抑壓がないから、その點其麼に心配は要らないでせうと氏は云ふ。でも、新聞によく出てますが、と記者は抗辯したが、

「先日始めて讀賣新聞に、其麼子供のことが出ましたが、極く稀れですね」と、氏は何處迄も樂觀的である。



子供の抑壓された無意識衝動を創作に據つて昇華(スブリミーレン)する、と云ふのが氏の教育法の眼目である。これは結構である。それにしてもニイル式教育家として自他ともに許す氏にして、兒童の性的方面に對する此の樂觀主義はいさゝか意外である。氏の御說によれば日本の子供は比較的性に就て抑壓をうけてゐないから正常だと云ふことになる。が、果して事實であらうか。每日の新聞欄を彩る少年の竊盜、放火は何を示してゐるのか。けれども子供の頻繁な質問に答へてゐられる氏の忙しさと、意氣込みを逸された張合拔けとの感じが、記者の心を落着かなくしたらしい。で、不滿乍ら記者の疑問は後日にこれを讓り、失禮することに肚を決めた。

それにしても記者は最後に、一言氏の御熟考を煩はしたい思つて云ひ添へる。

成程自由主義者だと揚言せられる氏は、子供を正常に育上げたいとの眞摯な熱を以て努力してゐられる。併し氏は尠くともニイルの主張する教育法の最も大切な部分を看過されてゐる御樣子である。氏の不用意にせられた偉人の修養言の掲示と、性教育上の樂觀主義とがこれを物語つてゐる。（九〇頁下段へ）

「イマゴー」十九巻第三册

『國際精神分析學雑誌』が純粋に精神分析學的及び治療法研究の發表機關であるならば、『イマゴー』誌は『精神分析學的心理學、並びにその心理學の限界問題及び應用のための雑誌』と小見出しにあつて、その機能が明にされてゐる。創刊以來廿年に垂んとする。『分析運動』誌は比較的通俗の雑誌であり、なほその外に『精神分析的教育雑誌』と云ふのがある。この雑誌はまだ紹介したことはなかつたが、來年度からは紹介したいと思つてゐる。フロイドが監修する雑誌としては、以上四種がある。なほ、アードラーやステーケルの派にも堂々たる雑誌がある。亦、旺んなりと云ふべしである。

『イマゴー』誌第十九巻第三册の內容を次に紹介する。

一、フェレンチーへの訣別の辭（在ベルリン、アイティンゴン稿）、――これは本年六月十三日、ベルリンに於けるドイツ精神分析學會のフェレンチー追悼會の席上に於ける演說の全文である。

一、フェレンチーを憶ふ（在ベルリン、ジムメル）――右のアイティンゴンの弔辭の後に述べられたもの。

一、行り損ひの際に於ける自我纒綿（在ギイン、P・フェーデルン）――自我に注意を集注してゐる際に、やり損ひをするのはどう云ふわけかと云ふ問題を考察したもの。

一、極幼兒の言動と動物の言動との比較（在チウリヒ、グスタフ・バリー）――その兩者を比較して自我發達の段階と意識發生の過程とを研究したもの。

一、身體影像と社會心理學（在ニウ・ヨオク、P・シルダー）――社會心理に於ける個人心理の要素の重要性を說いた論文で、獨創的な見地に富んでゐる。

一、精神分析と社會分析（在シカゴ、ラスウェル）――社會現象を觀察する方法に外的と內的とがある。從來は專ら外的方法でのみ觀察されたが、精神分析はこれを內的に考察する。その方法の特質を明かにせんとしたもの。

一、精神病の彫刻家（在ギイン、E・クリース）――ドイツ十八世紀の彫刻家メッサーシュミットの作品を分析したもの。

一、次に、新著批評があつて「マクドガルの本能心理學」に對するフリイデベルトの批評、佛人ブーヴィエの「精神分析論」の批評、畫家デューラーの畫作「メランコリー」に關するビウフの研究、その他廿餘篇の論文や著書に對する批評が揭げてある。

シカゴ研究所の活動

昨年十月三日に、シカゴに精神分析學研究所が創立せられ、診療部と教習部とを設けてゐるが、イリノイ州政府は、これを公認することゝなつた。幹部はステルン、アレクサンダ、ホルニイ、その他の人々である。現在では研究所の主なる興味は研究と教育に向けられてゐる。殊に身體的神經症を調査しつゝある。また神經症的條件に依る犯罪の問題に就いて調査しつゝある。現在に於いて三十六名分析。內十名、分析者分析。十九名治療分析。七名研究のための分析。

前年度、第四學期の講座表如左。

一、分析候補者及び分析實施者のため……。

講師、ホルニイ、技法講義、(聽講者十四名)

同　フレンチ、神經學、(聽講七名)

同　アレクサンダ、精神分析文獻研究(廿一名)

二、醫師のため……。

講師、アレクサンダ、精神分析と醫學(聽講廿七名)

同　メニンガ——、精神分析と精神病學、(同十五名)

三、社會學徒のために……。

講習、アレクサンダ(研究者廿二名)

×

なほシカゴ精神分析學會の會合に就いて、報告すれば——

一九三三年四月八日、ニウヨオクのジルボールグ氏同地に來り研究會に出席。「感動なくして生ずる不安に就いて」討議。

四月二十九日。ギイシのフェリクス・ドイチ氏同地に來着。「生物分析研究」。討議。

五月十三日。カーレン・ホルニ、「婦人の戀愛生活に屢々障害の起る所以。」討議。

六月十七日。ライオネル・ブリッツテン氏。臨床的研究に就いて。

同夜、事務會合あり。幹部選擧。前幹部再選。會長、ブリッツクステン氏。副會長、メニンガー氏。書記長兼會計主任アイスラー氏。

パリ精神分析學會

一月廿三日。フランス精神分析學者の第七年總會開催。ボーレル及びセナック氏「强迫」の問題に就いて報告。

二月二十二日。事務會合。一九三三年度幹部委員選擧。會長ボーレル氏。副會長オーディア氏。書記長ナハト氏。會計主任モルゲンステルン女史。

フランス精神分析學者の第八年總會は一九三三年九月末、ローザンヌに於いて、フルルノア氏を議長として、開催の事に決す。ソーシウル、ピアヂェ兩氏、幼兒の心理的發展に就いて研究發表。

三月廿一日。研究會。レーヴェンスタイン氏、エディボス・コムプレクスの新見解に就いて研究談。

最近國內事實

★江戸川亂歩氏創作『妖蟲』を『キング』に十二月號より連載
★『書置の事』福岡日々新聞、十一月中、田内長太郎氏稿。
★霜田靜志氏、十月廿日、丸ノ內中央會館に於ける感化教育講習會にて講義。
★『新英米文學』十一月號「エドワード・ウィルスンの象徴主義論」、名原廣三郎氏稿。
★『佛蘭西文藝』十一月號、「我等の對等者、その他」恒川義夫氏稿。
★『現代詩人』十一月號を「詩と精神分析」特輯とし、「文學の原始內容」大槻憲二氏、「イミテイション・サイコアナリシス」川上水夫氏、「わが儘」小林五郎氏等執筆。なほ「精神分析的文學藝術論文獻錄」を附す。
★杉田直樹氏は十一月十六日夜、『睡眠と夢』の題下に放送し精神分析學に論及す。
★十一月廿日朝日新聞「豆船艦」欄に於いて氷川烈氏本誌を批評す。
★本誌前號內容に就いては卷末總目錄を參照ありたし。

本研究所研究會十月例會

十九日午後五時半から、例に依り神田萬世橋驛前アメリカンベーカリ階上に開く。當日は『關東廳少年保護囑託』として少年感化事業を營んでゐられる某氏夫人某女史（同氏の事業上の都合に依り特に名を秘す）が出席せられ、その事業の經過や少年感化の經驗を語られ、出席者一同誠に有益な示唆を受けた。女史が五人の實子を抱えて、その傍、何等營利的でなくこの大事業を營まれる動機に就いては、一同感激驚嘆の外はなかつた。たゞその方法が學的根據に缺けたところがあるやうに感じて一二出席者が助言を試みたが助言者の說得にも不備な點があつた爲か、十分に意志の相通じなかつた點もあつたかに見受けられたのは遺憾であつた。女史は、少年等が愛玩する兇器、その變態的蒐集品、艶書・エロ雜誌等、種々興味ある參考品の寫眞を持參して見せられた。當夜は、殆ど女史の獨講に終つた。出席者は同女史以外に、伊東豐夫、長崎文治、田內長太郎田內貞善、長谷川誠也、霜田靜志、松居桃多郎、岩倉具榮、佐藤恭、大槻憲二、大槻岐美の諸氏であつた。

同十一月例會

十四日夜、例に依りアメリカン・ベーカリに開く。今夕は諸岡存、長谷川誠也、矢部八重吉の三長老の顏が合つたので、食前に、明治初年の讀書界の思ひ出話に花が咲き、如何にも愉快さうであつた。

食後長谷川誠也氏立つて、氏が近頃見學せられた根岸病院の

患者に就いての誠に興味ある話の數々が語られ、殊に幾十億の子供を持つてゐると妄想してゐる某婦人患者の話は、氏が得意の研究題目たる鬼子母傳說の心理學的根據を裏付けるものとして、甚だ貴重の材料で、これを發見した氏の喜びは、察するに餘りがある。

長谷川氏の話に關聯して、諸岡存氏中心となつて精神病者の治療經驗を語られた。その中に種々重要な示唆があつたが、そのその二三を擧げて見れば——

一、精神病は治療し得るものであること、

一、蕉腦細胞時代の經驗が、新腦細胞時代に乘移つて記憶されてゐること、

一、精神病因は心理的であり、幼時にあまり可愛がられ、社會と隔離せられて生活してゐた者が、成人後痴呆症になり易いこと。

一、從來の病理學は病歷（家族との接觸史）研究に疎にしてたゞ Oft Kummer und Sorge の四字を以て片付けてあるのは大きな誤、精神分析がこの點の調査に精しきは大きな功績、

一、痴呆者の治療にも現實社會との接觸をはかるべきこと。などであつた。その他出席者諸氏はみな有益な話材を提供せられ、誠に興味ある一夕であつた。出席者は右三氏の他、霜田靜志、岡田保雄、則近保良、下山善高、佐藤基、岩倉具榮、大槻憲二、大槻岐美、松居桃多郞、朴永鎭、小松德、長崎文治、小野田幸雄の諸氏であつた。なほ小山良修、古澤平作、吉村森三郞の三氏から丁重な缺席挨拶があつた。小山氏の手紙は通信欄に掲げておいた。

相談

怨みある主家へ

問——

私は廿歲になる或小さな町の病院の看護婦でございます。十七歲の折或藥屋に見習ひに參りましたが、行つて三ヶ月程たつて後主人に處女を奪はれて了ひました、然し未だ子供の事とて唯恐ろしい一心でどうする事も出來ず、かうした關係が五ヶ月許りつゞきましたが、主人は何んとも云はず約束もしてくれないので、私の體に間違ひのない中にとだまつて主家を逃げ出しました。

其後病院に入り看護婦の免許證もとり元氣で働いて居りますが、最近元の主家の奥さんが大變目が惡くて困つて居られる事を聞きました、憎い主人ですが奥樣には何の恨みもなくお見舞に行きたいのですが、實家では逃げ去つた主人はお見舞の必要はないと申します、もう四年も音信不通で居りますがお話した

い事は山程もあり、どうしてもお逢ひしたいのですが如何でせうか。主人に逢つた時は何んな態度をとり、どんなお話をしたら宜いでせう。私の取るべき道をお示し下さい。（××とし子）

答——

普通新聞雜誌の相談に於いては、質問者の云ふことは、全部嘘がないと云ふことを豫想して、返答することになつてゐますが、こちらでは一應疑つてかゝります。無論、質問者自身でさへ意識しない程の嘘をです。

で、卒直に云ひますが、怒らないで（抵抗を起さないで）下さい。臨床分析ならもつと抵抗を避けるやうに出來ますが、誌上相談では已むを得ません。貴女はその主人に怨みもあるが本當は未練もおありでせう。本當に嫌ひなら、第一、處女を奪はれることはありませんし、それにその上五ヶ月もその關係を持續してゐられることは、明かに貴女の方にもその意志があつたことを證明してゐます。他のこれに類似した無數の場合（主人夫妻と傭人との間に於ける三角關係、卽ちエディポス的場合）に於けると同じやうに……。

今となつて、貴女は目の惡くなつた奧樣を見舞ひたいと云はれますが、もし主人を貴女が本當に嫌つてゐるなら、そんな危險を犯してまで出掛けて行くほどの恩義を貴女は奧樣に受けてゐるかと疑問になります。それほどの恩義を受けてゐるなら、主家を出る時もつと惱みがある筈ですし、それに四年間も音信不通でゐられる筈がありません。最近失明しさうになつて急に恩を感じ出したと云ふことも不審であります。

で、卒直に云ひますが、怒らないで下さい。貴女は奧樣が失明しさうになつたので、これを好機として主人と元の關係に入りたいとの下心がおありになるのではありませんか。いや、それを私は批難するのではありません。御尤とさへも思ひます。何故なら、無償で處女を提供してそのまゝ別れてゐると云ふことは、損得から云つても全く馬鹿々々しいことですからね。貴女が舊主人に對して怨みと未練と、愛着と復讐心とを交互に感ぜられるその惱ましい矛盾葛藤の心境に對しては、私は他の如何なる種類の相談答辯者よりも、よく理解し、よく同情してゐるつもりです。貴女は右に私が述べたやうな底意を持つてゐながら、奧樣のお見舞を口實にして、出掛けて行くことの不安と良心の咎めとに惱んだ揚句、私のところへ相談を寄越されたものと察せられます。

私は行けとも行くなとも、右の手紙では申上げかねます。一つには貴女の主人に對するお心持次第にも寄ることですから……。併しとにかくまだ奧樣がゐる家のことですから、まづまづこれは冒險に過ぎて、貴女の將來を幸福にするよりは一層不幸にする可能性の方が多いのではないかと感ぜられます。一先づ分析を受けて、十分に貴女の父コムプレクスを取除いてからにしないと、貴女はまたさう云ふ失策を重ねられるのではなからうかとの不安が感ぜられます。（記者）

通信

無沙汰を詫びて

小山良修

前略、毎度御案內いたゞきまして誠に有難う御座います。益々盛大にて何よりに存じます。又雜誌も、毎號たのしみに讀んでゐます。毎回例會に今度こそ〳〵と思ふてゐながら、どうしたのか運惡く、他の會とぶつかり勝ちです。今回の十四日も他に約束したので誠に申譯ありません。

精神分析につきましては相變らず不勉强にて、どうも進展した考へが出ないのでありますが、興味は誠に甚大です。先日もこのことにつきまして、目下、松澤病院の醫局長をしてゐる、私の友人といろいろ話をしましたが、なか〳〵面白かつたのです。最近では同級卒業の內村祐之君が、アイヌの奇病「イムの話」を朝日新聞（十月卅一日以降）にのせてゐましたが、精神分析にうつてつけの材料ではありませんか。そうかと思ふと、山窩物語（鳩椋十氏著鷲の歌）をよんでゐると人間の原始的感情動作の妙味、なか〳〵よい材料ではないでせうか。かうした一寸、一般むきではありませんが、こまかいセンチ向きな滋味な話題も例會できつと飛び出してゐる事と思ひますので、出席

したいとは常に思つてゐますが、どうも運わるく申譯ありません。みなさまへもよろしく御願ひいたします。

十一月十一日

（KO氏宛）

編輯後記補遺

これで本誌もいよ〳〵第一卷を終ることになります。創刊以來、今日までの苦闘のあとを顧みて、萬感の胸に去來するを禁じ得ません。本誌のために數々の充實した論文を寄せられた執筆者諸氏、並びに本誌を支援せられた滿天下の熱心な讀者諸氏に對して滿腔の謝意を表すると共に、來るべき年に於ける新たな後援を切に希望願いたします。本誌の使命は昭和九年度に於いて愈々重きを加へるからであります。

編輯後記

巻頭フロイドの論文は、分析學を相當に理解してゐる人々なら一寸目を見張る課題である。精神分析學は科學であるから、神祕的な心靈現象などてんで相手にすまいかと思はれるであらうが、フロイドが如何に「事實」に對して公平忠實な態度をとるものであるかは、この論文を見ても分ると思ふ。フロイドは學者としては勿論、人物としても相當なるものであると我等は平生から考へてゐる。流石に「學者の小心」（本誌第六號時評欄參照）だけは持合せてをらぬやうだ。

たゞ遺憾なのは、この論文があまりに長くて本號にその三分の二ぐらゐしか載せられなかつたことだ。が、この部分までゞ大體フロイドの云はんとするところは分るが、なほこれから問題は一層深いところに觸れて行く。第三次夢の研究特輯號まで我慢せられむことを讀者諸氏にお願ひし、お詫びしておく。

×

例に依り執筆者の新顔を御紹介いたします。實は下山善高氏は新顔ではなく、第五號に既に執筆してゐられるのだが、編輯子の不注意で、紹介洩れになつてゐましたから、改めてこゝに紹介いたします。同氏は、日本大學心理學科に在學中の人である。氏は、定評ある Geraldine Coster の夢の論に據つて、この講座を担任せられた。たゞ、年少任重しとの謙讓な考へから、大槻氏に乞ふてその原稿に對して嚴重な校訂を受けられたから、讀者諸氏はその義諒承せられたい。

西洋の夢の語源に就いて執筆された岩倉具實氏は、本誌讀者諸氏には既にお馴染の具榮公の令弟に當たられる方でありまして、言語學を專攻してゐられます。東京帝大言語學科卒業、目下文部省に勤務せらる。

×

今度から「雜話」欄と云ふのを新設しました、本號では相當固い文章も這入つてゐますが、今後はもつと碎けた自由な欄にしたいと思つてゐますから、讀者諸氏も日常觀察せられた興味ある事實をドシ／＼御報告ありたい。分析學は從來の人々が屑とし捨てた些末な事實の中から千金の眞理を發見し來るものだと豪語してゐる。だから、この欄を大いに尊重したい。

×

奥本氏は遠隔の地に一人で研究しながら、自分の夢をよくこれまでに分析せられたと、編輯部員一同感嘆しました。

「エディポス型の夢」を報告せられた春田禮人氏は新居格氏の門下であるとか。目下病臥中と聞く。その快癒の早からむことを祈願――分析者として氣のさす言葉だが――する。氏は自分の病の重いことを誇りにしてゐる部類の人であるやうだ。

×

特別誌友を募集します。その義務としては本誌を直接購讀して頂くことだけであります。誌友に對しては本誌は種々特別の便宜を圖らひます。（前頁へ續く）

「精神分析」合本 豫約募集！

第一卷 第一册（五月創刊號から八月號まで）
第一卷 第二册（九月號から十二月號まで）

（一年十二部を三册に分ち四部を以て一册とす。）

總布裝美本 各册（定價 三圓 送料 ナシ）

單册は――携帶に、書入れに、素讀に………

合本は――書齋に、精讀に、保存に………

總目錄は毎卷最終册尾に附けます。

研究所事業案内

一、分析部
● 神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄想症、その他）
● 性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）
● 客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし。

二、敎育部
● 當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。
● 所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

三、出版部
精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

四、研究會
毎月一回開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を別に申受く。）

五、講習會
毎月一回、於研究所開催。その都度通知。會費五十錢。

昭和八年十一月二十五日印刷
昭和八年十二月 一 日發行
第八號
定價五十錢（郵稅一錢）

東京市本鄕區駒込動坂町三二七
編輯及發行 大槻憲二
東京市牛込區改代町廿四
印刷所 理想社印刷所

定價一部 五拾錢（郵稅一錢）
半年分 參圓（送料共）
一年分 六圓（送料共）

御注文規定

● 本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
● 御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、**振替口座東京七八八一七番**へ御拂込み下さい。
● 郵券代用の場合は一割增に願ひます。
● 本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本鄕區駒込動坂町三二七
發行所 **東京精神分析學研究所**
振替口座東京 七八八一七番

大賣捌所 東京堂・東海堂 大東館・北隆館

來月號豫告

心理療法研究號

精神分析學は一面、深部心理學として純粹の心理學であると共に、他面一つの新しい心理療法としての實用性を具へてゐることは、斯學の重大なる特異性となつてゐます。本誌は讀者諸士からの熱心な希望に基き、この方面に於ける斯學最近の業績を研究し紹介したいと思ひます。
只今のところ、執筆を約束せられた方々は左の諸氏であります。

精神病治療は可能なり……諸岡存
精神分析學治療論……古澤平作
不安神經症に就いて……早坂長一郎
分析治療と男根期……高水力太郎
ステーケルの療法……伊東豊夫
フェレンチーの緩和法……大槻憲二
或る喧嘩の心理……則近保良
心と醫學(リヴズ)……岩倉具榮譯
死の救濟と寺院演劇……松居桃多郎
グラディーヴ(イェンゼン)……田内長太郎譯

その他時評、講座、雜話、資料などの諸欄は愈々精彩を發揮し、また新年號に因んで何かと興味ある目論見を立てゝゐます。

大槻憲二著

精神分析概論

定價三十錢　送料四錢

本書の四大特色
一、斯學の組織的知識を與へること
二、具體的例を入れ興味的に說ける事
三、簡明にして要を得やすいこと
四、現代日本人が讀者たるを忘れぬ事

第一章　精神分析とは何か
(1)無意識の發見、(2)夢の解釋、(3)無意識と精神症、神經症
第二章　精神分析の機能
(1)病氣の治療と記述、(2)各種の理論、(3)理論の應用
第三章　超心理學としての精神分析學
(1)動的見地、(2)局所的見地、(3)經濟的見地
第四章　精神分析の發達
(1)シャルコー及びジャネー、(2)フロイドの史的地位及び特徵、(3)ユング、アードラー、その他、(4)國際學會と研究機關
第五章　精神分析研究手引
(1)我が國に於ける研究史及び文獻、(2)術語表解

本研究所出版部・取次
振替東京口座七八八一七番、郵券割增無用

「精神分析」第一巻總目録

第一號（創刊號）　昭和八年五月

同　七月　第三號（教育研究號）

——「精神分析」第一卷總目錄終——

フロイド精神分析學全集

（第一卷）夢の註釋　定價一圓五十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第二卷）日常生活の精神分析　定價一圓七十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第三卷）社會・宗教・文明　定價一圓八十錢　送料十二錢　長谷川誠也　大槻憲二譯

（第四卷）快不快原則を超えて　定價一圓五十錢　送料十二錢　對馬完治譯

（第五卷）性慾論・禁制論　定價一圓七十錢　送料十二錢　矢部八重吉譯

（第六卷）分析藝術論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第七卷）トーテムとタブー　自我とエス　定價一圓八十錢　送料十三錢　矢部八重吉譯　對馬完治譯

（第八卷）分析療法論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第九卷）分析戀愛論　定價一圓八十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第十卷）精神分析總論　定價二圓　送料十二錢　大槻憲二譯

東京市日本橋區通三丁目八番地　春陽堂書店　電・日本橋・五一一番　振替東京一六一七番

藝術殿

坪内逍遙博士每號執筆

十二月號（第三卷第十二號）

要目

一部　定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯　財團法人　國劇向上會　東京市淀橋區戸塚一丁目　振替（東京）二〇二九〇番

發行　梓（あづさ）書房　東京市神田區駿河臺町一ノ八　振替（東京）七八六四四番

矢部八重吉著「精神分析の理論と應用」

定價一・三〇
送料〇・一二

早稻田大學出版部

神經症　精神症　境界症
惡癖矯正　性格改造　等のための

精神分析治療應需

國際精神分析學會日本支部分析寮
（入寮分析受療の便あり）

東京市大井元芝町八二五
電話高輪一九五七番

分析擔任　矢部八重吉

精神分析學診療所

診療科目

諸種疾病ノ診斷及治療
性格素質ノ審査及矯正
精神衛生ノ相談及指導

診療ハ特ニ
神經衰弱、ヒポコンデリー、不安性神經症、性障礙、ヒステリー、
强迫觀念症、恐怖症、不眠症、心臟神經症、憂鬱症、偏執病、
輕度早發性癡呆症、性格異常等。

醫學博士　古澤平作

東京市世田谷區東玉川町三五八七
田園調布驛東口下車
電話田園調布一〇三二番

診察時間

午前七時——正午（主トシテ外來）
午後一時——五時（主トシテ往診）
但シ日曜ハ午前中、祭日ハ休業

"Fujii's Therapeutic Instrument for Nervous Disorder."

Invented by Dr. Momotaro Fujii.
Patented in Japan, England, Germany and France.

good for any kind of illness.
simple and easy to manipulate.
giving no pain, leaving no scar.

Health or illness solely depends on one's nervous condition!

The perpetual use of the instrument will make one's nervous state normal, and gradually strengthen the natural power to recover; hence the happiness and rejoice of millions of people since the advent of the instrument, though it is not very long ago.

Price for one set : Yen 38.00
Parcel fee for Japan Proper; Sen 45.
··············Japanese Territories: Sen 75.

Notice : —A booklet of directions for, and explanation of the effect of, the use will be sent gratis, when applied with postage (Sen 4) to——

Jitsugio-no-Nihon-Sha, Sales Dept.,
Nishiginza I chome Kiobashi-ku, Tokio Japan.

神經ガ正調ナラバ疾病ハ無イ

本器ハ全身ノ神經ヲ整ヘ自然治癒力ヲ增シテ疾病ヲ治シ、又健康ヲ增進セシム。

本器ハ發賣日尚ホ淺キニ拘ラズ、各家庭ニ浸潤シテ、幸福ヲ齎シツヽアリ。

藤井物理療法本院長 **藤井百太郎先生發明**

日英米佛獨專賣特許

藤井療器

特徴

萬病一器
効驗確實
使用簡便
無痛無痕

定價 三十八圓

送料 內地四十五錢 領土七十五錢

（本器ノ說明書及各方面大家ノ推賞文ハ郵券四錢封入申込次第送ル）

發賣所

東京市京橋區銀座西壹丁目

實業之日本社代理部

振替口座・東京・六四五〇番

昭和八年七月七日 第三種郵便物認可
昭和八年十一月廿五日印刷納本
昭和八年十二月一日發行
毎回一回一日發行
精神分析 第八號
定價金五十錢 郵税一錢

I. Jahrgang, Heft 8, Dez. 1933. Erscheint monatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(II. **Sonderheft fur Traumstudien.**)

Inhalt

Preis des Einzelheftes 50 Sen.

Tokio Psychoanalytischer Verlag,
327, Dozakacho, Hongo-ku, Tokio Japan.